

我が名はスタースク
リーム

雑草弁士

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ある時、不運な男が不運な事故で死んだ。しかしてその魂は、遙か時空を隔てた某ニユリーダーへと憑依する……！生き残るための、彼の戦いが今はじまる！

いや、前作を完結して引き続きその追加エピソードか、滞っている別作品を書こうかと思つたのですが、まだ微妙にスランプ気味なので、温めていた別ストーリーを書いてしまいました。いや、つつい……。

※R-15、残酷な描写、アンチ・ヘイトの各タグは保険です。

目次

第1話：目覚め	1	第11話：対決、メガトロン！	143
第2話：なんか俺、嫌われてる	20	第12話：カセットトロン哀歌、そして……	158
第3話：さらばデストロン軍団	34	第13話：更なる新戦力と、古き知人と	170
第4話：慟哭	47	第14話：電腦ダイブ、ただし俺じゃない	184
第5話：セイバートロン星への帰還	61	第15話：侵攻！侵攻！	197
第6話：新たな仲間たち	75	第16話：セイバートロン星解放	209
第7話：新たな仲間とかつての仲間	88	第17話：スカイワープ	221
第8話：貸し借りの清算	101	第18話：新しき旧敵	241
第9話：頭痛のする日常	118		
第10話：NAIL旗揚げ……あれ？			

第19話：ガルバトロンのあがきと

256

第20話：ユニクロン襲来 ————— 270

第21話：湧き上がるパワー ————— 289

第22話：白常だつてのに、なんでこうも

大変なんだ ————— 309

第23話：研究がしたいです ————— 320

第24話：休戦とか色々 ————— 330

第25話：アニメに無い事件 ————— 342

第1話：目覚め

人員整理で会社をリストラされ、次の就職先も見つからない。気分は鬱々とし、やる気が出ない。公園のベンチに腰掛け、俺は溜息を吐く。

(はあくあく。なんとかこの状況から逃げ出せないもんかね。)

俺は心の中で呟く。状況を「打破する」ではなく「逃げ出す」と言う時点で駄目駄目なのは重々理解している。だがそれでも、この鬱々とした人生から逃げ出してしまったかった。まあだからと言って、自殺するような勇氣は無い。死ぬのは怖かった。

「……ん？」

ふと俺は空を見上げる。そして次の瞬間、俺はそれを後悔した。空なんか見上げなければ良かった。そうすれば、恐怖に捉われる事無く、何も知らずに死ねたものを。

俺の視界には、きりもみしつっ俺めがけて落下してくる、自A隊のジェット戦闘機が、どアップになって映っていた。そして次の瞬間、凄まじい衝撃を感じたと同時に何もわからなくなった。

そして俺は目覚めた。気を失っている間、何かエネルギーの渦の中にいた様な気がす

る。俺はとりあえず、全身にチエックプログラムを走らせた。動力系、異常無し。駆動系、異常無し。頭脳回路を含む制御系、異常無し。……いや、異常あるだろ。なんで俺、自分の身体を調べるのに、サラッとチエックプログラムなんて走らせてんだよ。

……!? な、なんだよこの右手は!? ロボットの手!? 左手も同じ!? 足もロボットの足になってやがる!? な、何が起きた!? たしか自A隊の戦闘機が落ちて来て……。いや、違うぞ!? 俺たちは宇宙へエネルギー探査に出たサイバトロン陣営を追って戦艦『ネメシス』でサイバトロン星を出撃、サイバトロンの宇宙船『アーク』に接舷してその中で戦って、結局惑星に墜落したんだ……。

って、ソレはG1トランスフォーマーの第1話……!?

「おい、さっさと起きやがれ。後がつかえてんだ。」

「あ、ああ。すまないスカイワープ。」

「!? あ、謝った、だど!? スタースクリームが!」

え。いまなんておっしゃいましたかね、スカイワープさん。って言うか、サラッと条件反射的にスカイワープの名前が出たのも我ながら驚きだが、ソレよりもこのスカイワープ氏曰く、俺の名前が……?」

えっと……。スタースクリーム? 俺が? あの自称ニューリーダーの? 自分で自分を二枚目だとか言っちゃう、あの? アニメの? トランスフォーマーG1の? え? え? えええ

えっ!?

「俺が謝ったら、何か変かよ。それよりか、さっさとサンダークラッカーを起こしてやる方が先だろうが。」

「……あ、ああ。わ、わ、わかった。」

とりあえず表面だけ取り繕った俺だったが、内面はとことん混乱していた。俺は死んだ……死んだと思う。だがその靈魂と言うか何と言うか、それが時空を超えてスタースクリームのボディに憑依した?

いや、単純な憑依じゃないな。俺には俺がスタースクリームだと言う実感がある。俺の魂がスタースクリームのパークを取り込んだのか、それともスタースクリームのパークに俺の魂が取り込まれたのかは知らんが、両者は完全に融合しているみたいだ……。

「フッフ、貴様を生命再生装置にわざわざ運んでやった、このわしには何もなしか? スタースクリーム。」

「うわっ!?! あ、い、いえ! 畏れ多い事です。感謝しかありません、メガトロン様。」

「分かれば良い。遊んでおらんで、貴様も皆を生命再生装置に運ばんか!」

「はっ!」

あーびつくりした。いたのかメガトロン。いや、アニメでは確かスカイワープは、メ

ガトロンを最初に起こしたんだったな。居て当然か。俺はあわててブリッツウイングを生命再生装置に運ぶ。重いんだよ、コイツは。まったく……。

サイバトロンの宇宙船『アーク』から、再生なった俺たちデストロン軍団は離脱し、近場の岩山の上に降り立った。メガトロンの感慨深げに宣う。のたま

「長い年月が過ぎ去った。故国セイバートロンは遥か彼方だが、この惑星でもわしらの目的は変わらん。」

「セイバートロンはまだ存在してるでしょうか。」

スカイワープが心配そうに言った。つて言うか、スカイワープの方が副官みたいだな。まあいいんだけどな。俺は副官とN.O. 2を兼ねてるけど、副官的な仕事は……ああ、色々やつてるか。あ、勘違いしてる奴も多いが、副官はN.O. 2じゃなくて、指揮官のあくまでサポート役なんだよな。

あ。メガトロンのスカイワープに答えた。

「存在しておるとも。だがこの地球とやらにも豊かなエネルギー資源があるのなら、無敵の兵器を造ることも可能。そうすればわしは……余は、宇宙の覇者だ！」

ここで俺は、メガトロンの進言してみる事にする。いや、俺はアニメのトランスフォーマーではコンボイのファンだったけど。でも今の俺はデストロンだ。心の中

にスタースクリームなりのデストロンへの愛着もあるのが、はつきりわかる。

「今のうちに、コンボイたちを完全に始末してしまつた方が安全では？せめてテレトラ
ニーだけでも破壊してしまえば、万が一にも奴らは再生リペアされしません。」

「かまうな、エネルギーを無駄にするな。これからも戦いはあるのだ。宇宙征服のな。
行くぞー！」

「……了解です。」

アニメでは、俺が撃つたからそのショックで、コンボイが生命再生装置に転がったん
だったな。何もしなければ、このままコンボイはスクラップのまま、か……。

「それもいい、か。あばよコンボイ。」

俺は飛び立ったメガトロンを追って、大地を蹴って飛翔した。

そして荒野の上をしばし飛び、適当な場所を見つけたらしいメガトロンは地上へ降り
た。俺と他のデストロンも、それを追う。

「ここに基地を構えよう。あの岩地にわれらの司令本部を設置するのだ。サウンド
ウエーブ、お前は至急宇スペースクルーザー宙船の設計にかかれ。スタースクリーム、お前は建設用地の
整備だ。」

「資材はわたしの裁量でかまいませんか？」

アニメでは、「資材はどうするんです？」って聞いて「そんな事ぐらい、自分で考えろ！」って怒られたんだっけな。とりあえず、怒らせる事もあるまい。

「任せる。」

「はい、では……。」

周囲を見回した俺は、発電所を発見した。

「あれにするか。だが俺だけじゃな……。サウンドウエーブ、ランブルとフレンジーを貸してくれねえか？」

「リョウカイシタ。ランブル、フレンジー、イジーエクト！」

サウンドウエーブの胸板が開き、そこから2つのカセットが飛び出した。そしてそれらは、ギョガゴゴと変形して2体の人間よりもちよつと大きいかって程度の人型ロボットへ変わる。

「すまねえな。」

「!? ス、スタースクリームガ、礼ヲ……。」

「し、しんじらんねえ！」

「お、おい。俺の聴覚マイクロホンが壊れてないか、みてくれねえか!？」

「てめえら……。」

俺はそんなに酷かったか!? ……いや、今「スタースクリーム俺」の記憶をチェックしてみたけど、酷かったな。これじゃ人望ねえのも当然だ……。

「まあいい!行くぞフレンジーにランブル!運んでやるからカセットモードでコクピットに入りやがれ!」

「な!?!の、乗せてくれるってか!?!」

「う、嘘だろ!?!」

「いいから乗りやがれ!てめえらには、向こうで働いてもらわにやならないんだ!手前らのエネルギー残量に余裕もたせといて、何が悪い!トランスフォーム!!」

そして俺はランブルとフレンジーを乗せて、地球人どもの発電所に向けて飛び立った。

やつぱりサイバトロンの連中は来なかった。俺が手だししなかったから、リベア生命再生されなかったんだな。デストロン司令本部は、さくつと完成する。そしてサウンドウェーブが派遣したコンドルが、地球のエネルギー資源を見つけて来た。それは海底油田基地……スパイクとスパークプラグの親子が働いてる場所だったな。

今、俺たちデストロン軍団はその海底油田基地を目指し、飛行中だ。メガトロンが叫ぶ。

「降下しろー！降下ーッ!!」

俺たちは海底油田基地の、海上に突き出ている施設部分へと降り立った。そこにいる作業員たちは一瞬驚いた様だが、俺たちが不法侵入者であるためか、追ひ払おうとその辺の工具やら何やらを投げつけて来る。

「やれやれ……。」

いや、その程度の攻撃は痛くもなんともない。少々鬱陶うっとうしいだけだ。メガトロンもそう感じたのか、その辺に積んであつた直径1mぐらいの金属管を拾い上げると、ほいと投げつける。あわてた作業員たちは転がる金属管に追われて海へと飛び込んだ。

「スタースクリーム、ナルビームを発射しろ。早く。」

「了解です、メガトロン様。」

俺は指示通りナルビームを発射、海底油田基地のシステムを停止させる。メガトロンは続いてサウンドウェーブにエネルギーを命じた。サウンドウェーブが造り出した力フォースフィールド場の枠に、他のデストロンが原油を注ぎ込んで行く。そして圧力をかけて凝縮させると、エネルギーキューブが完成だ。

「おお、成功だ!」

「おおー!」

「うむ、この調子で地球全土のエネルギーを我が物にするぞ。うはははははははは。」

俺たちは備蓄分の原油を全てエネルギーキューブに変えると、それを持ち去った。海に浮かんだスパイクとスパークプラグの親子、そして他の作業員たちが、悔し気な顔をする。ちよつと胸どつりよくせうちが痛んだ。いや、俺はデストロンだ。まずは俺がデストロン軍団の中で生き抜く事を考えるんだ。

あの後も、俺たちデストロン軍団はエネルギー強奪を続けた。サウンドウエーブの命令でコンドルやバズソーが調べて来た情報を元に、あちこちからエネルギーを強奪してはエネルギーキューブを造り、基地に持ち帰ると言う繰り返した。ルーチンワーク

サイバトロン連中がいないので、全ては順調だった。襲撃中に地球人の軍隊が出て来る事はあったが、はつきり言つて鎧袖一触だ。相手にもならない。だが、俺は思う。こゝう言う時こそ、注意に注意を重ねなければならぬ。全てが順調な時こそ、気のゆるみから何か失敗を犯しかねないのだ。

そしてやはり、事故は起きた。

「メガトロン様。エネルギーキューブの抜き取り検査を行いたいと思いますが、許可をいただけますでしょうか。」

「抜き取り検査だど？ いらんいらん。そんな事をせんでも、キューブは完璧だ！ 検査で消費されるエネルギーキューブの数が幾つになると思う！ それを行えば、セイバートロ

ン星への帰還が襲撃1回分遅れてしまうわ。」

「了解です。しかしこの地球は、エネルギーが豊富です。継続的に襲来して、エネルギーを奪うべきかと。」

「……俺も、すっかりデストロンだな。襲撃の中心が、俺たちが400万年前に墜落した米国であり、並行異世界とは言え故郷の日本でないってのもあるんだろうが。」

「その様な事は、あたりまえだ。貴様に言われずとも、わしの頭の中では計画が立案されておるわ!」

「は。了解です。」

言われ無きや、わかんねーよ。メガトロンは部下に厚く寛容で、理想の上司ではあるんだが……。部下をとくに頭脳面で信用せず、心の内を明かさないと、言う点がある。俺がそう思った、その時だ。

ドガアアアアアン!!

「なんだ!?!」

「音からして、爆発事故の様です!音がしてきたのは……エネルギー貯蔵庫!」

俺たちが急ぎ向かい、エネルギー貯蔵庫に走り込むと、その片隅でサンダークラッカーが左腕がもげるほどの損傷を負って、倒れ伏していた。他のデストロンどもは、オロオロしている。どうやらキューブの爆発事故があった模様だ。

「何があった！サウンドウエーブ！」

「メガトロン様……。サンダークラッカーガ、エネルギーキューブヲ運搬中、取り落トシタ。運悪ク、電線ノ上ニ。電線ノ被覆ガ剥ガレ、エネルギーキューブニ引火。周囲ノエネルギーキューブヲ卷キ込ンデ、爆発シタ。」

幸イ周囲ハ、キューブヲ運ビ出シテイタ最中ダツタ。爆発規模ハ、大キクハナカッタ。」

「く、失われたエネルギーキューブの数は！」

「正確ナ数ハ調査中。ダガ20〜30個ハ失ワレタ。」

「この……！」

そしてメガトロンは倒れたサンダークラッカーに歩み寄ると……。

「大馬鹿者めが!!」

「ぐわあつ!!ぐ、お、お許しをメガトロン様……。」

大怪我を負ったサンダークラッカーを引き摺り起こしたメガトロンは、右腕を振り上げた。俺はそこに声を掛ける。

「お待ちを！メガトロン様！」

「止める気か!? スタースクリーム!! だがな、こやつのおかげでせっかく集めたエネルギーキューブが多数失われた! しかも単なる不注意で、だ！」

「それは分かっております。しかしサンダークラッカーはジェットロン部隊。わたしは航空参謀で、ジェットロン部隊の指揮官です。サンダークラッカーの不始末は、わたしの監督不行き届きです。責任は、わたしに……。」

「そうか！ならば貴様が代わりになると言うのだな！」

「はい。」

バキイイイッ!!

次の瞬間、サンダークラッカーを放り出したメガトロンの文字通り鉄拳が、俺の顔に叩き込まれた。激痛。俺は必死で踏みとどまる。2発、3発、4発。5発目で、俺はとうとう耐えられずに尻餅をついた。だが、それじゃ駄目だ。俺は再度必死で立ち上がる。そこへ更に6発目。7発まではなんとか耐えた。だが8発目で、俺は床面に沈む。それでも腕を動かして、なんとか立ち上がろうとした。だが力が入らねえ……。

「……ふん。このぐらいにしておいてやるわ！いいか、今後はこの様な事故など起こさせるな！」

「……肝に命じまして。」

なんとか顔だけ上げて、俺は応える。目の前をメガトロンの足が過ぎ去って行く。どうやら出て行った様だ。他のデストロン兵士どもは、遠巻きにして近寄って来ない。と
言うか、なんかボソボソと言う声は聞こえる。

「す、スタースクリームが……。」

「サンダークラッカーを庇った？」

「それも身を挺して……。」

五月蠅うるせえよ。そんな話はなしをしてるぐらいだったら、俺たちを助け起こすぐらいしやがれ

……。

「ぐ、くううつ……。」

俺は軋む身体に鞭打って立ち上がると、メガトロンから放り出されてへたり込んでいる左腕が取れたサンダークラッカーを助け起こした。右腕で助け起こしたので、左手で奴の左腕を拾う。

「す、スタースクリーム……。」

「修理室リペアルームに行くぞ。まず手前てまえを治療リペアしてやるから、終わったら俺の治療リペアをしろ。いてて、

あのパンチは効いたぜ……。」

サンダークラッカーを担いだ俺が歩くと、遠巻きにしていたデストロン兵士たちはざざつと左右に分かれる。その視線が、なんか妙な物を見た、とでも言いたげなのが気に障る。

「す、すまねえスタースクリーム。」

「おうよ。せいぜい恩に着ろ。」

「け、けどなんで俺を？」

「^{てめえ}手前はこれでもジェットロンの重要な戦力だ。こんな重傷でメガトロン様に殴られてみる。死んじまう。」

「すまねえ……。」

そしてサンダークラッカーは言葉を続ける。

「けどよ……。なんで？なんでだ？昔のお前だったら……。」

「見捨ててた、つてか？ふん、400万年の眠りで、頭脳回路になんかバグでも起きたのかもな。」

いや、頭脳回路どころかスパークのレベルで、なんか異常が起きてるんだがな。俺たちは、よろよろと修理室^{リペアールーム}へと歩いて行つた。

そして俺たちは、襲撃とエネルギー強奪を続けた。サンダークラッカーの件は、ある意味いい刺激になった様だ。万が一にも事故を起こさない様に、それまでであった気のゆるみが引き締められたのだ。今、俺たちはルビークリスタル鉱山に來ている。

ちなみにメガトロンは、サウンドウェーブの言つた、ここだけでセイバートロン星の全エネルギーを賄えそうだと言う台詞にウハウハだ。掘り出したルビークリスタルを手で^{すく}掬つては自分の身体に浴びて、ご機嫌そうだ。いや、せっかく掘つたルビークリス

タルが無駄になるから、やめてくれよ。

そんな時だ。坑道でエネルギーコンキューブを運んでいたスカイワープとサンダークラッカーが、突然もどつて来た。

「どうしたんだ、お前ら。」

「スタースクリーム！これを見てくれ！」

「こ、これは！」

意気揚々と2人が見せたのは、サイバトロン戦士のミニボット、バンブルともう一人、人間……地球人の技術者、スパークプラグだった。なんで宇宙船『アーク』でスクラップになつてははずのバンブルが……。何かの原因、たとえば地震とかでサイバトロン戦士の誰かが生命再生装置に転がり入ったのか!?

その時俺の脳裏に、アニメでバンブルが爆弾をルビークリスタル鉱山に仕掛けたシーンが過ぎつた。ヤバイ!!

「お、おいスタースクリーム何処へ……。」

「お前らはメガトロン様に報告しろ！もしかしたらこいつは、爆弾を仕掛けたかもしれん！」

「な、なんだって!?!」

スカイワープの叫びを後目に、俺は必死で駆ける。たしかアニメでは、鉄骨の陰に仕

掛けていたはず……。何処だ、何処だ!?……あつた！爆発まであと15秒！俺はレーザーで鉄骨を焼き切り、それを持って必死で走る。12、11、10、9……。
「でええええええい!!トランスフォーム!!」

坑道の出口目掛けて爆弾が貼り付いた鉄骨を投げて、俺はトランスフォームして逆方向、坑道の奥へと全力で飛んだ。すげえ狭い。ぶつかりそうだ。そして爆発。俺は再度トランスフォームして側道へと逃げ込む。爆風が吹き抜けた。

「た、助かった……。!!……そ、そうだ！サイバトロンの連中が来ているはず！」

俺は坑道の出口目掛けて、再度走った。そして外に出たとき見た物は、崖から落ちたコンボイが、必死になってトランスフォームしている姿だった。

「ト・ラ・ン・ス・フオ・オ・オ・ム!!」

ギゴガゴギゴゴゴ……。

「おお、やったー！」

「たいした怪我も無く、ご無事の様でなによりです！」

……やっぱりコンボイのデザインは、かっこいいなあ。俺、ファンだったんだよなあ。抜けてるけど、熱くて仲間思いの性格とか。いやダイノボットとか破壊しようとしたけど。

「す、スタースクリーム!?!」

「ほおう、どうやって復活したのかわからんが、400万年の眠りからの再生、おめでとうコンボイ。そしてサイバトロン諸君。惜しみない拍手を送ってやろう。」

俺は嫌味つたらしく拍手を送る。そこへメガトロンが、軍団を率いて出て来た。皆、エネルゴンキューブを持っている。

「スタースクリーム、珍しく役に立ったな。ほほう、コンボイか。久しぶりだな。」

「黙れメガトロン！破壊大帝とはよく言ったものだ。今ここで雌雄を決し……。」

「まあ待てコンボイ。このルビークリスタル鉱山には、時限爆弾による自爆装置が仕掛けてある。」

「なんだと!？」

「そうなれば、捕らえてある貴様の部下の黄色いちっこい丸っこい奴は、どうなるかな？ああ、それと人間も1人おったな。」

サイバトロン連中は、ワイワイガヤガヤと叫ぶ。

「人質とは汚いぞメガトロン!」

「そうだそうだ!」

「正々堂々と戦いやがれ!」

いや、爆弾で破壊工作かけてきたの、君らだよな？しかもバンブルー1人で充分なのに、人間のスパークプラグ同行させたのも、君らだよな？赤いサイバトロンどもが特に

五月蠅い。

「わしらはこれより、エネルギーコンキューブを持ってここから退去する。別に追って来ても良いぞ？だがそうなった場合、あの黄色いちっこい丸っこい奴と、人間は見殺し、というわけか。フハハハハハ。」

ではなコンボイ。二度と会わん事を願っておるぞ。デストロン軍団、撤退！」

俺たちデストロン軍団は、メガトロンの命令に従い一斉に離陸した。そしてコンボイたちが^{ハンブルとスパークブラグ}仲間を救うべく、必死になって鉱山に突入して行くのが見える。俺は思わず、ほくそ笑んだ。

そして俺たちデストロンと、サイバトロンとの戦いの日々が始まる。いや、400万年前もドンパチやってたんだから、再開した、と言うのが正しいか。結局のところ、アニメ展開通りに俺たちは^{スペースクルーザー}宇宙船に乗り込んで地球を脱出。しかし攻めて来たサイバトロン連中の内の、光を力場で屈折させる事で透明になれるリジエの野郎が忍び込んでたせいで、破壊工作されて宇宙船は地球の海に墜落した。

いや、な？リジエの野郎が忍び込んでるだろうと思つて、黒炭の粉末を床に撒いてたんだよ俺は。リジエの野郎は、姿は消せても足跡は消せないからな。そしたらメガトロンの怒られた。俺は必死で、リジエの野郎が透明になつて忍び込んでる可能性があるか

ら、その用心だと説明してたら、その隙にリジエが宇宙船の制御盤コントロールパネルを撃ちやがったんだ。そして宇宙船は、海に墜ちた。リジエの野郎か？途中でパラシュートで逃げ出しやがったよ。

そして俺たちデストロンと、サイバトロン連中との、長い戦いが幕を開けたんだ……。
俺、すっかりデストロンだなあ。

第2話：なんか俺、嫌われてる

その時俺は、セイバートロン星にいた。スペースブリッジのテストに、テストパイロットとして志願したからだ。テスト第1回目は、カプセルにパイロットを乗せていなかった事、時間が無くてセイバートロン星への誘導装置を取り付けていなかった事で、見事失敗している。そのため第2回目のテストでは、パイロットを乗せる事になったのだ。

そこへサイバートロンのバンブルが、地球の人間であるスパイクを乗せて偵察にやってきやがった。勿論、さくつと捕まえたよ？で、メガトロンはそいつらをスペースブリッジのテストパイロットにして、カプセルに乗せると言い出した。俺は反対したよ？

「こいつら、特にバンブルの奴はコンボイへの忠誠心が妙に高いです。こちらの目的を達成させないだけのために、スペースブリッジの実験を失敗に導くかもしれません。」
「だからこそその、その人間の小僧だ。そいつの命を助けるためならば、その黄色いのは必死になってスペースブリッジ実験を成功させてくれよう。」

うん、黙るしか無かったね。だけど、スペースブリッジ実験の第2回目には、セイバートロン星側の問題で時間がかかるのが判明し、その隙にバンブルとスパイクは逃げ出し

たんだよな。でもって再度捕まえた人間スバの小僧イクをパイロットにして、バンブルは記憶回路メモリーチップに細工して、サイバトロンをおびき出して始末する作戦に切り替わった。

だけどスパイク1人だと、こいつ意地になつて実験を失敗させかねない。だからあえて俺が志願して、一緒にカプセルに乗り込んだ。ま、誘導役がいればスペースブリッジがまともにも動作するのは、アニメ知識から分かり切つてたからな。

でもって罫を切り抜けて来たコンボイの射撃で、カプセルのキャノピーが割れてそこからスパイクは逃げ出す。ちなみにキャノピーの穴までうっかり手が滑つた振りをして、スパイクの身体を持ち上げてやったときには、スパイクの奴はぎよつとしてたな。

「ふん、手前てめえが居られちゃ、実験を失敗させようと無茶な妨害をされるかも知れんからな。さつさと行つちまえ。」

「あ、あんた……。」

まあ、スパイクが居なくなつたカプセルは、遠慮なくなつたサイバトロン軍団の攻撃でひっくり返つちまつたんだが。俺は散らばつたエネルギーをかき集めて、スペースブリッジに駆けこんだ。

「サウンドウェーブ！スペースブリッジ、起動しやがれ！」

「リョウカイ。スペースブリッジ、起動。」

そして俺はエネルギーの山と共に、エネルギーが枯渇しているデストロンの

セイバートロン星基地へとやって来たわけだ。スペースブリッジで宇宙を飛んでいる間の風景は、ファンタジック幻想的だったなあ。あれがSサイエンス・ファンタジーFファンタジーって奴か。

ちなみにスペースブリッジからエネルギーの山をかかえて俺が出て来たときは、レーザーウエーブの野郎も大喜びだったな。

「よくやってくれた、スタースクリーム！これで、これでセイバートロン星は、セイバートロンのデストロンは救われる！」

「いや、お前が400万年もの間、必死に頑張ったからだ。俺はその間、無様に損壊して寝こけてたわけだしな。」

「そ、それを言っは……。メガトロン様が……。」

「お、おお、そう言やそうだった。忘れる、メモリーチップ記憶回路からデリートしろ。」

その後は、セイバートロン星に残留してレーザーウエーブ指揮下で働いてた、サンストーム、アシッドストーム、ホットリンク、ビットストリームなどのジェットロンたちと再会し、旧交を温め合った。向こうは「嫌な上司が帰ってきやがった！」って様子を隠しきれずにいたが。

……まあ、仕方ないな。当時の俺の酷ヒドクさは、今の俺が思い返しても言い訳できん。俺が「これまでで乏しいエネルギーをやりくりして、良く頑張ってくれたな。お前らの頑張りは、メガトロン様に会い次第に、言上しておく。本当に良くやってくれた！」と褒め

たときは、「お前、誰?」「」って言われた。……いいんだ。ああ、いいんだよ。うん。ちくしょう、べらんめえ。

その後は、地球からのメガトロンの指令で地球に舞い戻った。勿論サンストームたちの頑張りも、きちんと報告したよ? 「レーザーウェーブ共々、何か褒美を与えてやってください。」と言ったらメガトロンも妙な顔をしてたな。

「スタースクリーム、前々から思っておったが、頭でも打ったか?」

「400万年前に、地球に墜落したときに少しばかり。」

「……まあ良い。考えておこう。」

うん、いいんだよ。うん。

そんなこんなでその後、俺はデストロン軍団No. 2、航空参謀として必死に働いた。それはもう一生懸命に。

たとえば、グリムロックとかのダイノボットをサイバトロン軍団が開発した時は、真面目からの戦闘で敗れたメガトロンを救出し、撤退指揮を執った。ダイノボットは流石に強いが、馬鹿だからな。スカイワープに陽動攻撃を命令して、そちらに気を取られた間を狙ってメガトロンを救出したんだ。

スカイワープ？瞬間移動テレポートで逃げ出して来たぜ？そう命令しておいたからな。

「そういや、こんな事もあったっけ。メガトロンが電気生命体『クレムジーク』を創ったんだ。」

「う、うわ！そいつを近づけないでください！」

「ほほう、こいつが何か理解できるのか？スタースクリーム。お前にしては上出来だな。」

「そいつは電気生命体！俺、い、いや、わたしたちロボット生命体には天敵です！」

「その通り。こいつをサイバトロン基地に放り込んで来るとしよう。その間に、エネルギーマグネットを完成させるのだ！」

俺はその時に思い出した。アニメでのこの事件の展開を、だ。サイバトロンどもの作戦で、エネルギーを吸って巨大化したクレムジークがエネルギーマグネットで引き寄せられる電磁波に乗って、デストロンのエネルギーマグネット実験施設に直撃。それを崩壊させてしまう事を思い出したんだ。

「め、メガトロン様。万が一の話ですが……。サイバトロンを襲っているコイツが、エネルギーマグネットに引き寄せられてこっちに戻ってきたらどうするんです。」

「む……。」

「コイツは電気エネルギーの塊です。エネルギーマグネットに引き寄せられないわけが……。」

「……ふん、貴様の考え過ぎだ、スタースクリーム！コンボイたちのエネルギーを喰らえば、満足するだろう。創り主であるわしに齒向かうものか。」

「……了解です。」

勿論、この低知能の電気怪物は、自分の創り主の事なんか覚えちゃいなかったよ。うん。と言うか、アニメより酷い事になった。俺と部下のジェットロンはあらかじめ絶縁剤の泡で身体をコーティングして、準備してたんだ。万が一に備えてな。で、必死こいてメガトロンやサウンドウェーブとか行動不能になったのを救出して、崩壊したエネルギーマグネット実験施設から脱出したんだ。

うん、わかってるんだ。400まんねんまえ昔の俺が酷過ぎたから、俺からの進言とか忠告とかに、信を置いてもらえないんだってな。かつての俺に、藁人形で五寸釘を打ちつけたいよ、まったく。

そして最近メガトロンは、俺が何か進言したいとか忠告を口にする、物凄え嫌な顔をしやがる。不吉な予言をする者は、嫌われるもんだからな。だけど、忠告しないわけにも行かねえだろ。

そう言えば、こんな事もあったなあ。サイバトロンの連中と偶発的な戦闘に陥った時の事だ。俺はラムジェット、ジャガー、フレンジーを率いてワーパス、ホイストと戦ってたんだ。もう少し早く、この組み合わせの意味に気付いてればなあ……。

戦闘が小康状態になったとき、フレンジーの奴がエネルギーの波動をキャッチしたと言いやがった。特に調査に反対する必要も感じなかったため、俺たちはフレンジーの案内に従って謎の遺跡の奥へと進んだ。反対してりや良かったよ。

その奥に隠されてた謎の石碑。それを見た時、俺は思い出しちゃった。これは古代の魔法使い……胡散臭いが、偽者じゃねえ。本物の魔法使いが作り上げた、時間転送機構、タイムマシンだつてな。……アニメの知識、何かに書き留めてしつかり思い出した方がいいだろうか……。

でもって、手遅れだった。フレンジーの奴が石碑を起動させちゃって、1, 500年前の時間に、俺たちは放り出されちゃった。ワイグンド卿とか言う騎士たちがやって来たので、そいつを捕まえてそいつの城を乗っ取った。いや、理由があるんだ。1, 500年前の技術レベルじゃあ、俺たちのエネルギーを充電することは出来ない。なのでワイグンド卿の城にあった莫大な貴金属を奪い、それを使って発電機を製作したんだよ。

「やるじゃねえか、スタースクリーム。」

「ほんとほんと。見直したぜ！」

「ガウルルル……。」

「しかしな。俺は細かい物を製作するのは得意だが、大物は設備が無くちやあ難しい。今はワイゲンドの奴の下働きどもを使って、人力で発電機を回させちやいるが……。」

その矢先だ。ワイゲンド卿の敵対者、エイスリング卿とやらの軍勢が姿を現したんだ。いや人間の軍勢なんぞ、屁でもないんだが。その中に、サイバトロンのホイスとトとワーパス、そしてサイバトロンの協力者スパイクの奴が居たんだよな。うん、アニメで見た通り、奴らもタイムトラベルしてこの時代にやって来たんだ。

「くそ、サイバトロンの奴らまでこの時代に……。スタースクリーム？」

「いい塩梅になって来たぞ！ フレンジー！ 白旗を持って、軍使に立て！」

「へ？ こ、降伏しちまうのかい？」

「んなわきや、あるか。俺が欲しいのは、ホイストの協力だ。奴だって、未来の世界には帰りたいはずだ。だから未来に帰るまで、休戦を申し込んで来るんだ！」

こつちの目論見としては、ホイストの奴に大型の水車を造らせるんだ。それで俺の造った発電機を回せば、人力で回すよりもずっとずっと効率がいい！」

ちなみに交渉は上手くいった。と言うか、スパイクの奴がワーパスとホイストを説得したんだ。その代わり、こつちもワイゲンド卿の城の放棄を飲まされたけどな。いつの間にか姿が見えないと思ったら、ワイゲンド卿はこつそり脱出して、エイスリング卿に

全面降伏する代わりに、城の奪回を依頼したらしい。

「いいか？あくまで未来に帰るための、暫定的で一時的な休戦だからな？」

「ああ、わかったわかったワープス。こつちだってお前らと、いつも顔を突き合わせてたら、胃壁に穴が開いちゃう。胃なんか無えけどよ。」

「なんだとう!？」

「やめろワープス。それよか、まずは充電をやつちまってくれ。お前さんは、あいつらとの抑止力なんだ。」

と言う訳で、俺たちは山の中の急流に水車と発電機を仕掛けて、とりあえずはこの時代で生きていける体制を整えた。ワープスとラムジェットが時々喧嘩すんのを仲裁しないといけねえのが、ちよつと辛いが。俺はホイストと協議し、協力して様々な機械装置を造り上げ、居住環境を整えて行つた。

そしてジャガーとフレンジーが色々調査した結果、現代に戻るにはやはりあの遺跡に頼るしかなさそうだとの話になる。そこへまるで魔法使いの様な格好をした爺じいが訪ねて来た。あのタイムマシンと言うか、タイムワープ装置を造つたのはこの爺じいらしい。

爺じいの話によれば、遺跡がある洞窟には竜ドラゴンが住み着いているらしい。……ここは本当に、あの世界の過去なのか？と、そう俺は思ったね。けど、あの世界って黄金瀉湖ゴールドシ・ラックとか妙に幻想的な物が存在してたっけな。仕方ないのか……。

と言う訳で、ワーパスとホイスト、フレンジーやジャガーの地上支援の元、フルチャージ完全充電で元氣百倍の新しい顔状態の俺とラムジェットが空戦を仕掛ける事で、ドラゴンは見事撃墜。俺たちは竜殺ドラゴンスレイヤーしの名譽と共に、現代に帰還したってわけだ。

……俺が帰った事で、メガトロンの残念そうな顔が、無いはずの胃壁に痛かった。

トリプルチェンジャーどもが反乱を起こした事もあつたな。アストロトレインとブリッツウイング。アニメの本編では俺も、その反乱者の中に名を連ねていたんだけど。今回は反乱を防ぐ立場だった。サウンドウエーブの協力を得て、奴ら2人が話している内容をコンドルで盗聴。証拠を掴んだ。俺からだといいい顔をされないので、サウンドウエーブから知らせてもらった。

奴らはメガトロンを、サイバトロンの秘密発電所があるとの嘘でおびき出し、分子凍結ガスで氷漬けにしてしまつたもりだった。だがサウンドウエーブ配下のカセットロンドンどもが、分子凍結ガスの配管を破壊。罌が不発に終わったアストロトレインとブリッツウイングは2対1の戦いをメガトロンの挑んだ。しかしそこへ割って入ったのが、サウンドウエーブだ。まあサウンドウエーブは弱くは無いがそこまで強くは無い。しかしメガトロンの的確に支援して、トリプルチェンジャー2人に勝利した。

俺？俺もがんばってたよ？俺とスカイワープ、サンダークラッカー、ラムジェット、ス

ラスト、ダージの6人、ジェットロンとネオジェットロンは、ブリッツウイングが抱き込んだビルドロン部隊と戦ってたんだ。

「お前らごとき、相手になるか！」

「とっておきの、ミサイル砲だ！」

「くらえ、ファイヤーアタック！」

「レーザーライフルをくらえ！」

「こつちもミサイルだ！」

「どうだ、超音波攻撃だ！」

「「「「うわあああああ!!」「「「「「」

いや、合体しなけりやビルドロン部隊なんて、正直大した敵じゃない。で、当然ながらこいつらは合体を始めた。

「こうなったら俺たちも合体するしかねえ！」

「いいかー!!合体するぞ!!ビルドロン部隊、トランスフォーム!!フェーズ1!!」

ロボット形態から、自動車形態ビークルにトランスフォームする、ビルドロン部隊。そして更に、合体用の形態に……!!

「フェーズ2!!」

だがな、俺にやスピードがあるぜ!

「トランスフォーム!……トランスフォーム!」

「デバス……うわっ!」

「て、てめえ!」

「^{てめえ}手前らの弱点はな!合体が遅えんだよ!」

「「「いや、いくらわかってても、ソレやるかよスタースクリーム……。「「「」」

ジェットロンの残り2人とネオジェットロンの3人が啞然として言う。いや、俺以外でもやる気になりや、スカイワープ。お前だったらできるだろ?俺は変^{トランスフォーム}形して飛行モードで突っ込んで、胴体上部になるグレンと腹部から腰部になるロングハウルの間に割り込んで、そこで再度人型モード^{ロボット}に変^{トランスフォーム}形して合体阻止した。でもスカイワープならもっと手軽に、瞬間移動^{テレポート}で合体に割り込めるだろ?

と言う訳で、俺はデバスターの上半身と下半身の間で仁王立ちして、上半身を両の手で押さえ込んでいたんだ。なんか某スパ■ボの某ゲッター■ボの漫画で見たな、この構図。そして両肩の光線砲で、狙いを付ける。

「「「いや、やめろスタースクリーム!やめてくれ!!「「「」」

「ほう、合体してもいねえのに、意志が統一されてるじゃねえか。安心しろ。ナル光線^{ビーム}だからな!」

キュキュン!バリバリバリッ!!

「「「「ぐわあああああ!!」」」」

「いっちょあがり、つと。」

そこへ地下からメガトロンが、アストロトレインとブリッツウイングを引き摺って現れる。俺たちジェットロンとネオジェットロンの6人は、ひざまず跪いて言葉が掛かるのを待った。

「ほう、スタースクリーム……。ジェットロン貴様らで、デバスターをどうにかできるとはな。」

「は。合体寸前を狙いました。」

「なるほどな。よくやった。」

頼むわメガトロン。お願いだから、そんなに嫌そうな声で褒めないでくれ。なーんか、アニメ本編の「スタースクリーム俺」の失敗をしない様に、しない様に、つて頑張ってるのに……。なんでかメガトロンとの関係は、悪化してるんだよな。ただ、俺の務めつとつぷりにきず瑕が無
いから、罰するとかできないだけで。

メガトロンは、自分で叩きのめしたトリプルチェンジャーが平身低頭で謝罪し、これよりの忠誠を必死で誓うのを見て、ひとしきり罵倒した後には赦している。ビルドロンの奴らも同様だ。うん、懐も深いし、寛大な理想の上司……。のハズなんだがなあ。なんで俺には嫌な顔するんだろうか。隠そうともしてない。

ちなみにアニメ本編のトランスフォーマーと、ストーリーの順番が前後してたりするけど、あれ実際には日本版と海外版とで放映される順番とかぜんぜん違っていたりするんだよな。だから、どの話がどの順番に来るのかってのは、実の所本当はわかっているんだよ。だから、俺も事件が始まってしばらく経ってから、「ああ、もしかしてコレはあのストーリーか？」とか思うんだよな。

だもんで、前々の段階から対策とか考えられずに、泥縄的な対策になっちゃう事多いんだよなあ。それでも、若干デストロン側が有利になつてるとは思う。

で、俺が始まるのを恐れているストーリーがある。日本版放映話数17話、『ナイトバードの影』だ。あのストーリーが、あのストーリー通りに進むのなら……。俺は、もしかしたらメガトロンと袂を別たなければならぬかも知れない。アニメ本編での、逆に逆もどきではなく……。正真正銘、本当に……。

第3話：さらばデストロン軍団

ついに恐れていた事が起きてしまった。日本のハマダ博士が、くの一忍者ロボットのナイトバードを開発したのだ。そしてメガトロンがそれに興味を持った。そして今、俺たちジェットロン部隊は、ロボット発表会の会場上空にやって来ている。

ロボットの発表会会場では、既にメガトロンたちが乱入して大騒ぎになっている。その隙に、ジェットロン3人のレーザーでドーム状になっている会場の天井を切り取り、ひっぺがした。

「司令官、天井を見てください！」

「サンダークラッカーだ！」

「それにスタースクリームです！」

「そんなに心配しなくても、こんな所に長居する気はない！このお友達を迎えに立ち寄っただけよ！」

俺はそう叫ぶと、ワイヤーフックを伸ばしてステージの壇上に置かれているナイトバードを吊り下げる。そしてサイバトロンドもを後目しりめに、まんまと運び去った。……こいつ、このまま高空から落つことしたら駄目かな。いや駄目だ。メガトロンの命に逆ら

う事になる。そうしたら、結局のところ俺を処罰する大義名分を与える事になる……。

そして俺たちは、新しい臨時基地へと戻って来た。そこでインセクトロンの心理工作兵ボンブシエルが、メガトロンの命令でナイトバードを改造強化し、洗脳する事になった。

「こりゃあ俺達のトランスフォームの回路に比べりゃあ、まるでキャラメルのおマケだなー！」

まあ、そうだろうな。俺たち超ロボット生命体のボディからすれば、いかに最新テクノロジーとは言え地球の人間が造ったロボットでは、比べ物になるまい。しかし……。

改造と洗脳は、あつと言う間に終わった。インプットされた命令は、地球のエネルギー資源データを全てインプットした、サイバトロンのエネルギーチップを奪取する事。そしてその後、サイバトロン戦士を抹殺する事。

そしてナイトバードは動き出す。様々な武術の型を披露し、デモンストレーションを行っているのだ。

「……多少動きはぎこちない様ですが、スピードは迅はやい。実際に相手をすると考えれば、厳しいかも知れませぬね。」

「わかった様な口を利くなあ、スタースクリームよ。では試してみるか？」

「うわっ!? 冗談はやめてください。やめさせてくださいよー!」

俺はナイトバードの攻撃を、慌てた様子で躲す。その様子を見て、メガトロンは笑った。いや、嗤わらった。……これは、駄目かも知れん。

そしてナイトバードは、サイバトロン基地へと出撃して行った。

数時間後、俺たちは偵察ドローンやナイトバードから送られて来た映像を見つつ、サイバトロン連中を嘲笑あざわらっていた。いや、俺はそんな気分じゃなかったんだが。エネルギーチップを奪われたサイバトロンどもは、ナイトバードを追って来たんだが、しかしその強さに手を焼いているのだ。

メガトロンやボンブシエルが楽し気に語る。

「なあるほど、サイバトロンの司令官殿は、ナイトバードに愛用のライフルを盗られてお困りってわけか。ついでに右腕ももぎ取ってくれば、もっと困ったのに。」

「こんな事なら、もっと早くハマダ博士をマークしておけばよかったよ。人間にも、あれだけの物が造れるとは意外だ!」

ここでアニメ本編では、「俺」が余計な一言を挟むんだが……。ここは褒めて置こう。

「確かに……。人間、悔りがたし。地球人、悔りがたし。人間に俺たちの技術を与えて

やれば、けっこう役に立つかも知れませんか。もともと、人間の中でも頂点にいる者たちだけでしようが。

人間は、なにしろ数が多い。ピラミッドの底辺が多くなれば、必然的に頂も高くなるものです。」

「フハハハハハ、まあその辺にしておけ。ナイトバードがエネルギーチップを持って帰って来るのを、楽しみに待とうではないか。」

……メガトロンは、ご機嫌だ。『あの台詞』がメガトロンから出てしまうのは、止められそうに無い……。

そしてエネルギーチップを盗られた事に気付いたサイバトロン連中は、必死になる。だがその必死の猛攻を、ナイトバードは受け流し、反撃をする。そして……。それをモニター画面で観ていたメガトロンが、『あの台詞』をついに口にした。

「まさに完璧だ、フハハハハハ。どうやらこれで、お前の現役引退も決定的になったようだな、スタースクリーン、フハハハ。お前に代わって今日からはナイトバードをわしの右腕にしよう。」

ついに言いやがった。メガトロン……。俺が純粹に元の世界からの憑依者『だけ』であつたのなら、なんとか我慢ができたかも知れない。けれど俺は、かつての『スタースクリーン 俺』と

しての意識もちゃんと残ってるんだ。

そうだ、確かにナイトバードは強いさ。けどな、副官やN.O. 2としての仕事は、喋る機能すらない、命令にただ従うだけの脳足りんに務まるだけでも言うのか？俺のこれまでの仕事っぷりが、戦闘能力だけの玩具みたいな頭脳しか持って無いナイトバードに、劣ると言うのか!?

「それは、ナイトバードを軍団のN.O. 2になさる、と……。そう言う事でしょうか。」
「当然ではないか。奴は余計な口を挟まず、ただひたすらに従順だ。貴様などと比べるべくもないわ。」

周囲のデストロン兵士が騒さわめく。しかしそれでも、俺を庇かばおうと言う者はいない。メガトロンが怖いし、以前の『スタースクリーム俺』の印象が強すぎるんだろうな。やれやれ、ここまですでに人望が無かったとは。

いや、サンダークラッカーだけは何か言おうとしてる。だが、俺はサンダークラッカーに目を遣って、首を左右に振った。そして俺はメガトロンに向かい、言葉を発する。「わかりました。それではわたしはこれにて。おさらばです、メガトロン様。」

俺は自分の身体に着いている、デストロンのエンブレムを破り取り、放り捨てる。そして基地の出口に向けて歩き始めた。そして横っ飛び。今まで俺の居た場所に、エネルギーネットが張られていた。

「……なんのおつもりです、メガترون様。」

「貴様はデストロン軍団の機密を多数、知っておる。引退したからと言って、自由の身になれるとでも？」

「……。」

「これまでの働きに免じ、生け捕りにして、閉じ込めておくだけで許してやろうと思っていたのだがな。デストロン軍団！スタースクリームを破壊してしまえ！ファイヤー!!」

俺はトランスフォームし、臨時基地を脱出するため出口へと飛翔する。後ろからデストロン兵士たちの撃つレーザーやビームが掠める。だが、あたらない。メガترونの罵声が響き、後をジェットロンたちが追って来る。俺はしかし、全速力で基地出口から離脱した。同じジェットロンとさえど、俺の全速力にはついてこられるはずも無い。俺はデストロン最速なのだ。……デストロン、最速であったのだ。

「やれやれ。……辛い、もんだな。」

俺の翼には、もはやデストロンのエンブレムは無い。悔しい。ひたすらに悔しかった。

メガترون率いるデストロン軍団と、コンボイたちサイバトロン軍団が、熾烈な戦いを繰り広げている。しかしその形勢は、デストロン側に傾いていた。デストロン軍団

は、サイバトロンに捕まってしまったナイトバードを救うためにこの場に現れ、そして救い出したナイトバードと共にサイバトロンの追いつめていたのだ。

そしてナイトバードが、コンボイを葬らんと光ビームサーベル 剣を振りかぶる。コンボイは体勢が崩れている。そしてそこへ一条のレーザー光が走った。

キュキュン!!バジイッ!!

ナイトバードの光ビームサーベル 剣は弾き飛ばされる。ナイトバードは慌ててバックステップ。

「な!?だ、誰だ!」

「俺ですよ、メガトロン様。」

そう、先ほどのレーザーは、俺が撃ったんだ。俺は岩陰から歩み出る。

「スタースクリーム!何故お前がわたしを……。」

「コンボイ司令官!見てください、やつのボディを!デストロンのエンブレムがありません!!」

よく見てやがる、マイスター。コンボイの副官だけはある。でもそこを突かれるのは、まだ気持ちが痛いんだ。勘弁してくれ。そしてメガトロンが叫ぶ。

「す、スタースクリーム!この裏切り者めが!」

「……裏切りにはあたらないな、メガトロン様、いやさメガトロン。お前は俺を首にしたじゃないか。もう俺はデストロン軍団じゃあ無い。そして、先に俺を裏切ったのは、お

前だメガトロン！」

「く、詭弁を……！」

俺はメガトロンから顔を逸らし、ナイトバードに向ける。

「ナイトバード！貴様に決闘を申し込む！……ああ、ナイトバードは強いさ。地球の間が造ったとは思えない高性能だ。けれどな。喋れもしねえ！自由意志もねえ！何よりもただ命令の内容を考えもせず愚直に従うだけの脳足りんに！自らのスパークさえも持っていない、ただの機械に!!」

副官はおろかN.O. 2の座を奪われ！引退に追い込まれる！こんな屈辱が！許せるか?!赦せるか?!そんなわきや無え！冗談じゃ、冗談じゃねえんだよオ!!」

ナイトバードは無言で手裏剣を投擲して来る。俺はその手裏剣を、全てレーザーで撃ち落とす。そして変形!!超高速の空中からのレーザー攻撃、そして再度人型形態に
トランスフォーム
 変形すると、降下しつつの蹴りを見舞う。

「ええい！デストロン軍団！あの裏切り者を撃て、撃ち殺して残骸にしてしまえ！」
スタースクリーム
スクラップ

「させるな！サイバトロン戦士、決闘の邪魔をさせるな！」

「感謝する、コンボイ！む?」

ナイトバードは竜巻の様に高速回転すると光を放ち、姿を消す。だが対策はある！俺はその辺に転がっていた、ナイトバードの光ヒームサーベル剣を蹴り飛ばした。遠くに飛んでいく

光 剣だつたが、突然妙な光に包まれて、ある方向に移動を始めた。

うん、ナイトバードの奴には、自分の武器である光 剣を手元に呼び戻す機能があるんだ。しかし、それは即ち自分の位置を明らかにしてしまうと言う事だ！俺は岩陰から身を乗り出すナイトバードを発見すると、思いつきり……そう、これ以上無いぐらいの怨念を込めて、ナル光線を叩き込んだ。

キシヤアアアアア……。

「ああっ！ナイトバード！おのれスタースクリーム！」

崩れ落ちるナイトバードを、サイバトロン戦士のクリフが抑え込む。それを見たメガトロンは、激昂して俺に向かい融合カノン砲を撃ち込んで来た。怒るのはわかるさ、うん。けどなあ……。

「怒りたいのは……こっちなんだよオ!!」

地面に転がって融合カノン砲を避けつつ、冷静さを失ったメガトロンめがけナル光線を撃つ。左右の肩のビーム砲塔で、各々ほんの僅かに狙いをずらして。

はたしてナル光線は、一方は躲された。しかしもう一方は、見事にメガトロンの右大腿部に命中し、メガトロンの全身に放電が迸った。

「ああっ!!」

「メ、メガトロン様!!」

「今だ、サイバトロン戦士！撃て撃て撃てーい!!」

アニメでの『俺』スタースクリーム

が反乱を起こす際に、ナル光線ビームをメガトロンの後ろから撃って

勝ち誇り、そして結局ナル光線ビームは一時的に麻痺させるだけだから目を覚ましたメガトロンの逆襲されてしまう、と言うパターンがある。だがそれは1対1、もしくは1対他のデストロン兵士まで含めた大勢、と言う状況だからそうなるのだ。

今ここには、サイバトロン戦士たちが大勢居る。この状況下で、一時的とは言えどもメガトロンが麻痺してしまえばどうなるか。答えがこれだ。

「さ、サウンドウェーブ！まずいよおー！ー!!」

「メガトロン様ガ指示ヲ出セナイ……。カセットロン部隊、撤退セヨ！才連レシマス、

メガトロン様……。」

「あ、ど、どうすりやいいんだ……。メガトロン様は気絶、スタースクリームは裏切った……。」

「スカイワープ、逃げるしかねえだろ！それとスタースクリームは裏切ったんじやねえ……。デストロン軍団が、スタースクリームを裏切つて切り捨てたんだ。……スタースクリーム。」

少しばかり名残惜しそうに、サンダークラッカーデストロンへいしがこちらを見る。俺は少し微笑んでやった。サンダークラッカーは、仲間デストロンへいし間を逃がすために殿になって撃ちまくり、そして

トランスフォーム
変形して逃げて行つた。

「どれだけ突つ立っていただろうか。コンボイが話しかけて来る。」

「スタースクリーム。とりあえず、礼は言つて置こう。ありがとう。」

「いいさ。俺は俺の私怨を晴らしただけだ。」

「だが……。お前はこれまでの戦争で、大勢のサイバトロン戦士を倒している。」

「ああ、そうだな。」

「そしてコンボイは、俺に背中を向ける。」

「今回味方をしたからと言つて、流石にお前を我々に迎え入れる事はできん。」

「わかっているさ。第一、そんな事俺も望んじやいない。」

「ならばいい。わたしが見ていない内に、立ち去つてくれ。しかし、地球の人間に何か悪

事を働くのであれば、その時は……。」

「そいつあ保証できんが、ま、あんまり派手な事はしねえよ。じゃあな、あばよコンボイ。」

トランスフォーム!!」

俺はその場を飛び立つ。そして省エネの巡航速度で飛び続けた。いや、デストロンの基地にはもう帰れない。だからエネルギー充電とか出来る場所も無い。とりあえずはその件、どうにかしないとイケないからな。

その後、俺はあちらこちらのスクラップ置き場から、まだ使えそうなスクラップを盗んで水車と発電装置を組み上げた。一度1,500年前の世界でやつてるからな。今度のはホイストの助け無しでも、簡単だった。それを山奥の急流に仕掛け、俺は自分をエネルギー充電する。充電完了まではしばらくかかりそうだ。

「……どうしたもんかなあ。」

デストロン軍団にはもう戻れない。戻る気もさらさら無いが。いや、やるべき事は無くも無いんだ、実は。と言うか、本当であれば何を置いてもやらなきゃならん事がある。しかし、俺がデストロンに身を置いている間には、絶対にやつちやいかん事があった。

「またスクラップ盗みに行つて来ないとな。使える部品、ありやいいんだが。」

アニメ本編ではフレンジーのハンマーアームがあつてこそ、成し遂げられた事だ。だが今度は、俺一人でやらにやならん。メガトロンが、地球コアのエネルギーを奪う作戦を思い付く前に。

「なんとかして、砕氷用の土木作業機械を造らねえとな。しかも高性能な奴を。強力な金属探知機も必要だ。」

「……待つてろよ。かならず助けてやる。」

なんとしても、メガトロンに先んじてあの地へ行かにやならん。絶対に。そう、北極



第4話：慟哭

寒い。むっちゃ寒い。もの凄く寒い。機械の身体ですらも、凍り付きそうなほどだ。ここは北極。極寒の中、俺は手に持った金属探知機を精密モードにして、歩き回って周囲を調べていた。

「上空から広域モードで探したが、それらしい反応はこの辺のはずだった……。お!」

反応があつた。大型のジェット機ほどの大きさをした、金属反応。形状は人型。ピンゴだ!!

「見つけたあ!!待ってる!!」

俺は最近、独り言が多くなつた。寂しい奴だつて言うんじゃねえぞ。ボツチなのは自覚してる。だが、あえてそれを言われると傷付くんだ。凄く。

そして俺はビーコンをここに置くと、いったん前線基地にしたキャンプに取って返し、砕氷用の土木機械を持ってすぐさま戻る。そして大急ぎで氷をガリガリと削り始めた。

北極で長時間活動するため、たつぷりと充電して持ってきた予備バッテリー5基のう

ちの3基を完全に空っぽにして、俺はソイツを氷から掘り出す事に成功する。それは大型のロボット……超ロボット生命体、トランスフォーマーだ。

「システムチェック……。中枢部分がダメージを受けてやがるが、氷に閉じ込められてたおかげでそれ以外の部分には損傷や経年劣化はほぼ無え……。中枢部分も、記憶回路とか含む頭脳回路とか、ヤバイ部分は無事だ。

問題は動力系だな。だが、持って来た部品でなんとかかなりそうだ。ミスるな、慎重に、慎重にだぞ、俺……。確保できた部品は1回分だけだ。」

うん、デストロンがサイバトロンとの野戦になって放棄した、臨時基地を見つけたんだよな。デストロン側としては、サイバトロンに発見されると思って撤退の際に放棄してたんだが。しかしサイバトロンはそれを発見し損ねて。結果として、俺が漁夫の利を得たわけだ。

と言つても、そこにあつた設備は最低限。残されていた修理部品とかも補給物資とかも、ほんの僅か。エネルギーキューブに至っては1個しか無かった。だがその、ほんの僅かな修理部品は、俺が喉から手が出る程に必要としていた物だったんだ。そう、コイツを治療するために。

ちなみにその臨時基地の設備は、あらいざらいありがたく頂いて隠匿してある。

「……よし、仮死によるシステム保全モード解除。もう部品無いからな。これが最初で

最後のチャンスだ……。いくぞ、動力点火！イグニッション

ウイイイイイイ……。

「う……。こ、こ、は……。わたし、は……。」

「やった！成功だ！」

「き、きみ、は……。スター……。スク、リー、ム？」

「そうだ、俺だ！わかるかスカイファイアー!!」

そう、こいつはスカイファイアー。俺が、過去の『スタースクリーム俺』だった頃の、唯一に近い

……。いや、唯一の友人で、親友だった奴だ。数百万年前に宇宙探検に出て、とある未開惑星を探索中に事故で行方不明になった。同行していた俺は必死で、その未開惑星を

……。数百万年前の地球を1周して探したんだが、発見できず……。断腸の思いで諦めたんだ。

本当は、『スタースクリーム俺』が今の俺に融合同化した時点で、北極にコイツがいる事はわかって

た。だからすぐにでも助けに行きたかった。けれど、デストロンにコイツを入れちまったら、アニメと同様に袂たもとを別つ事になるか、気が優しいコイツを苦しめる事になってたはずだ。

だからどうしようか悩んで、先延ばしにしていた。どうせメガトロンが地球コアからのエネルギー収奪作戦をはじめれば、コイツが見つかってアニメ同様のエンドを迎えるの

は分かり切ってたのにな。だけど……。

俺はもう、デストロンじゃない。つまり堂々とコイツを救出できるってわけだ。……
!!まじい!!

「な、ど、どうし……たんだ、い？スター、スク、リーム……。」

「静かに！今、探知妨害装置を動かす！……いいぞ。」

「たん、ち、妨害？」

「ああ。ちよつと見つかりたくねえ奴がな。」

そして、空の上をジェットモードのブリッツウイングがフライパスして行く。そうか……。そろそろ地球コアからのエネルギー収奪を始める気なんだな。間一髪だったつて事か。

「どうしたスカイファイアー。言葉が妙に突っかかるみたいだが。」

「あ、ああ……。すこ、し発声回路、が、痺れているようだ……。」

「ちよつと待て。今調整してやる。……これでどうだ？」

「ああ、楽になったよ。ありがとうスタースクリーム。」

そしてスカイファイアーは身体を起こす。俺はそれに手を貸してやった。コイツ、デカイから重いんだよホント。

「スカイファイアー、トランスフォームはできそうか？飛べるか？」

「ちよつと待つてくれ。今チエックプログラムを走らせるから。……うん、83.09%出力だが、何とか。」

「そうか、なら俺の拠点に行くぞ。そこでゆっくり話そう。ただな……。俺は今現在、色々と後ろ暗い身の上だつて事は、理解してくれ。」

「ど、どう言う事だい？」

「それも含めて話す。だから今はとりあえず……。頼む。」

スカイファイアーは、一瞬戸惑つたが、しかしすぐに頷いた。頷いて、くれた。

「わかつた、友よ。君は命の恩人だ。その君が言うんだ。共に行こう。」

「ありがとうよ……。トランスフォーム！」

「トランスフォーム！」

俺たちは連れ立って、大空へと飛翔した。ああ……。『久しぶり』だ、この感覚は。涙腺なんて無いが、涙が出そうだった。

いい気分で飛んでたら、後ろから追つて来る飛行物体がある。スカイファイアーも気づいた様だ。

「スタースクリーム。後ろから何か追^っ尾^けして来るよ。」

「あいつは……。まあ、あいつならいいだろ。赤くないし。」

「い、いや。見るからに赤い機体色だけど。」

「とりあえず、いったん降りるぜ。」

俺たちは地上に広がる森の中に、トランスフォームして降り立った。そこへ赤い飛行機型ミニボットも、俺たちを追って降りて来る。

「トランスフォーム！スタースクリーム、デストロンを抜けたって言ってたけど、仲間がいるなんて、やっぱり……。あ、あれ？そっちの奴もデストロンのエンブレムが無い？」
「ようパワーグライド。こいつは数百万年前に、この地球に墜落した探検家にして科学者のトランスフォーマーでな。俺とは旧知の仲、友人なんだよ。発見して、救出した。」
「す、スタースクリームに友人がいたなんて!!で、でもそれならなおさら、なんでデストロンじゃ……。」

「戦争が始まる前だったからな。」

ここでスカイファイアーが口を挟む。

「その赤い君。少し失礼じゃないかい？スタースクリームはわたしにとって、大事な親友だ。」

「し、親友!?!」

「ああ、いいんだスカイファイアー。お前が行方不明になってから数百万年が過ぎてる。で、お前が氷の中で冬眠してる間に、俺はデストロンって軍団に入って、こいつのいる

サイバトロン軍団と、血で血を洗う戦いに身を投じていたんだ。ま、先日軍団をクビになっちまったがな。」

「なんだって!? 君をクビにするなんて、馬鹿なことをしたもんだ。」

「いや、俺は対人交渉能力が低かったの知ってるだろ? それで上官と折り合い悪くなつてな。それに人付き合いが苦手だったから、威張り散らすだけ威張り散らして、そんなんで部下や同僚との信頼関係も築く事ができなくてな。クビになった時は、誰も庇^{かば}ってくれなかったよ。」

「そんな……。」

スカイファイアーの哀し気な様子に、パワーグライドは目を白黒させる。そんなパワーグライドに、俺はメモリーチップを投げてやった。

「あ、え、こ、このチップは?」

「まあ、俺にも悪い所があったとは言え、けれど俺をクビにしたときの、あのやり口はどうしても赦せなくてな。だからメガトロンへの嫌がらせで、そのチップの中身を編集した。俺が知ってる、デストロン軍団の機密情報だ。それと、メガトロンが今後行うだろう作戦行動の予測。」

ああ、作戦行動の予測の方は、メガトロンが何の気なしに独り言を呟いた内容からの憶測とかも入ってるからな? あんまりソレに囚^{とら}われるな。なんにせよ、コンボイに渡し

てくれ。」

「す、スタースクリームが親切を!？」

「だからメガトロンへの嫌がらせだって言ったろうが。」

うん、作戦行動の予測は、アレだ。俺のアニメ知識からの情報まとめだ。ま、ここま
で色々歴史が変わっちまうと、同じ様になるか全然わかんねえけどな。

「ああ、でもスタースクリームを野放しに、だけどこの情報をコンボイ司令官に……。」
「俺は何もしやしねえよ。とりあえず、俺たち程度のエネルギーは自家製の水力発電で
どうにかなるしな。」

「う、ううん……。わかった！信じるよ。だけどそれを裏切ったら……。」

「どうとでもしてくれ。」

「……なんか、ホントに変わったんだなスタースクリーム。トランスフォーム!!」

パワーグライドの奴は、飛んで行った。あつちはサイバトロン基地だな。

「いや、見つかったのが赤いサイバトロンじゃなくて良かったぜ。」

「赤かったじゃないか。」

「いや、体色じゃなくて精神面の話さ。まあ、その辺も含めて、帰り着いたら話してやる
よ。」

そうして俺たち2人は、再度その場から飛び去った。

そして俺の隠遁場所だ。山中にある滝の滝壺たきつぼを入り口とし、その滝の裏側にある洞窟を拡張して造り上げた、簡易的とは言えど立派な基地だ。

「すまねえな、お前には少し狭いだろ。スカイファイアー……。」

「いや大丈夫。ちよつと身を屈めれば、あ痛いた！」

「うん、後で洞窟をもうちよつと拡張するか。お前、エネルギー充電チャージ不十分だろ。充電チャージしながら、話聞いてくれ。」

そして俺は話し始めた。

話は大昔まで遡さかのぼる。元々俺たちトランスフオーマーは、最初はただのロボットだった。長い年月の間に、独自の命を……スパークたましいを持つ様にはなつたが。

俺たちの先祖を創つたのは、クインテッサ星人。軍事用のロボットと、民間用奴隷ロボット、それが俺たちの先祖だ。奴隷ロボットたちをいじめたり、軍用ロボットを剣闘士に仕立てて殺し合いをさせたりしたんで、大規模な反乱を起こされてセイバートロン星を追われたんだがな。

で、平和な環境に不応を起こした軍事用ロボットが戦争を起こした。軍事用ロボットに対抗するため、民間用ロボットたちはトランスフォーム能力を獲得、発展させ、戦つ

た。そして民間用ロボットの攻勢に対処するためもあり、軍用ロボットもトランスフォーム能力を獲得。そして長い年月が過ぎ、戦ったり平和になったりを繰り返した。そこで長い平和の時、その末期あたりか。お前が大昔の地球に墜落して行方不明になったのは。あの平和は、腐りきつてた。不公平はまかり通り、不正は横行してた。当時の司令官、ゼータのクソ野郎が……。おいとこう。

それで、軍用ロボットたちはデストロンを名乗ってまた戦争を始めた。長い、長い戦いが続いた。こんだけ聞くと、デストロンが正しい様に思うが、さにあらず。デストロン連中も結局言いたい事は、「俺に権力を寄越せ」だ。いや、当時の俺も他人の事あ言えなかつたが。俺も、軍用だつたからなあ。

そして……。デストロンの現リーダー、破壊大帝メガトロンが出現する。つて言うか、あいつ俺の事若造若造言うけど、あいつの方が後から出来たんだよな。精神設定は俺の方が若いみたいだが。奴のスローガンは『圧政を通じての平和を』だ。物騒だろ？ 奴は、平和は望んでいる。ただし自分の元での、な。そして全宇宙の覇者となる事を夢見ている。その邪魔をする者は、どんな奴でも、いい奴でも悪い奴でも叩き潰す。この地球の人間なんぞ、ゴミムシ程度に考えてるしな。デストロン軍団が、悪の軍団つて言われるわけさ。実際、悪い事を平氣の平左でやるしな。

その、なんだ。お前に言うのは恥ずかしいし、お前に軽蔑されても仕方ないと思うが

……。俺もあいつの下でN.O. 2まで出世したからな。随分と下衆な事に手を染めたよ。しかも今思うと恥ずかしいが、部下の手柄を横取りしたり、自分のミスは部下に押し付けたり、酷い奴だった。思い返すも恥ずかしい。

……おお、すまねえ。続きだな。一方の民間用ロボット連中だが、サイバトロンと名乗って軍団を編制し、デストロンに対抗した。正義の軍団を名乗っているし、現リーダーのコンボイ司令官は、それに相応ふさわしい人格者だ。座右の銘は『自由とは全知的生命体の権利である』だ。時々頭脳回路が熱くなって暴走はするけどな。

ただなあ……。奴らも純粋な正義かって言われるとなあ……。科学の進歩のためから手段は選ばないマッドサイエンティストはいるし……。ホイルジャックってんだけどな。それはいいか。

なんつつか精神面で『赤組』な奴らがいるんだよ。デストロンを滅ぼすためなら、手段選ばねえ奴らが。下手すると、デストロン連中以上に物騒でなあ。コンボイの指示や命令も曲解したり、下手するとデストロンを殺せるなら命令無視したりする。頭が冷えると、自分が悪かったって理解する程度の理性はあるんだが。奴らは『正義のためならあたりまえ』なんだよなあ基本。そうじゃない、普通にいい奴もいるがね。さっきのパワーグライドとか。

つまりお前が居なくなったら後に起こった、そして長く長く幾百万年続いたこの戦争

は、『独善の暴君VS暴走する正義』の戦いなんだよ。それで、セイバートロン星は荒廃し、エネルギーは枯渇し、技術は一部の軍事科学とか以外は灰塵に帰し、滅亡の瀬戸際にある。……その責任の一端は、あきらかに俺にもあるんだが。

そして400万年前だ。荒廃するセイバートロン星を救うため、そして自分たちのエネルギーを得てデストロン軍団に勝利するため、サイバートロン軍団は宇宙船『アーク』に乗ってエネルギーの宇宙探索に出た。だがそれを黙って見ているデストロン軍団じゃなかった。宇宙戦艦『ネメシス』でその後を追って、『アーク』に接舷してそんな中で戦いを繰り広げた。んな事してたら、墜落するわな。『アーク』は地球に墜落し、俺たちは400万年の間、仮死状態でその中で眠っていた。

そして400万年後の今、復活して性懲りも無く地球人類まで巻き込んで、デストロン兵士とサイバートロン戦士は戦いを繰り広げているわけだ。地球のエネルギーを奪ってセイバートロン星を復興させようってデストロン軍団、それを阻止しようとするサイバートロン軍団……。

「軽蔑、しただろ？」

「……いや、ただ『戦争は人を壊す』ロボットんだな……と感じたけどね。でもわたしは、君を軽蔑したりしないよ。だって……。」

「？」

そしてスカイファイアーは言った。

「君はわたしの友達じゃないか。」

「!!」

俺に涙腺が無いのが、こんなに悔しいとは思わなかった。泣きたかった。俺は顔を伏せて、しばらく震えていた。

「すまん……。いや、違うな。『ありがとう』、だ。ありがとうスカイファイアー……。」

「ははは、変だね。助けてもらったのはわたしの方なのに。」

「スカイファイアー……。もう1つの秘密がある。聞いて、くれるか？」

「うん。」

そして俺は、俺のスパークたましいに、並行異世界から来た別の地球人の魂が混じっている事を告白した。その地球人の世界では、トランスフォーマーたちの戦いがTVアニメーションや映画として存在する事も。本来の歴史では、俺たちが決別していた事も。

そしてスカイファイアーは言った。俺の手に、その巨大な手のひらを被せて言ったんだ。

「……地球人のメンタリテイが混じった心で、『邪悪』とされる行いをするのは辛つらかっただろう？それに秘密を抱えて、軍団の中で孤立して。必死に頑張ったのにクビにされ

て。完全に分かるとは言えない。だけど、おもんばか慮るぐらいはできるよ。

だから……。我慢しないで。もう『泣いて』もいいんだ。」

その瞬間、俺の中で何かがブチッと音を立てて切れた。俺は慟哭した。涙は出ない。しかし声帯スピーカーがハウリングを起こしそうなぐらいの声で、慟哭した。そうだ。俺は自分でも気づいていなかったけれど。俺は自分でも気づいていないフリをしていたけれど。俺は、俺は辛つらかったんだ。苦しかったんだ。誰かに聞いて欲しかったんだ……。

第5話：セイバートロン星への帰還

物凄く驚いた。スカイファイアーも、啞然としている。何が起こったかと言うと、スカイファイアーのために俺たちの隠遁場所である滝の裏の隠れ家、その洞窟を拡張してんだ。そしたら、鉱脈にぶつかった。

何の鉱脈かって?……ルビークリスタル。埋蔵量は以前デストロン軍団が奪いに行った、あのルビークリスタル鉱山ほどじゃないけれどな。だけど未発見の、しかも質もそこそこのルビークリスタルだ。ここは本来某国の国有地、国定公園のど真ん中だから、国家の資産にあたるんだろうが……。すまんが、ちよろまかさせて貰おう。

「これでエネルギーをすれば……。数年は保つな……。」「数年? わたしただけで使うなら、数十年、下手をすれば100年は保つんじゃないかい?」

「いや、ちよつとした計画があるんだ。今まではエネルギーも資材も無くて、実現可能性無しとして忘れてた計画なんだがな。その計画のためのエネルギー源に使いたい。」「どんな計画だい?」

そして俺は言った。

「セイバートロン星を再生させたい。」

その後俺たちは、デストロンやサイバトロンの目をかいくぐって資材を集めた。何の資材かって？それは勿論、宇宙船のだ。基本、地上の土地は全て誰かの物だからな。公海の領域に海底鉱山を掘って、そこから金属資源を大量に得た。それを加工してパーツを製造し、宇宙船を組み上げる。

活動に要するエネルギーは、作ったエネルギーキューブにはできるだけ手を付けずに、水力発電とか、あとはこつそり海上に建造した海洋温度差発電所チャージで充電した。小規模な海底油田が見つかって、エネルギーキューブの数が増えたときは嬉しかったなあ。

いやしかし、2人だけでやったから、けっこうな時間がかかった。仕事中に40℃も気温が下がった事もあったな。メガトロンの奴が地球コアからエネルギーを抜き出したせいで、地球が寒冷化したんだらう。でもすぐに気温は元に戻った。コンボイが上手くやったんだろ。

あと、人間のニュースを傍受してたら、某ソ連の戦闘機が行方不明になって某米ソ間の緊張が高まっているとかも言っていたな。あの狂的コレクターマッドのチャムリー卿がやったんだよな。でもってコンボイが頑張って事件を解決した。俺はこのニュースをデータ化して録画して、スカイファイアーにも見せてやったよ。あいつ善良すぎるからなあ。

地球人にも悪いやつがいて、ピンからキリまであるからなあって教えて置かないと。

大地震が地球全土で起きた事もあったつけ。あれだな。地球のコアからエネルギーを奪う作戦の2種類目。巨大なドリルで地下への穴を掘って、コアにまで届かせるやつ。地球が崩壊する危険もあるんだったけどな。流星にこの件はヤバかったの、公衆電話回線をジャックして、コンボイに連絡した。いくらなんでも地球の危機なので、何なら手伝うと言って。まあ、手伝う間も無く事件は終息したんだがな。

ああ、そう言えば連絡した時に、以前パワーグライドを通じて渡したメモリーチップに関して礼を言われたな。俺のおかげで、メガトロンの計画に対して色々と先手を取れるそうさ。いつも通り、「メガトロンに対する私怨を晴らしただけだから、気にすんな。」って言うておいたが。

事件終息後、あらためて適当な場所の電話回線からサイバトロン基地に連絡した。なんか不安だったからな。セイバートロン星を巨大スペースブリッジで地球軌道に引き寄せ、重力の潮汐力で発生する大災害のエネルギーをもって、エネルギーを大量生産しようって作戦。日本版アニメ最終回の作戦についてだ。渡したメモリーチップにも情報入れてたけど、災害規模がデカすぎるから注意しろって。

コンボイは頷いてた。けど、なくんか不安なんだよな。大丈夫か？

そんなこんなで、ついに俺たちの宇宙船は完成した。

「やったな、スカイファイアー。」

「ああ。これでセイバートロン星に戻れるね。戻ったらまず……。」

「まず拠点の確保だな。その後は、セイバートニウムを手に入れて、俺たちの身体をメンテしねえとな。調べたら、あとちよつとで運動機能障害が発生しそうなところじゃねえかよ。」

「そしたら次に……。」

「うまく交渉できるといいんだけどね。」

「望みは薄いな。けど、やるだけやってみるさ。」

地下を掘り抜いたサイロに、ロケット型宇宙船は鎮座していた。俺たちは基地施設の機械設備を、可能な限り宇宙船に積み込む。貧乏性と言わば言え。俺たちは、『今はまだ』たった2人の弱小勢力だ。僅かでも、資産を無駄にするわけにはいかないんだ。

「スタースクリーム、リーダーに感ありだよ。」

「これは……。ついに見つかっちゃまったな。スラストとダージの野郎だ。ネオジェットロンだよ。だが……。」

俺は発進スイッチを押し込んだ。

「もう、遅え。」

ゴゴゴゴゴゴ……。

轟音と共に、俺たちの宇宙船は発進を始めた。スラストは俺たちの隠れ家跡へと垂直降下して行く。ほぼ何にも残ってねえんだけどな。一方のダージは、俺たちの宇宙船を追って全力で飛びつつ、レーザーを撃つて来た。俺が艦橋ブリッジで操船してんのを、見られたんだな。俺は叫ぶ。

「スカイファイアー！ フォースバリアーを！」

「了解！」

スカイファイアーの指が、制御盤コントロールパネルの上を踊る。宇宙船後部に、トレイルブレイカーのものもかくや、と言う強力なバリアーが張られた。ダージのレーザーは、バリアーに阻まれて宇宙船には命中しない。

やがてダージは、宇宙船の上昇力においてけぼりにされて脱落して行く。俺たちの宇宙船は、宇宙へと飛び立ったのだ。

そして俺たちは、無事にセイバートロン星へと到着した。いや、長い長い旅だったが、同時に何も無い退屈な旅でもあったんだ。操船の交代要員は2人しかいねえから、操船放り出してチェスや将棋やりバーシとかで遊ぶわけにもいかん。本気で退屈だった。

「……宇宙から見たときも思ってたけれど、これが今のセイバートロン星かい？」

「ああ。お前が行方不明になった後はもちろん、400万年前とすら比べ物にならねえ。これでもデストロン占領領域、その中枢部だけだが、そこはまだ多少マシになったんだぜ？俺がスペースブリッジ実験で、エネルギーキューブ届けたからな。」

「そう、か……。暗いね……。」

俺たちが着陸したのは、今のセイバートロン星では数少ない、今現在デストロンに占領されていない区域だ。当然ながら、デストロンによるエネルギー供給の恩恵に与れ^{あずか}ず、周囲は真つ暗闇だ。まあ、俺たちは暗視装置があるから、暗くても大丈夫ではある。もつとも暗視装置映像では色とかわかんねーし、普通の可視光が欲しいのは変わりない。

「ここは大昔の、金満汚職議員野郎が持ってた個人用の宇宙船発着場だ。戦争勃発時、真つ先にデストロンに襲われて死んだけどよ。ブラックアウトの奴が手柄を自慢してたっけ。」

「ブラックアウト？」

「あー、戦闘キ〇ガイ。今どこにいるんだろな。会いたくもねーが。地球のデストロン軍団には居なかったし、セイバートロンに一時帰還したときにや姿を見なかったからな。」

「なるほど。」

俺たちは宇宙船を解体し、そこから地下深くの領域エリアへと潜る。大昔の地図から、かつて大規模な金融機関があった場所に目をつけていた俺たちは、その巨大な金庫室へ資材や設備を全て運び込んで拠点化した。

「さて、と。一番近いセイバートニウム鉱山なんだが。」

「これはデストロン領域内じゃないのかい？」

「そうなんだ。だからこっちの……。」

俺は地図の上で指を滑らせて、少し離れた場所を指差す。

「小規模鉱山の跡地へ向かう。運が良ければ精錬済みのセイバートニウム備蓄が手に入るし、そうでなくとも少しがんばれば採掘できるだろう。その場合は、精錬の手間が要るがな。」

「了解だよ。急ごう。」

俺たちは小規模鉱山跡地へと向かう。往路は問題無かった。目的地にたどり着いてからも、幸いにも崩れかけた倉庫で、精錬済みのセイバートニウムを大量入手に成功した。これならば俺とスカイファイアーだけでなく、『連中』の仕上げ分にも充分だ。俺たちはでかいコンテナにセイバートニウムを満載して、引き上げにかかった。

そして帰路を道半ばまで来た時だった。コンテナを担いだ俺たちの足元に、ビームが着弾する。

「動かないで！デストロンども！」

「あー、めんどくさい奴らに見つかっちゃったな……。」「

「誰なんだい？スタースクリーム。」

「スタースクリーム!?まだ生きていたのね！エリータ・ワン！こんな奴ら生かして置く必要ないわ！吹っ飛ばしてや……。」「

「やめなさいクロミア！情報を聞き出してからよ。」

俺は溜息を吐く。そしてスカイファイアーの疑問に答えた。

「こいつらはウーマン・サイバートロン。リーダーのエリータ・ワンがコンボイの恋人だな。あの青いくせに赤いのがクロミア。アイアンハイドって真っ赤な奴の恋人だ。あっちのはムーンレーサーって、パワーグライドの恋人。一番後ろがファイヤースターって言ってな。消防車のくせに真っ赤なインフェルノって奴の恋人なんだ。」

「消防車だったら、真っ赤なのは当然じゃないの！」

「あー、意味が違う意味が。ぐだぐだ言うてるだけなら、もう行ってもいいか？」

足元に、ビームが着弾。

「……わかった、わかった。何話せばいいんだ？だけど、俺が知る限りの事は全部、コンボイに教えてあるぞ？」

「……ええっ?!」コンボイ、彼は生きているの!」

「生きてるぞ。地球って星でピンピンしてる。って言うか、400万年前にセイバートロン星を飛び立っただろ？そしてそれを追った俺たちとの戦闘で地球に墜落して、互いに仮死状態になってたんだ。」

400万年経って、テレトラン1のおかげで復活してな。地球でデストロン軍団とサイバートロン軍団でドンパチ戦ってるぜ。」

エリータ・ワンはこちらを睨みつけ、更に言いつのる。

「デストロン軍団No.2のスタースクリームが、何故そこまでペラペラ喋るのかしら？」

「きつと命が惜しいのよ。臆病な所は、変わらないわね。」

「……わたしの親友への侮辱は、よしてくれないか。」

クロミアの台詞に、スカイファイアーが機嫌を損ね、一步前に出た。

「動かないで！撃つわよ！」

「撃ちたければ、撃てばいい。けれど、ただでは死なないよ。最低でも、スタースクリームへの侮辱は撤回してもらおう。」

「くー！」

クロミアがビームガンをスカイファイアーに向け撃とうとする。そうはさせるか。

「！！！」

「トランススフォーム!!」

俺はナル光線^{ビーム}でクロミア、そしてその後ろで銃を構えたファイヤースターを撃った。直後^{トランスフォーム}変形し、狭い地下だと言うのにアフターバーナー全開で飛行してムーンレーサーの背後に回り込み、再度^{トランスフォーム}変形。

「トランススフォーム!……えい。」

「きゃー!」

足払いで転ばせて、ビームガンを遠くへ蹴り飛ばす。そしてエリータ・ワンの方を見れば、スカイファイアーがクロミアをエリータ・ワンに投げつけて転ばせ、そして銃を突きつけていた。

「勝負あり、だね。お嬢さんたち……。」

「く……。」

「あ、エリータ・ワン。シークレット・パワーで時間止めるのは止め^やといた方がいいぞ。お前さんに死なれて、コンボイの怨みを買いたくないしな。」

「な!?なぜお前が、わたしの秘密の能力を知っているの!？」

「さあな。安心しな。知ってるのは俺だけだ。DESTRONの奴らは、知りやしなからよ。」

「え、エリータ・ワン!」

ムーンレーサーが驚きの声を上げる。その視線は、俺の翼に集中していた。そう、俺の『何のエンブレムも着いてない』翼に。ようやく気付いたか。遅えんだよ。

「スタースクリームに、デストロンのエンブレムが着いてないわ!」

「な……!?!」

「ああ、メガトロンの不興を買っちゃまってね。とうとうクビになったんだ。危うく殺されるどころだった。つうわけで、俺はもうデストロン軍団じゃねえ。お前らと殺り合う意味もなんも無えんだコレが。」

ちなみにメガトロンへの意趣返しで、知り得る限りのデストロンの機密はコンボイに教えてやった。……まあ、いいか。そんなときのデータのコピーがここにある。もつてけ。地球のデストロン関係ばつかだが、ほんのちよつとはセイバートロン星のデストロン指揮官、レーザーウエーブ関係の情報も入ってるからよ。」

俺はデータの入ったメモリーチップを、エリータ・ワンに投げてやった。驚いた表情で、それを受け取ったエリータ・ワンだったが、必死で気力を振り絞って問いを投げて来る。

「わ、わたしたちを見逃すと言うの?」

「当然だろ。お前らが生きて、レーザーウエーブと、果てはメガトロンとドンパチやつてくれりゃあ、俺の溜飲りゆういんが下がるつてもんだ。今の俺の怨みは、全部メガトロンの方を向

いてるんでな。お前らへの敵愾心てきがいらんとか入る余裕は、無えんだわコレが。

行こうぜ、スカイファイアー。」

「ああ。それではね。お嬢さんたち。」

俺とスカイファイアーは、コンテナを担ぎ直してその場を立ち去る。ま、奴らに言つた事は嘘じゃない。俺の怨みは、メガトロンを向いてる。けれどそれ以上に、やらにやらん計画プランへの使命感の方が大事なんだわ。

持ち帰ったセイバートニウムで互いのボディを補修した俺とスカイファイアーは、デストロン時代に知ったほんのわずかな情報を元にして、『ある人物』の捜索にかかった。そしておそらくはこの辺の地域だろう、と言うのを特定した俺『たち』は、その人物の元へと出向く。

「こんなところに、あの伝説の人物ロボットが住んでいるとは……。」

「だよなあ。こんな辺鄙へんびなところで隠遁して研究生生活を送つてるとはなあ。」

「他人ヒトの事は、我々も言えないよ?」

「だなあ。」

俺『たち』は、あえて大声で話しながら道を進んで行く。そして1つの建物の前にたどり着いた。間違いない。アニメで観た、『彼』の家だ。俺は呼び鈴のボタンを押す。す

ると、扉が開いた。

「入って来いって事かな？」

「だろうな。」

俺『たち』は、建物へと入って行く。そして建物の奥の研究室、山の様に機械やパーツが転がっている部屋に、その『彼』が居た。俺は深々とお辞儀をした。

「……アルファートリン殿。お会いできて、光栄です。」

「わしはあまり嬉しくは無いがな。たとえ、お前がデストロン軍団を抜けていようとも、だ。」

うん、俺はコイツ、サイバトロンの長老である老ロボット、アルファートリンに会いに来たんだ。最初の感触は良くはない。だけど、今が最低って事は、今後は上がる一方って事だろ？……すまん。自分に嘘を吐いた。今後の説得の大変さに、めまいがしそうだ。

「今回は、是非にお願いあつて参りました。俺たちに、ベクターシグマの鍵をお貸しいただけないでしょうか。」

「あれをどうすると言うのか？」

「ベクターシグマを目覚めさせ、この者たちに……命を吹き込みます。」

そう言った俺は、俺とスカイファイアーの後ろに並んでいた奴ら、俺が地球に居た時

に完成させた、5体のロボットのボディを見せたんだ。オンスロット、プレストオフ、ボルトター、ブロウル、スィンドル……。そう、あの『スタースクリーム軍団』の軍団員たちだった。

第6話：新たな仲間たち

俺とスカイファイアーは、アルファートリン ジジイにジト目を送る。アルファートリン ジジイはなんか、信じられんものを見たかのような感じを漂ただよわせつつ、こちらを眺めていた。

「……スタースクリーム。頼むよ。あんな場合には、わたしを庇かばったりしないでくれな
いか。庇かばうのは機体ボデイも耐久力も大きい、わたしの役目だ。」

「済まんスカイファイアー……。だけどな、俺はたぶん似たような場面になったら、きつ
とお前をまた庇かばうと思う。理屈じゃねえんだ。」

「スタースクリーム……。」

「だからよ、お互いそう言う場面には、なるだけ陥らない様にしようぜ。」

「……ああ。」

そして俺たちは、再度ジト目をアルファートリン ジジイに送る。このジジイは俺が5体のまだ
スパークたましいの無いロボットたちを紹介したとたん、「ふむ……。あれはどこじやったかの
……。」とか言いつつ、手を天井に伸ばしたんだ。

俺はスカイファイアーに、「気を付けろー」と叫んだ。このジジイがアニメの中で、メ
ガトロンがベクターシグマのサーキットキー 鍵を奪いに来たときに、同じような事をやったのを覚

えていたからだ。

なのにスカイファイアーは、避けたり躲したりせず、自分の身体を盾にして俺を守ろうとしたんだ。俺がもしかしたら、攻撃されるかも知らんと、あらかじめ言っておいたのに。俺は泡食って、スカイファイアーの前に出ようとした。そしてこのジジイが天井からひっぱり出したビーム砲に、諸共に撃たれたんだ。

うん、今は俺たち2人とも、アルファートリンジジイの家の整備ベッドに横たわって治療リペアされてる最中なんだ。不幸中の幸いと言ってはなんだが、このクソジジイは俺たちが庇かばい合うのを見て、考えを変えた模様だ。話を聞いてみるだけでも、してみる気になっただけ。あまりにデストロンらしくない、ってな。

「……お主らが、部下を増やそうとしておる目的はなんじゃ？ 部下を増やすのは目的ではなく手段であろう。その目的が、賛同できるものでなければクォーターシグマのサーキットキー鍵は貸す事はできません。」

「……はあ。わかったよ、いえ、わかりました。部下を増やしたい目的は、2つあります。1つ目は、研究員が足りないって事です。俺たち……わたしたちは、ある目的のために危険な研究をしなければなりません。でも、その研究のためには頭がわたしとスカイファイアーの2つだけじゃ足りないんです。2人だけで研究進めて、事故りでもしたらヤバイ。」

2つ目は自衛戦力が必要だからです。わたしたちの進める研究は、非常に価値があります。デストロン軍団にバレたら、確実に狙って来るほどの。いえ、わたしはサイバトロン軍団も完全には信用してません。

コンボイは信じていいでしょう。ですが、アイアンハイドとかクリフとかインフェルノとか、あのあたりの頭の固い赤組連中は、わたしが元デストロンってだけでどう出るか……。それ以前に、研究機材やそれ用のエネルギーキューブだけで、莫大な価値です。」

そして俺は一拍置いて言う。

「ウーマン・サイバトロンあたりに勘付かれたら、わたしたちのエネルギーを根こそぎ持って行きかねない。正義のための戦いに使おうってね。」

「……お主らの研究とは？そして何を目的に研究をするのだ？」

「サイバトロン連中にも、情報を開示しないと約束をしてください。」

俺はアルファートリンの目を見据えて言う。双方の視線がぶつかり合って、火花でも出そうな雰囲気だった。やがてアルファートリンが言う。

「よかろう。わしが殺されても話さんと誓おう。わしの記憶回路にもプロテクトを嚴重メモリチップにかけよう。」

「わかりました。」

俺は徐おもむろに口を開く。スカイファイアーは俺を信頼してくれているのだろう、黙って成り行きを見守っていた。

「目的は、セイバートロン星の再生。研究内容はその手段となる、エネルギー源の確保。具体的には2案あり、1案目は衛星軌道上に建設するブラックホール炉発電システムからの、地上へのビーム送電。2案目は1案目よりは若干安全ですが、反物質による対消滅炉発電システムを地上で。」

「2案目のどこが若干安全なんじゃね?」

「炉にくべる反物質の量を絞る事で、調整が効きます。爆発事故が起きても、戦術核弾頭程度の威力で済むでしょう。1案目は、ブラックホールを閉じ込める重力バリアが万が一破れでもしたら、えらい事になるので地上にはとても置けません。」

「ふむ……。」

そしてアルファートリンは言った。

「ベクターシグマのサーキットキー鍵は、貸す事はできぬ。」

「……。」

俺たちは黙りこくる。だがアルファートリンは続ける。

「じゃから、わしが一緒に行き、ベクターシグマを起動させよう。」

「ほんとか!? あ、いや失礼、ありがとうございます。アルファートリン殿。」

「おお、ありがとうございます。アルファートリン殿。」

「じゃがその前に……。お主らの治療を済ませねばの。済まなんだな。」

はい、いもつとも。

そして俺たちは今、セイバートロン星の地下深くへ続く道を歩いている。アルファートリンの案内で、だ。

「ここを右じゃ。」

「物凄い迷路だね。これじゃ、わたしたちだけじゃあ到底ベクターシグマまでたどり着けなかったよ。」

「そうだな。さて、ベクターシグマの警備に、センチュリオン・ドロイドが就いているはずなんだが……。」

そうこう言っているうちに、出やがった。センチュリオン・ドロイドだ。こいつらはセイバートロン星最盛期の科学技術の粋を集めて、戦闘能力にそのポテンシャルを全て傾けて造られている。ただし馬鹿だが。戦闘能力に全てを振り向け過ぎたせいで。

「こいつらは……。」

「攻撃はやめとけ、俺たちの武装じゃ撃つだけ無駄だ。ただこいつらは、ベクターシグマの僕だからな。ベクターシグマの鍵サイキットキーを持つ者には逆らえない。」

「よく調べておるのう?」

アルファートリンは、一歩前に進み出るとベクターシグマの鍵サイキットキを掲げる。すると今にも俺たちに襲いかかろうとしていたセンチュリオン・ドロイドどもは、一斉に平伏する。俺はふと、後々のアルファートリンの行く末について思い出した。

「あー、アルファートリン殿。ちよつと未来予測じみた事を言ってもいいか?」

「なんじや急に?」

「メガトロンの事だ。奴はサイバトロン連中に対抗するために、おそらく陸上戦力、カーロボットの部隊を必要とするはずだ。そして手持ちのプロトフォームも無い奴の事、カーロボットに命を吹き込むためにベクターシグマの鍵サイキットキを奪いに来るだろう。」

その時に、アルファートリン殿だけでは鍵キを守り切れないだろうな。そしておそらくコンボイも、カーロボットに対抗する新戦力を必要とするはず。けど、その時にやベクターシグマの鍵サイキットキは奪われてしまつて存在しないハズ。そんな時アンタはどうする?」

俺の台詞に、アルファートリンは考え込む。俺は更に言った。

「アンタはベクターシグマが創造した最初期ロボット、1stロットだろ? アルファートリン……A-3とか名乗つてたか?」

「何故それを……。」

「偶然知っただけだ。調べたわけじゃねえ。アンタの回路は、それ故にベクターシグマ

と共通性がある。つまりベクターシグマの鍵サイキットキーの代用ができるわけだ。しかしそれをやれば、アンタは死ぬ。」

「……。」

黙りこくるアルファートリン。

「今のうちに、ベクターシグマの鍵サイキットキーの複製を作っておくべきじゃないのか？ベクターシグマを目覚めさせる事はできる、しかし秘められた力は持っていない物を。」

「シークレット・パワーじゃと？」

「ああ、アンタ知らなかったんだっけな。ベクターシグマの鍵サイキットキーには、ありとあらゆる物質を金属化させる能力がある。メガトロンの手に渡れば、メガトロンは地球を金属化させようとするだろうさ。地球人の事など考えもせずにな。」

「だからこそ、ダミーの複製鍵コピーキーだ。複製鍵が、万が一メガトロンに奪われても、最悪の事態だけは防げる様に、な。」

「……ふむ。考えて置こう。」

「いや、たぶん考えてるヒマなんて無いからな？まあ、アンタが死んでも良くて、メガトロンに余計な道具を渡してもいいならば、構わんのだが。どうせ、コンボイが苦勞はしてもなんとかするだろうからな、メガトロンの方は。」

俺は肩を竦めて言う。と、アルファートリンが笑った。

「ふふふ、お前さんは、随分コンボイの事を買っておるんじゃない。」

「戦場で幾度も、してやられたからな。その能力や人柄は、下手なサイバトロン連中よりも身をもって知ってるつもりだぜ。」

そして俺たちは、ベクターシグマが設置されている部屋へとたどり着く。その部屋に入ると、スカイファイアーが驚きの声を上げた。そこには俺たちトランスフォーマーの胴体ぐらいのサイズの、金色に輝く結晶体が集合したかの様な、球体があった。

「これがベクターシグマ……。随分と小さいんだね。」

「ま、お前さんからすりやあな。だが、俺たちトランスフォーマーを創り出したのはこの存在だつて事あ間違いない。直接ベクターシグマの前でスパークを吹き込まれたか、直轄工場で吹き込まれたかはわからんがな。」

「では始めるぞ。」

アルファートリンがベクターシグマのサーキットキー鍵を本体に差し込むと、金色の輝きはより一層増す。数百万年の眠りから、ベクターシグマが目覚めたのだ。そしてベクターシグマは中空に浮かび上がり、声を発する。

「我ハ、ベクターシグマナリ。アラユル命ニ先ダツテ、ワレハ存在シタ。ワレヲ起コシタ者ハ誰ダ。」

「はい、わたしアルファートリンです。貴方に創られた者です。」

「何故、我が眠リヲ妨ゲタ。」

「こちらのスタースクリーンに頼まれたからです。どうかスタースクリームの願いを、お聞き届け下さい。」

「答エヨ、スタースクリーン。」

俺はアルファートリンが一步横にずれてくれたので、前に進み出る。

「偉大なるベクターシグマ。このわたしとスカイファイアーの部下として製造した、5体のロボットに、命をお与えください。わたしたちと同じ、超ロボット生命体として。

そして彼らに、邪悪を避け、しかして正義を盲信せず、中庸に身を置いてその中で最善を目指す正しき心と勇氣、そしてその助けとなり、高度な研究を進められる高い知性と知識をお与えください。」

「ヨカロウ。彼ヲ前ニ。」

「はっ！お前たち、前に出ろ！」

5体のロボットが前に進み出る。そしてベクターシグマから放電にも似た光線が放たれ、5体のロボットに注ぎ込まれて行く。生命が、与えられている……。

「パーソナリティ・プログラム完了。」

そう言ったきり、ベクターシグマは沈黙して再び眠りについた。俺は5体……いや5人のロボットに向かい、話しかけた。

「俺はスタースクリーム。こっちはスカイファイアー、俺の友だ。お前たちは、俺たちの部下として創られた。1人ずつ名乗ってくれ。」

そして、5人の中でもっともガタイがデカイ奴から前に進み出て、自己紹介を始めた。

「自分はオンスロート。研究主任です、リーダー・スタースクリーム。忠誠を誓います。」
「忠誠はありがたいんだがな。よせやい。上下関係さえしつかりしてくれれば、そんな堅つ苦しくしないでいいぜ？ フランクに行こう。」

「ははは、了解だボス。俺は広範な科学知識を与えられている。専門分野では専門家にはちよつと及ばないがな。」

「頼りにさせてもらうぜ？ お前さんにや、5人のリーダーを頼む。」

「よろしく、スカイファイアーだ。」

「おう！ スカイファイアーさんも、よろしく頼みますよ！」

次に進み出たのは、紫の奴だ。

「俺は航空研究員のブレストオフだ、ボス。航空・宇宙工学が専門だ。宇宙空間での作業なら、まかせてくれ！」

「頼みにしてるぞ！ 頑張ってくれ！」

「これは助かるね。」

その次は灰色の奴だった。

「俺はボルター。航空研究員だけ。ボス、よろしく頼むぜ。気象学や地学が専門の他、物資輸送とかは任せてくれよ!」

「そいつは助かるぜ。有難え!」
ありがて

「わたしも物資輸送はできるけれど、大量に運べる代わりに一寸おおぎつぱなんだ。細かい荷運びは全面的に任せるよ。」

更に引き続き、緑色のどっしりした奴。

「ボス、俺はプロウルだ! 軍事研究員だけ! 金属工学や材料工学のプロだ! それとちよつと不本意だが、軍事研究員って役職の通り、軍事研究でもプロなんだ。」

「まあ、その辺は少し我慢してくれ。戦いが不本意だつてのは、逆に良い事だからな。」
「いい仲間が増えたね。」

最後は、カーキ色の身軽そうな奴だった。

「俺はスィンドル。経済・経営学者だよ。研究員としては若干他の皆に劣るがね。金勘定は任せてくれ。各研究の予算配分とか、無駄を省くとか、そつちの方面で貢献させてもらいたいね。無論研究助手としても手を抜くつもりは無いが。」

「おお、それは嬉しいな。俺たちに欠けていた部分だ。と言うか、そう言う方面は今まで俺が頑張ってたんだ。だけどそれで本業に差し障りも出てなあ……。」

「スタースクリーム、よかつたね……。ああ、涙腺も無いのに涙が出そうだよ。」

ここでオンスロートが、皆を代表して疑問を呈する。

「しかしボス、それにスカイファイアーさん。俺たちの頭脳には、本業であるべき科学知識の他に、軍事知識が大量にインプットされている。俺なんかは、まるで作戦参謀でも務まりそうなくらいだ。」

それに、俺たちの身体だ。^{ボディ}明らかに戦闘用と思しき過剰な武装が為されている。頭著^{けんちよ}なのがプロウルと俺だ。……想像するに、何かとの戦いを想定しているのでは？」

「いいところに気付いたな、オンスロート……。」

「そうなんだ、実はね。わたしたちが君たちを創造した第2の理由がそれなんだ。第1の理由は、研究のためなんだけど。」

そして俺たちは、5人に今俺たちが置かれている状況、デストロン軍団とサイバトロ^ン軍団の戦いに関する事、セイバートロン星が滅亡の瀬戸際にある事、それを再生させるための研究を始めようとしている事、その研究が危険である事、かつ重要な研究であるため狙われる可能性が高い事等々、全部の事情を話してやった。

「そんなわけで、戦いをあまり好かない性格に創っておきながら重武装をさせたのは謝る。だが今は、力がどうしても必要な時代なんだ。」

「君たちには、研究員としての働きを期待しているのは第1なんだけどね。自衛戦力としても大きく期待しているんだよ。」

「……了解だ、ボスたち。そんな事情ならば文句は言わねえよ。だができる事ならば、どこぞの漫^{カートゥーン}画の台詞だったが、『抜かすの剣こそ、平和の誇り』と行きたいね。ま、いざと言う時にはこの力を揮う事を躊躇^{ためら}うつもりは無いとも。

なあ、皆！」

「『『おおー！！』』』」

いい奴らだなあ……。ほんと、涙腺も無いのに涙が出そうだ。俺は言った。

「よろしい！ではこの部隊^{チーム}を、コンバットロ……いや、コンバッティコンと命名する！」
「共にセイバートロン星を再生、復興させるため頑張ろうじゃ無いか！」

「『『おおー！！』』』」

アルファートリンが見守る中、俺たちは空に向かい拳を突きあげたんだ。……いや地下深くだから、あるのは天井だったがな。

第7話：新たな仲間とかつての仲間

セイバートロン星の位置が変わった。セイバートロン星は主星たる恒星を持たない放浪惑星だ。セイバートロン戦争勃発後に、なんらかの原因……おそらくデストロンが下手するとセイバートロンの、兵器か軍事実験の失敗か何かで、主星を周回する軌道を離れてしまったのだ。

そしてセイバートロン星がある宙域は、地球のある太陽系から数万光年ぐらい離れた場所にあつたはずなんだ。だけど突然、俺たちがいたセイバートロン星は、太陽系の地球とほぼ同じ軌道に乗っちゃった。間違いない。メガトロンの仕業だ。いやほんとに。

うん、メガトロンのセイバートロン星にいるレーザーウエーブと諮^{はか}つて、惑星の……地球とセイバートロン星のあちこちにスペースブリッジの端末機を仕掛けて、巨大スペースブリッジを形成、セイバートロン星を地球近傍まで転移させたんだ。コンボイ率いるサイバートロン軍団は、やっぱりアニメ通りメガトロンの作戦を阻止するのに失敗したか。

メガトロンの野郎、赦さん。いや、だつてな？せつかく計画に使えそうな小型のブラックホール近場に見つけたのに、数万光年彼方になっちゃったじゃねえかよ。別のブ

ラックホールは、比較的近場で見つけたがよ。でも前の奴の方が、実験用にはぴったりだったんだ。

それと、奴はセイバートロン星と地球が近距離に接近することで、重力の潮汐力により引き起こされる大災害のエネルギーで大量のエネルギーをインスタントに作るうって腹だったんだがよ。地球の、我が心の故郷である日本が、いやそれだけじゃなく各国が大高潮とか暴風雨とか様々な大災害で酷い目に遭ってる。

それだけじゃねえ。セイバートロン星でも、同じ事は言えるんだ。セイバートロン星にも大気はあるんだぜ？雲だつてある。俺の研究所は地下けっこう深いから無事だったが、地上じゃかなりの嵐とか吹き荒れてる。

まずいかな、と思つてたら物凄い衝撃。地上に置いといた監視装置が壊れる直前に送つて来た映像によると、セイバートロン星の至近距離で大爆発が起きたんだ。そしてセイバートロン星は軌道を外れて地球から離れて行つた。アニメ知識通りに事が推移したんなら、メガトロンが乗つて逃げた宇宙船がサイバトロンの攻撃で破壊され、満載していたエネルギーキューブが引火して大爆発。その衝撃でセイバートロン星が軌道から外れたんだが……。

よくセイバートロン星壊れなかつたな！おい!?

その後しばらくは何事も無く、研究を続けられた。地上の被害はけっこう出たみたいだったが。先の事件の直後に起きるはずだった地球破壊未遂事件は、犯人の俺がアニメ本編とはぜんぜん違う行動をしているから起きるはずも無い。セイバートロン星はとりあえず太陽を挟んで地球の反対側の同一軌道に乗ってる。レーザーウェーブの操縦で。機械惑星の上に放浪惑星だからな。ある程度自由に動かせるんだコレが。

一瞬、そんなエネルギーあるなら地上の復興に回せとか思ったが、不安定な軌道で他の惑星とか下手すると太陽に突っ込んでしまってもアレだしな。安定軌道に乗せたと言おう事でもいいか。

そんなこんなで、俺たちは研究を続けた。反物質生成フィールド場フィールドの方は、なんとかなりそうだ。この宇宙に次元の壁を越えて隣接して存在する『反宇宙』から、少量の反物質を呼び込むエネルギー場フィールドだ。これによって得られた反物質を電磁気の瓶に閉じ込めておいて、微量ずつ放出して通常物質にぶつけてやる。そうすると対消滅を起こして、アインシュタインの法則通りに質量×光速の2乗のエネルギーが得られる。

地球人であれば、こうやって得られたエネルギーは熱エネルギーか何かの形にして、それで蒸気を作ってタービン回して発電機に繋いで電力化しないと使えないんだが。しかし俺たちには、デストロン軍団由来のエネルギーゴングキューブ技術がある。いやサイバ

トロンも、エネルギーをエネルギーに変換するぐらいまではやってたんだがな。効率の良いエネルギーテクノロジーを開発したのは、デストロンだったんだよな。

一方のブラックホール炉。ブラックホールは、周囲の質量を吸収して成長する。しかし一方で、ホーキング放射により質量をエネルギーに変換しつつ蒸発している。ブラックホールが十分に小さければ、それに投入する物質の量と放出されるエネルギー量が^{バランス}均衡し、常に一定量のエネルギーを取り出す事が可能だ。

こないだようやく適当なサイズの小規模ブラックホールを、ブレストオフに貨物として積んだ重力バリア発生装置で捕まえたんだ。それをセイバートロン星からやや遠い、地球と太陽とのラグランジュポイント、トロヤ点L4に置いてやり、ダイソン球殻^{スライア}の要領で周囲を囲ってやった。

まだブラックホール炉の方は実験用としてすらも稼働していない。けれど反物質炉の方はあくまで実験用であるが稼働を始めてる。今は反物質生成^{フィールド}場の発生に使うエネルギーと、発生させるエネルギーがほとんどであり、僅かな黒字^{わず}でしかない。だが手ごたえは掴んだと思う。システムを整理すれば、反物質生成^{フィールド}場に使うエネルギーは理論上最高1/10に、実用システムでも1/3ぐらいには抑えられそうなのだ。

だが、好事魔多しとも言う。レーザーウェーブに、俺たちの存在がバレた。まあそ

りや、宇宙とセイバートロン星の地上とを何度も行き来すれば、何かが居る事はバレルわな。レーザーウエーブは地球との連絡任務や、レジスタンスのウーマン・サイバートロン連中とのドンパチで忙しく、こちらにはあまり手出しして来ないんだが。だからと言って、油断はできません。

そんなある日の事だ。アルファートリンのジジイから、連絡が入ったんだ。どこで俺らの通信コードを……。あ、俺とスカイファイアーの身体を治療した時か!?油断も隙もねえな!

「いったい何の御用ですか?アルファートリン殿……!?」

驚いた。アルファートリンが、一介の素浪人の科学者でしか無い俺に頭を下げたのだ。画面向こうではあったが。

『済まぬ。サイバートロンであるわしが、お主らに頼めた義理では無いのだが……。エリータ・ワンが捕まって人質になってしまい、コンボイが誘き出された様なのだ。』

「……!!コンボイに、デストロンの作戦予測として教えてあったんだが……。同じデータは、エリータ・ワンにも渡してあったんだぞ。」

『ウーマン・サイバートロンは、日常的にデストロンを襲撃し、エネルギーを奪わねば、もはややっつては行けぬ状態なのだ。10回やって10回成功すれば油断も生まれよう……。どうか、コンボイとエリータ・ワンを救ってやってはくれんか。礼はかならずす

る。』

「まったく！……今、こちらで決を採ります！」

俺は俺の後ろで話を聞いていた、仲間達に問うた。簡単に、一言で。

「どうする？」

「アルファートリン殿には、ベクターシグマの鍵サーキットキーの件で借りはあるしね。」

「俺たちはその件が無ければ、生れなかつたですからね。」

「いいだろう、行きましょう。」

「借りは返しておかなければ気分が悪いです。」

「抜かすの剣でいたかつたですが、仕方ないでしょう。」

「やれやれ、予算的にはなんとかひねり出せますな。」

そして俺は、画面向こうのアルファートリンに訊いた。

「そう言うわけです。場所は？それと判明している情報を！」

俺は電波吸収塗料で都市迷彩柄が描かれているシートを身に纏い、勝手知つたるデスクトロン基地へと潜入していた。そこではコンボイが、何やら怪しげな液体……アニメ知識だと強酸だが、その入ったプールの上にワイヤーロープで吊るされている。そしてそれを見せつけるかの様にエリータ・ワンを捕まえているスカイワープと、それにアス

トロトレイン、ラムジェット、フレンジー、そして……。

「サンダークラッカー、か。あいかかわらず、浮かない顔してんな。」

戦士として、こんなやり口は気に食わないのだろう。だが卑屈で事なかれ主義的などころがあるから、言い出す事もできねえ、か。そういや玩具のテックスペックでは、デストロンの主義に懐疑的で宇宙支配にも賛成できてない、って事だったなあ。さて、と。

お、レーザーウェーブが来た。

「大変だ！ 正体不明のサイバトロン6人が、攻撃をかけてきた！ 凄い火力で、応戦不可能だ！」

「ち、仕方ねえ。コンボイの処刑を見届けられねえのは残念だが、俺たちは応援に行くぞ！ スカイワープ！ サンダークラッカー！ お前らはコンボイの処刑をその女に見せつけたら、すぐに来い！」

「わ、わかった！ おいサンダークラッカー、ワイヤーロープにつけ！」

「あ、ああ。」

レーザーウェーブ、アストロトレイン、ラムジェット、フレンジーが急ぎ立ち去る。今がチャンスと暴れるエリータ・ワンだが、スカイワープに殴られる。コンボイが叫んだ。

「エリータ！」

「サンダークラッカー！ コンボイを落とせ！」

「う、うう……。」

「何をしてやがる！」

サンダークラッカーは、躊躇^{ためら}ってやがるな。俺は飛び込む準備をした。

「ええい、もういい！くらえコンボーイ！」

キュキュン!!

スカイワープがレーザーを撃つて、コンボーイを吊るしているワイヤーロープを切った！エリータ・ワンの悲鳴が響き渡る！俺は飛び込んだ。

「ぎやあああああ!!?コンボーイ……!!」

「トランスフォーム!!」

「な何っ?!」スタースクリーム!」

俺は空中でコンボーイを機体の上面でキャッチし、更に変^{トランスフォーム}形！酸のプールの脇に着

陸した。

「つたく、手前^{てまえ}は重いんだ！早く降りやがれ！」

「な!!スタースクリーム!」

キュキュン！

すかさず俺は、レーザーでスカイワープの肩のレーザー砲を弾き飛ばす。エリータ・ワンはそれを見逃さず、スカイワープに蹴りを入れて脱出した。

「ぐわっ!？」

「コンボイ!」

「お前から動くな!」

いや、俺はコンボイとエリータ・ワンに言ったわけじゃねえよ。スカイワープと、そしてサンダークラッカーに言ったんだ。俺の左右のレーザー砲は、それぞれ片方ずつ、スカイワープとサンダークラッカーに向けてある。

「コンボイ! エリータ・ワン! 手前らはさっさと逃げろ!」

「スタースクリーム、何故お前が……。」

「アルファートリンと取引をした! いいからさっさと逃げやがれ! ……それにお前から逃がせば、メガトロンの奴が困るだろう?」

「……ふ、違う。借りしておくぞ!」

コンボイとエリータ・ワンは逃げ去った。スカイワープが怒り心頭の表情で言う。

「スタースクリーム、貴様……。元デストロンの誇りも消え失せたかよ!」

「デストロンの誇り? そんなもん、あの玩具ナイトバードに地位を奪われた時にすり減っちゃまったよ。お前ならどうだ、スカイワープ? あの玩具ナイトバードの下で気持ちよく働けるんだろうな? そう言うからには。」

「そ、それは……。」

ほら見る、黙りやがった。と、サンダークラッカーも口を開いた。

「スタースクリーム……。」

「なんだ？」

「……なあ！スタースクリーム！デストロンに戻って来ねえか!?」

「!?」さ、サンダークラッカー、貴様！こんな裏切り者を!!」

「だってよ！スカイワープ……今、俺、スカイワープ、ラムジエツト、スラスト、ダージ、持ち回りで航空参謀やってみてるんだが、駄目なんだ。誰も満足に、指揮できちゃいない。お前が居なくなつて、お前がどれだけデストロンのためになつてたか……。それがわかつたんだ。そうだろ？スカイワープ。」

「そ、それは……。」

俺は必死のサンダークラッカーに、だが首を振る。

「いや……。駄目だ、サンダークラッカー。」

「どうして!」

「第一に、メガトロンの奴が許さない。奴への腹いせで、コンボイに知る限りの機密を流した俺を、許すわけがない。」

「!!」

「いや、それが無くてもだ。ナイトバードじけんあの一件でアレだけ恥をかかせたんだ。絶対に俺の帰参は

許さんだろう。俺の事自体、赦さないだろうしな。それによ？お前その意見は、メガトロンの許しを得て言ってるわけじゃ無いだろ？」

涙腺も無いくせに泣きそうなサンダークラッカーに、俺は微笑んで言葉を続けた。

「第二に、俺がメガトロンを赦せない。絶対に。完全に。俺の仕事ぶりを、あいつはあの玩具プレイバードとは比べ物にならないくらい下だと言いやがった。断言しやがった。……俺の価値が、無いと言いやがったんだ。悔しかった。悔しかった。今もあいつに対する憎悪の炎は、めらめらと燃え盛ってるんだ。」

「……………」

「第三に、と言うか今ではこれが一番の理由かもしれないがな。色々な柵しがらみが出来た。絶対に振り捨てられない、いや俺自身が振り捨てようとは思えない、居心地の良い柵しがらみが……。新しい、俺の居場所がな。」

「スター……スクリーム……。」

泣きそうな顔で、サンダークラッカーは肩を落とす。俺は優しく言ってやった。

「じゃあな。かつての航空参謀からの、はなむけの言葉だ。道は違ってしまったが、お前らと飛んだ空は……悪くなかったぜ。じゃあな。」

トランスフォーム!!」

俺は飛んだ。かつての仲間たちの元から、今の仲間たちの元へ。

アルファートリンの家で、俺とゴテゴテした変な外装のサイバトロン6人は合流した。と、サイバトロン6人はガラガラと外装を脱ぎ捨てる。勿論のこと、スカイファイアーとコンバッティコン5人だった。

「さすがに疲れたよ。そつちはどうだったね、スタースクリーム。」

「コンボイとエリート・ワンは逃がした。たぶん今頃は、地球から来たサイバトロンどもとウーマン・サイバトロンと合流してるんじゃないかねえか？」

そこへアルファートリンがやって来る。

「アルファートリン殿？今回の件の貸しはデカいからな。前の件での借りを塗りつぶして、まだ余りあるぜ？」

「わかっておる。年寄りをあまりいじめんでくれ。」

「へえへえ、了解ですよ。」

「どうやって借りを返したもののかの。ちよつと思いつくまで、借りにしておいて良いかの？」

「かまいませんよ、アルファートリンど、の？」

そして俺たちは笑った。思い切り笑った。

その後、俺たちは研究生生活に戻った。アルファートリンが襲われて、ベクターシグマの複製鍵コピー・キーを奪われたり、コンボイたちがエアロボットを創造したり、それにも関わらずアルファートリンが生きてたりと微妙に本来の歴史を書き換えつつ時間は過ぎていく。そんなある日、ニユースが飛び込んで来た。悪いニユース、いや、俺にとって悪いニユースだった。

『我ががデストロン軍団は、これより3日後の日の出と同時に、裏切り者サンダークラッカーを処刑する！場所はセイバートロン星本部基地！サンダークラッカーは裏切り者スタースクリームと通じていた！これは絶対に赦しがたい裏切りである！処刑執行は、新航空参謀たる、スカイワープの手で行われる！』

明らかに、俺を狙い撃ちした挑発だった。

第8話：貸し借りの清算

俺は悩んでいた。おそらくはサンダークラッカーの処刑は狂言だろう。俺を誘き寄せて始末するための。メガトロンは、アニメの『スタースクリーム 俺』が何度裏切っても殺すまではしなかったほどだ。完全に、本当に完全に離反した俺ならばともかく、サンダークラッカーを処刑するとは思えない。しかし万が一、そうでなかったら？

ムービーでのガルバトロン^{メガトロン}は、初代アニメでの寛容さが嘘かと思うぐらいにあっさり『スタースクリーム 俺』を処刑している。それに初代アニメでも、結果的に助かったと言うだけで、部下を見捨てる発言や行動は多数見受けられるのだ。それと地球人とかも結果的に殺していないだけで、地球を滅ぼしたりする作戦は、けっこうさつくりと実施に移したりしているし。

「……やはり、助けにいらおう。」

「そう言うと思っていたよ。」

「!? き、聞いてたのかスカイファイアー!」

「俺たちも聞いてましたよ、ボス。」

「オンスロート! プレストオフ! ボルター! プロウル! スィンドル!」

こんな大勢に聞かれてたの気付かないほど、俺は深く考え込んだのか!?

「さて、ボス。メガトロンのやり口について、教えてくれませんか?」

「作戦を立てる上で、この中で敵をいちばん知っているのはボスですからな。」

「お前たち、手伝ってくれるのか?」

「当然でしょうが。」

「予算はちよつと持ち出しになりそうですなあ。ですが許容範囲でしょ。」

「ボス、こう言う時は頼ってくれて、構わないんですぜ?」

「……そう言うことだよ、スタースクリーム。君から聞いたメガトロンの行動方針だと、これはたぶん罠だろう。けれど、だからと言って処刑が本当でないとは限らないんだ。」

皆……。俺は、嬉しさのあまり言葉が出なかった。皆は、そのまま俺の号令を待つて

いる。そして俺は叫んだ。

「ようし!それじゃ作戦会議を始めるぞ!」

「「「「「おおー!!」」」」」

皆が唱和する。俺たちは、作戦を練り始めるのだった。

そして処刑当日。セイバートロン星のデストロン基地野外に設えられた処刑台に、鎖で縛り上げられたサンダークラッカーが引き出されて来た。俺は一般ジェットロンの

1人、ビットストリームと同じ色にホログラム塗料で身体を塗って、見物人で満員の処刑場へと潜入している。本物のビットストリームにや悪いとは思ったが、ちよつとナル光線^{ビーム}で眠ってもらい、縛り上げて物置に放り込んである。

そしてメガトロンがスカイワープを伴って姿を見せた。顔は楽し気に微笑んでいる。

「ではこれより、裏切り者サンダークラッカーの処刑を開始する！新航空参謀スカイワープ！処刑を始めよ！」

「はー！」

スカイワープが広場の中央に設置された大型のビーム砲に着座し、砲塔を回転させてサンダークラッカーに照準を合わせた。今だ！俺は手の中に握り込んだスイッチを押す。

ドガアアアアアン！！

ドゴオオオオオオン！！

ガゴオオオオオオン！！

最初にビーム砲塔が吹き飛び、スカイワープが投げ出される。そして処刑場のあちこちで、それとは比べ物にならない大爆発が起きた。

「な、何事だ!？」

「メガトロンさま、危ノウゴザイマス。」

「さ、サウンドウエーブうう！爆発があああー！」

「キシヤアアアー！」

「グルルル……。」

メガトロンとサウンドウエーブ、カセットロンどもも泡を食っている。満員の観衆のデストロン兵士は、逃げ惑った。チャンス！俺は処刑台のサンダークラッカーに駆け寄り、助け起こす。

「サンダークラッカー、今鎖を切つてやる！」

「う、ああ……。スタースクリーム……。」

俺の右手首が引つ込み、そして回転 鋸のしきりが飛び出す。それを使い、俺はサンダークラッカーを縛り上げているチェーンを切った。

「さあ、逃げるぞサンダークラッカー！」

「スター……スクリーム……。」

「どうした、急げ!!……!?!」

ビキュウウウウウウン!!

一発の銃声。それはサンダークラッカーの……。武装解除されていた『はず』のサンダークラッカーの右手に隠し持たれていた、小型ビームガンから発せられたものだった。それは狙い過あやまたず、俺の胴体に命中する。

「ぐ、うつ……!! やっぱり……。畏、だったか……。」

これも想定の内ではあった。そうであって欲しく無かったが……。小型だけあって、威力は高く無い。それに万一に備えて急所は増加装甲板で護っていた。しかし、急所以外を撃たれるとは想定外だった。頽れる俺の前で、サンダークラッカーは嫌らしく嗤いながら立っていた。メガトロンたちが現れる。

「よくやったな、サンダークラッカー。」

「メガト……ロン、様……。」

「お前の忠勤ぶり、素晴らしいぞ？」

「アリ、ガ、ト……ゴザイ……マス。」

たどたどしい返事。やっぱり……。これも想定にはあった。なんてこった……。俺はホログラム塗料を解除して、いつもの俺の姿に戻る。あの今ではもうけつたくそ悪いと感じるようになった、デストロンのエンブレムも消えた。

「メガトロン……。貴様、サンダークラッカーを、洗脳しやがったな……。」

「フフフ……。この新開発のコマンド・インストローラー、サンダークラッカーは喜んで実験台になってくれたとも。」

想定にはあったんだ。デストロンだけでなく、サイバトロンですらも敵に対する洗脳行為とかには驚くほど抵抗感が無い。サイバトロンが、デバスターを洗脳して仲間引

き入れようとした事あったからな。でもってメガトロンはそれに備えており、再洗脳でデバスターを取り返したりした。

それ以前に、ビルドロンは元々デストロンでは無かったのを、洗脳してデストロンにしたんだしな。洗脳は、メガトロンのお家芸だ。

「処刑つてのは……。」

「勿論、お前を誘き寄せる大嘘、毘だよ、スタースクリーム……。そうよな、お前もコマンド・インストローラーを使えば、素直で役に立つ上に、余計な口を叩かない勤勉な部下になるかな？」

そして俺は、手の中のスイッチを押し込む。

ドガアアアアアアン!!

「おわあああああ!? 貴様、まだ爆弾を!?!」

「め、メガトロン様!?!」

「フレンジー! 救助命令! メガトロンさまヲ、オタスケセヨ!」

メガトロンの足元、僅かにずれた場所が爆発し、メガトロンが吹き飛ばされる。この処刑場の設営は、ビットストリームに化した俺が作業してたんだ。まだ数か所、爆弾は残ってる! 今メガトロンが立ってる場所が、少しでもいいからズレてくれたら始末がついていたのにな。

だが俺はその場に頽くずれる。追加装甲を急所に施していたのに、急所からはずれた場所を撃たれたため、致命傷では無いが重傷を受けたのだ。

「ええい、サンダークラッカー！撃て撃て撃てーい！その裏切り者を、ハチの巣にしてしまえ！」

「リヨウ、カイ……。メガ、トロロン……。様……。」

サンダークラッカーは、ビームガンで俺を撃った。撃った。撃った。撃った。撃った。撃った。急所以外のところを。流石に想定してねえんだよ！急所狙うと思ったからな！

「があっ！ぐあっ！がああっ！」

「フッフ、遊ぶのはその辺にせよサンダークラッカー。一撃で急所を撃ち抜いてやれい！」

「う……。あ……。スター……。スク……。リーム。」

サンダークラッカーは、しかし撃たない。メガトロロンが叫ぶ。

「ええい、何をしておるか！撃て、撃て！撃つのだサンダークラッカー！！」

「あ、う……。」

ガチン！

引き金を引いたサンダークラッカーだったが、小型のビームガンだ。エネルギーは切

れていた。

「く、この愚か者めが！遊び過ぎだ！」

遊び過ぎ？いや、まさか……。

「ええい、こうなればわしの手で引導を渡してくれるわ！サンダークラッカー！その裏切り者を押さえ付けろ！」

「ああ……。う、うう……。」

そして俺はサンダークラッカーに羽交い絞めにされる。メガトロンは叫んだ。

「トランスフォーム!!撃てい、スカイワープ!!」

「は、はい！メガトロン様……悪く思うな、スタースクリーム!!」

くそ、予定時刻はまだか！急げ、急いでくれスカイファイアー！！

ドギユウウウウウン!!

銃声が響いた。

トランスフォームしたメガトロンの銃口が火を噴いた。顔くすおれる一人のジェットロン。

俺は叫ぶ。

「サンダークラッカー!!」

「な、ば、馬鹿な!?!奴に自由意志はもはや無いはず!!」

俺は痛む身体を必死で起こし、俺を庇かばつてメガトロンによる銃撃を受けたサンダークラッカーを助け起こす。

「サンダークラッカー！何故だ！何故俺を庇かばつた！」

「ふ……ん、400万……年の……眠り……で、……頭脳回路ブレインサーキット……に……なん……かバグ……でも……起きた……のかもな。」

それは俺が、サンダークラッカーを庇かばつてメガトロンに殴られたときに、こいつに言った台詞だった。

「へ、へ……。か、借り、は……。これ、で……。」

「ああ、返してもらった！返してもらったぞ！」

メガトロンが叫ぶ。

「フン、ならば良いわ！せいぜい、お友達ごっこをして、2人であの世オールスパークに逝かえけ!!撃て、スカイワープ!……何をしている、撃たんか！」

「は、はい!」

「くそ!」

俺はサンダークラッカーの身体を抱えて、必死で銃形態のメガトロンによる銃撃を避ける。とても避けきれぬはずが無い。だがスカイワープの射撃は何故か精彩を欠く。俺はどんどんポロポロになりながら、それでも致命傷はかろうじて避けていた。

そして待っていた物が……待っていた者が、現れる。レーザーウェーブが、通信でメガトロンに警告した。

『メガトロン様!』

「トランスフォーム!なんだ!?今良いところ……。」

『警戒線を飛行物体に突破されました!ジェットロン2名が撃墜され、重傷です!』

「なんだと!?!」

直後、空に大型ジェットが飛翔し、それから5つの影が降って来る。コンバッティコンたちだ。

「ボス!済まん、警戒線の突破に手間取った!」

「無事ですかい!?!うわ、ひでえ!」

「このやろう!よくもボスをやってくれたな!」

「スインドル!お前はボスを護ってくれ!」

「了解だよ!今回は、予算わうばん腕飯ふるまい振舞だ!遠慮なしにやってくれ!」

助かったかと思つた時だ。メガトロンが叫ぶ。

「ええい!なんなのだ、こやつらは!スタントロン!ビルドロン!出撃だ!!」

そうか、地球からセイバートロン星に連れて来ていたのか。メナゾールとデバスターの2体相手は、ちよつとまずい。

「スタントロン！ビルドロン！こうなれば出し惜しみは無しだ！合体せよ！」

「了解、スタントロン部隊トランスフォームメーション！メナゾール！！」

「ビルドロン部隊、トランスフォーム！フェーズー！！フェーズ……。」

「そうはさせないよ！トランスフォーム！」

「……スカイファイアーさん！！……」

スカイファイアーが、合体直前のデバスターの胴体上下間に割り込んで、そこでトランスフォームした!? いや、俺はデバスター対策として教えてたけどよ！スカイファイアーのどかい身体で、よく合体に割り込めたな!?

「……な!? ま、またかよー！ ……」

「よくもわたしの親友をやってくれたね！」

容赦なく射撃したスカイファイアーの火力で、デバスターは沈む。更にスカイファイアーは叫んだ。

「コンバッティコン！こっちの奴は、君らに頼むしかなさそうだ！容赦なしだ、やってくれ！スタースクリームはわたしが護衛する！」

「了解だ！コンバッティコン部隊、緊急用非常動力全開！合体！！ブルーティカスだ！！」

「……応！！……」

ゴン！ガゴン！ガギン！！

コンバッティコンたちが、スクランブル合体を敢行する。そしてメナゾールと同格の巨体が姿を現す。これが合体闘士、ブルーティカスだ！メガトロンが狼狽ろうばいした声を上げた。

「ここ、こんな馬鹿な！」

「メナゾール、貴様を、破壊する……。」

「ふん、それはこっちの台詞だぞメナゾールとやら！『俺たち』は、ボスをやられて怒り狂っているんだ！」

2体の巨大戦士の戦いを後目に、スカイファイアーが俺とサンダークラッカーの元に来る。その表情が、しか擧められた。

「これは……！酷い……。2人とも一刻も早く治療リペアしないと……！急いで連れ帰って……。」

「そうはいかんで！」

「誰だね?！」

「スカイファイアー、あいつは……。レーザーウェーブだ……。」

レーザーウェーブが、トランスフォームして馬鹿みたいに大口径大出力のレーザーを連射して来る。スカイファイアーは処刑台の陰に俺とサンダークラッカーを隠すと、撃ち合いを始めた。

「く、こんな事してる場合じゃないのに。手遅れになったら……。」
「デストロン兵士、撃て撃て撃て撃て……!!」

巨大戦士同士の戦いは、若干有利に戦況が進んでいる。しかしそのケリがつく前に、俺とスカイファイアー、サンダークラッカーはやられてしまいそうだ。最後の一手が、間に合ってくれば……!」

ゴゴゴ……!!

その時、再度大空を飛び過ぎる存在があつた。そしてその物体から飛び出した複数の影。叫ぶ声が聞こえた。

「オメガスプリーム、トランスフオオオオオオオム!!」

「エアロボット部隊、トランスフォーメーション! スペリオン!!」

「借りを返しに来たぞ! スタースクリーム!」

「ここ、コンボイ!? 貴様なぜここに!?!」

慌てるメガトロン。俺は苦痛を噛み殺しつつ、にやりと笑う。そう、アルファートリオンを介して、サイバトロンに脱出支援を依頼していたのだ。

「ま、間に合ってくれ、た、か。ぐふつ……。」

「喋らないで、スタースクリーム! 貴方がコンボイ司令官ですね。スタースクリームとサンダークラッカー君は重傷、いえ重態です。ここはお願いしても?」

「任せてくれ。サイバトロン戦士、アターーーック!!」

「ブルーティカス!ここは怪我人を助ける方が先だよ!脱出するから敵陣を切り開いてくれ!」

「まかせてくれ!うおおおお!!」

トランスフォーム

変形したスカイファイアーの貨物室に、サンダークラッカーと共に収容された俺は、溜息を吐く。そして安心してしまったのか、ぷつりと気力の糸が切れて、そのまま意識を失ってしまった。

「どうじゃな2人とも?新しい身体は。」

「ああ……。なんと言うかしつくり来るって感じだな。」

サンダークラッカーがアルファートリンに伝えて言う。ここはアルファートリンの家だ。俺とサンダークラッカーの治療リペアに手を焼いた仲間達は、貸し借りの清算を盾にアルファートリンの家に押しかけて、俺たち2人の治療リペアを頼んだのだ。

結果として、俺たちは身体ボディを取り換える羽目になった。いや、選択の余地は無かったんだがな。2人とも意識無かったし。前の身体ボディはほぼ使い物にならなかつたし。サンダークラッカーはメガトロンの銃形態での銃撃を致命的な箇所ポイントに喰らってたし。

ちなみにサンダークラッカーの洗脳は、跡形も無く解除されている。新型のコマン

ド・インストローラーとか言う洗脳装置は、数百万年前にメガトロンが使っていたロボ・スマツシャーとか言う洗脳装置より効力が低いみたいだな。なんでそんなもん、作ったんだろうな？

「サンダークラツカーの洗脳は、効力が低めじやが手軽にできる物じやつたよ。おそらく本来はコンボイたちに使うために用意したもんじやろ。コンボイたちには、洗脳予防プログラムを渡して置いた。お前たちには既に身体交換ボデイの際に施しておるし、お仲間にはスカイファイアーに渡しておるよ。」

何、色々あったから、貸し借りの清算じやと思つてくれ。これで、貸し借り無しじやぞ？」

うん、それは了解だ。まあ、ありがたいけどな。だが……。

「うん。ありがとうよ、アルファートリン。けどよ、俺たちの新しい身体ボデイなんだが。どこかで原型とかあったのか？」

「うん？ いやな、こうピーンと頭脳回路ブレインサーキットに来たんじや。」

「そうか……。」

アルファートリンの家の片隅にあつた、大きな姿見の前で俺は唸っていた。サンダークラツカーのニューボデイを見たときから、そうじやないかと疑っていたんだが。姿見を見て、やつぱり、と思つたもんだ。

俺の身体^{ボディ}、ギヤラクシーフォース版スタースクリームと言うか、シャツタードグラス版スタースクリームと言うか、アレになってやがる。いや、たぶんギヤラクシーフォース版だな。何故って、ヴァーテックス・ブレイドの片方、左側がブレイドじゃなくキャノンになってるからだ。スーパースタースクリームかよ……。サンダークラッカーも、当然ギヤラクシーフォース版だ。

頭に王^{のろいのアイテム}冠ついてなくて、良かった。ギヤラクシーフォースのスタースクリームは、スーパーになってからどんどん敗北を重ねてったからなあ。正直、最初の普通版スタースクリームだった頃の方が、凄^{すご}みと言うか怖^{おそ}さがあつたと思う。テックスペックの頭脳パラメーターも、スーパー化したら7まで落ちてたしな。

そしてアルファートリンが宣^{のたま}う。

「そうじゃ。新しくなったんじやから、名前も新しくしてはどうじゃ？ そう、スーパースタースク……。」

「お願いですからスタースクリームのままで。」

ま、とりあえずサンダークラッカーを助けられた事を喜んでおくか。今は奴の身体にも、エンブレムは着いていない。さすがにデストロン軍団には帰れないからな、奴も。俺たちの仲間入りを、了承してくれた。メガトロンの憤り、その激怒っぷりを想像すると、あまりの恐ろし気な様子に、思わず頬^{ゆる}が緩むな。ああ、心和^{なご}む。

俺とサンダークラッカーはもう一度アルファートリンに礼を言つて、その家を出た。スカイファイアーが、航空機形態で俺たちを乗せるべく待つている。その貨物室からコンバッティコンたちが、手を振っている。さあ、帰ろう『我が家』へ。

第9話：頭痛のする日常

俺たちは、呆れていた。と言うか、啞然として呆然としていた。理由は、俺たちの庭先で拾って来たこのウーマン・サイバトロン2名だ。こいつらは、アニメには登場したものの名前の紹介も無く、その後2度とアニメに出てこなかったモブキャラだったのだ、俺は名前を知らん。

こいつらはどうやら俺たちを怪しんで、エリート・ワンの指示無しに暇を見つけては俺たちを探りに来ていたらしい。で、ウーマン・サイバトロン連中はぶつちやけ日常的にデストロンからエネルギー・キューブ盗まないとやっていけないほどに、かつかつの暮らしをしている。当然無理をすれば、エネルギー切れが起きるわけだ。

そう、こいつら俺らの庭先で、腹を減らして行き倒れてたわけなんだ。今か？今はこいつら、俺たちが備蓄から引き出して目の前に置いてやったエネルギーキューブを、必死になって食^むってやがる。あ。食いつくしやがった。けどまだ腹が減ってるみたいだ。やれやれ。スインドルが、電卓を叩いて肩を落ととしてる。仕方ないから、もうちよつとだけエネルギーキューブ出してやった。

あつという間に追加を食い尽し、ようやく一息ついたこいつらは、幸せそうに大きく

「ええっ!?!」

「どうやら命令無しに勝手な行動を取ってたと言う自覚はあるみたいだな。その焦った顔からすると。」

「……。」

俺の台詞に続いて、経理を担当してるスインドルが頬をピクピクと引き攣らせながら、言葉を発した。

「それとね。お前さん方が食った分は、きっちり代価をもらおうよ?…これ請求書。」

「ええっ!?!」

「何が『ええっ!?!』なもんかね。言っただけ置くがね、それはお前さん方を憐れんで、随分と安くしてあるんだよ?…まったく。うちのボスが、コンボイ他数名以外のサイバトロンを信用しない理由がわかったよ。」

いいかね!何か貰ったら、代価を払うのは理の当然!それが正しい道つてもんだらう!それとも何かね!?!正義のためなら、正義を踏み躪つてもいいのかね!?!」

「……。」

ぐうの音も出ない様だ。と言う訳で、俺は通信機の前に陣取って、アルファートリンのコードを入力した。

エリータ・ワンとムーンレーサーが、2人を引き取りにやってきた。

「……と言う訳だ。たしかに俺はお前から見たら怪しいかもしれん。だがな、俺はメガトロンと敵対している上に、もはやデストロンを抜けた身だ。言わば『敵の敵』だ。こいつらがやった事は、戦力が少ねえお前からすれば、無駄に敵を増やす事に繋がりがねえんだぞ?」

「……返す言葉も無いわ。」

「ふう……。わかってくれりゃ、いい。こいつら引き取って、さっさと帰ってくれ。ああそれと、こいつらが腹いっぱい食ったエネルギーの請求書を、ウチの経理担当スインドルから受け取ってくれ。出血大サービスで、安めに見積もった上に利子無し、ある時払いでいいから。」

「……。」

黙って頭を下げたエリータ・ワンだったが、ここで突っ込んで来たのはムーンレーサーだった。

「ええー!?何!?この娘たち妙に顔色いいと思つたら、お腹いっぱいエネルギー食べたの!?ずるいー!!」

「こら、ムーンレーサーー!」

「だってエリータ・ワン!クロミアもファイヤースターも、それこそエリータ・ワンだつ

てお腹空かせてるのに!!もちろんあたしもー!!」

頭痛え。俺とスィンドルは顔を見合わせた。スィンドルは、大きく溜息を吐くと、請求書の文字を書き換え始める。スカイファイアーとサンダークラッカーも、げんなりした表情だ。他のコンバッティコン?研究室に逃げたよ。研究活動に逃避してやがる。

「……わかった。少量ではあるが、エネルギーキューブ都合してやる。そのかわり後払いでいいから、きっちり払ってもらうぞ?こつちだつて、エネルギーキューブは貴重なんだ。」

「いいの?」

「こゝで騒がれるよりマシだ。」

エリータ・ワンの表情が引き締まる。

「……前から思っていたのだけれど、貴方がたは何の目的で活動しているの?しかもこんな辺鄙な場所へんびに隠遁しているのに、大量のエネルギーキューブ。更には研究員とは言っているけれど、重武装した兵員たち。」

よければ教えてもらえないかしら。それを教えてもらえれば、そしてそれが正義に反するのでなければ、部下をきっちり説得して今回の様な騒ぎを二度と起こさせないわ。」

「駄目だ。」

「何故?」

俺は視線に力を込めて語る。

「正直な話、お前らを信用できない。俺が信用できるサイバトロンは、アルファートリン、コンボイ、マイスター、パワーグライド、あと2、3は居るが、まあその辺りだ。しかし俺が俺たちの目的を話したのは、アルファートリンだけだ。

何故か？理由は簡単だ。アルファートリンには部下がいねえ。コンボイは個人の信頼度ならOKなんだ。だがな。コンボイに、部下に対して秘密にしろつて言うのは無茶だ。部下たちとの信頼関係を壊しかねない。だからコンボイにも秘密にしている。

エリート・ワン。悪いがお前は、個人としての信頼度も基準に達してねえんだよ。言つとくが、アルファートリンから聞き出そうなんてするんじゃねえぞ。あの爺さんは、俺との約束を守つて自分の記憶回路メモリーチップにプロテクトまで掛けてくれたんだ。その根性に応えて、俺も話した。」

「……わかったわ。でも、アルファートリン様が了承しているのなら、それを信じる。今後、こんな事が無い様にきつちり部下を引き締めるわ。」
「そか。」

そしてエリート・ワンは部下ども連れて、エネルギーキューブ幾つか抱えて帰つて行つた。請求書見て、引き攣つてたけどな。だがそれがまっとうな、しかも良心的な価格だつてのは理解しているらしく、文句はつけなかった。

そして50〜70メガサイクル……あー、2〜3日後か。グリーンライトとランサーの2人が、また現れた。こいつら何しに来たんだ。

「お前ら何しに来たんだ。」

「え、えつと……。」

「デストロンの前進基地を昨日叩いたのよ。」

「それで幾つか機械装置が手に入ったので、こないだの代価の一部にならないかと思つて……。」

「え、エリータ・ワンには許可ももらったわ！勝手な行動じゃないからね！」

「……ちよつと待て。サンダークラツカー！高度分析装置トライコーダーを持って来てくれ！」

俺はサンダークラツカーに持って来てもらった高度分析装置トライコーダーで、こいつらが持って来た荷物を調べる。大丈夫みたいだな。

「レーザーウェーブの奴はともかく、もしかしたらメガトロンだったら、盗まれそうな機械類には盗聴器や発信器を仕込む様に命令してるかも知れん。今回は大丈夫みたいだな。後は、コンピューターや記憶装置、記憶ディスクの類にコンピューターウイルスを仕込んで置くつて事も考えられる。」

「い、一応調べただけだ……。」

「お前らは基本、戦士だろう。ファイヤースターあたりはレスキューの経験もあったか？ だけど、少なくともお前らの中に科学者や技術者は居ねえ。こう言うのはな、通り一遍で調べるだけじゃ駄目なんだ。……あつた。」

やっぱりだ。メインのコンピューターから切り離されて、別のコンピューターに繋がれたときに、時間を置いて発動するウイルスが仕込まれてた。こいつはデータの破壊活動はしねえが、通信回線を通じてセイバートロン星のデストロン本部基地に、この装置が存在する場所を通報する仕組みになってやがる。

俺がウイルスを除去しながらその事を教えてやると、この2人の顔は引き攣った。

「大変！うちの秘密基地でも、奪った計算機を据え付けちやつた！」

「急いで戻らないと！」

「……。」

頭痛え。

こいつら2人は、急いで秘密基地にいるエリータ・ワンに連絡した。事情を説明すると、エリータ・ワンは急ぎ計算機を破壊するとか言いやがったから、無駄なばかりか有害だからやめろと言ってやった。まず間違いなく、ウイルスは秘密基地の他の機器に感染してるだろ。どうすりゃいいか、と聞かれたので、仕方ないから俺たちが全員で行つ

て処置してやる事になった。

クロミアが、秘密基地に俺たちを迎え入れる事に難色を示したらしいが、知ったこつちやねえ。こつちとしても、ウーマン・サイバトロンは信じちやいねえが、『敵の敵』に潰れられちや困るんだ。それにコンボイとの関係は、ある程度良好にして置きたいしな。

「困ったお嬢さん方だね。」

「そう言うな、スカイファイアー。こいつらは戦士であつて、科学者技術者じゃねえ。」
「……………」

ウーマン・サイバトロン連中の秘密基地は、散々にウイルス感染してた。幸いなのは、まだデストロン本部基地へこの場所を通報されてなかった事か。スカイファイアーに乗ってウーマン・サイバトロン秘密基地まで来る間に、オンスロットと俺が必死こいて組み上げたウイルス除去ソフトで、基地のコンピュータ類を全部が全部チェックして綺麗にした。

「エリート・ワン……。貧乏なお前らに代金払えって言つても無理だろうから、今回ののは貸しにしとく。」

「ありがとう……。」

ウーマン・サイバトロンどもは、警戒してた相手である俺たちにピンチを救われ、意

気消沈している。まったく……。

「おい、お前から技量は確かなんだよな？ 戦士としての技量。」

「あ、え、ええ。そのつもりではあるけれど。」

「ちよつとアルバイトする気はあるか？ 報酬はエネルギーゴンキューブ。」

「「「「「!?」」」」」」

啞然としてやがる。まったくもって……。頭痛え。

そして俺たちは、地球と太陽の間でできるラグランジュポイント、トロヤ点L4へとやって来た。俺の新しい身体ボディは便利なんだよな。超空間の門ゲートを発生させて、長距離移動ができる。ここL4にはブレストオフが鹵獲してきた、小規模ブラックホールが置いてあるんだよな。

そして俺が超空間の門ゲートを使えるようになったんで、ここで行っていたブラックホール炉の研究がはかどる様になった。今まではブレストオフとスカイファイアーの2人でするときここに来てたんだが。人員を有効に使える様になった。

まあ、それは置いといて。ここでの実験で作られたエネルギーゴンキューブとか、重要物資がけつこうこの場に置いてあるって事だけ解つてればいい。

「……と言う訳で、研究内容についてはお前には教えない。だけど、メガトロンの奴に

この場所が知られたら、何か悪だくみとかするのは間違いないと思ってくれ。だからお前らには、常に交代でここに2人の人員を置いて、万が一に備えて欲しい。送り迎えは俺がやるから。報酬は、ここの実験施設で作られたエネルギーのうちの一部。」

「凄いわ。エネルギー供給が満足に行く様になれば……!!」

「デストロン連中に、もつと対抗できるわ!」

あー、結局ブラックホール炉については、細かい研究内容までは教えなかったが、宇宙で何かやってるって事だけは話しちゃったな……。やれやれ。頭痛え。

何にせよ、はつきり言っちゃえばこいつらのレジスタンス活動は、小規模過ぎるんだよな。困った事に。レーザーウェーブ配下も、超ロボット生命体の数は少なえけどよ。

でもある程度の自己判断が出来る程度のロボットなら、けっこう大量に居やがるんだ。

こいつらの事実上の指揮官である、あのクソじじい、アルファートリンどう考えてやがるんだ? 今度話す機会があったら、聞いてみよう。俺が考えてるのと、コンフリクト衝突しなけりゃいいんだけどな

……。

何にせよ、頭が痛え。もの凄く、痛かった。

第10話：NAIL旗揚げ……あれ？

俺とスカイファイアー、サンダークラッカーの3人は、トロヤ点L4ポイントのブラックホール炉研究所から大量のエネルギーを抱えて、俺の超空間ゲートを使ってセイバートロン星の俺たちの本部研究所へと戻って来た。本当ならば、ブラックホール炉衛星をセイバートロン星を周回する衛星軌道に乗せて、そこから地上へビーム送電するつもりだったんだが……。

「それやったら、デストロン連中にブラックホール炉衛星を奪われかねないからなあ。」
「まあ、本格的に我々の準備が整うまでの辛抱だよ。」

「大昔の、ロボット工場……か。」

サンダークラッカーが、しみじみと言う。そう、俺はアルファートリンからデストロンの支配領域下では無い場所にある、昔のロボット工場の位置を覚えてもらっていたのだ。そこにはベクターシグマの末端の端末機があり、そこで造られたロボットに命を吹き込むことも可能だ。ただしベクターシグマが稼働状態である必要があるが。

だからこそ、この計画にはアルファートリンの協力が必要だった。ベクターシグマの鍵サイキットキーは今現在3つその存在が確認されている。1つはメガトロンに奪われた、複製鍵コピー・キー。

これはエアロボットのシルバーボルトが、必死の追撃の末に破壊したようだ。

もう一つはベクターシグマによって創られた1stロボットのロボットである、アルファートリンそのもの。ただしあいつ自身の回路をサーキットキー鍵 代わりに使えば、奴は命を失

う。これは絶対に使わせるわけにはいかな。

そして最後の一つ。これもアルファートリンが管理している、本物のベクターシグマのサーキットキー鍵だ。これはこれでヤバい代物なんだよな。これに秘められている能力は、あらゆる物質を金属化してしまうと言う物だ。あぶなくて、持ち出せたもんじゃねえ。

そう言うわけで、今アルファートリンのジジイはもう1個、ベクターシグマの複製コピー鍵を作ってる最中だ。本物は嚴重に、オリジナル自分分しか知らない場所に嚴重に隠しているとの

事。

「そのロボット工場で、たくさん市の市民を製造すんだよな。」

「ああ。エネルギーだけあったって、セイバートロン星の復興にはならねえ。アルファートリンジジイと話し合って、色々シミュレーションした。」

某都市計画シミュレーションゲームでもやってる気になったよ、まったく。シミュレーションには、メガトロンやレーザーウェーブの襲撃も勿論イベント的に盛り込んだ。それによる損害なども計算に入れた上で、俺たちの反物質炉やブラックホール炉からのエネルギー供給があれば、エネルギーが不足気味のデストロン軍団を抑え込んで復

興できる。

問題は、デストロン軍団が反物質炉やブラックホール炉を狙ってきた場合だ。決戦戦力である俺たちやコンバッティコンが安心して反物質炉やブラックホール炉の護りに就くために、通常兵力の軍人たちも生み出さないとな。

でも軍人だけじゃ社会は不健全になる。俺はデストロン軍団を再生産するつもりは無いしな。だからと言って、サイバトロン軍団を見習うつもりも無い。あつちはあつちで、組織としてかなり歪だ。難しいもんだよ、まったく。

「それと、ブラックホール炉に使う小規模ブラックホールだがね、スタースクリーム。」
「近場で良い物が見つかったとか言ってたな？可能なら複数欲しいんだ、ブラックホール炉は。」

「ユニクロンに備えるんだったか？」

「おう。」

そう、この世界ではあの怪物が存在して、なおかつ活動してやがる。惑星サイズの超巨大トランスフォーマーで、星を喰らって活動する化け物が。俺たちは着陸して、エネルゴンキューブを降ろしながら話を続けた。

「いざとなれば、ユニクロンのどてつばらに1個ブラックホール炉をぶつける。最悪の場合だがな。」

「良さそうな規模の天然物のブラックホールは見つけたんだけどね。数が必要とあれば、人工ブラックホールを造る事も考えてはどうか。メガトロンが製造された時のデータを見つければ……。」

「メガトロンさ、いやメガトロンのか?! いけねえな、ついつい『様』をつけちゃう。」

「サンダークラッカー……。」

「いや、大丈夫だ。もう吹っ切れてるからよ。」

まあ、サンダークラッカーの気持ちもわかる。数百万年にわたり、主として敬つて来たんだ。しかしメガトロンの製造データ、か。

「ブラックホール融合カノン砲、か。生成したマイクロブラックホールから反物質を引き出してそれから得られるエネルギーで攻撃する。無茶な武器だよな。」

「たぶんセイバートロン星最盛期の、当時最新の技術だとは思うんだ。しかも極秘の機密兵器じゃないかね。デストロン軍団の。」

「そんなもん、見つかるかねえ。」

「やあ、ボスたちお帰り。」

スインドルが出迎えてくれる。他にもプロウルやボルターが出て来て、倉庫にエネルギーキューブを運ぶのを手伝ってくれた。オンスロートとブレストオフは、反物質炉の実験で手が離せないらしい。

今の所、研究は順調だ。だが好事魔多し。ここは気合いを入れないとな。

今日、俺とコンバッティコンは、アルファートリンに教えてもらったロボット工場に來ている。既にここは俺たちの試験用反物質炉から供給されたエネルギーキューブで、再稼働していた。今も多種多様なロボットが生み出されている。

いや、厳密には工場生産型 I s t r o t t の最終タイプが今しがた完成したところだ。その数、1, 500 体。ただしそのうち軍人タイプのは 21 体に過ぎない。残りは技術者や生産者など、一般市民タイプだ。

一般市民タイプは、良くてミニロボットにしろうじて比肩するか、かなり劣る程度の戦闘力しか持っていない。自衛ができれば御の字だ。性格も、戦闘向けじゃない物になる予定だしな。

軍人タイプもそこまで強力ではなく、せいぜい合体してないビルドロンと互角か、良くてちよこつと強いぐらい。でも、俺たちはデストロンじゃない。サイバトロンでもないけど。俺たちの目的は戦いじゃ無く、復興なんだ。

ちなみにこの 1, 500 体つて数は、今現在俺たちが供給できるエネルギー量から逆算して、決められた数値だ。試験用とは言え、反物質炉の完成度は実用型と言つて良いほどに上がっている。

「スタースクリームより、アルファートリン殿。」

『こちらアルファートリンじゃ。』

「ベクターシグマを起動し、直轄工場A-101-33で生産されたロボットたちに命を吹き込んでもらえる様に、願い出てくれ。」

『了解じゃ、待つておれ。』

うん、今^{アルファートリン}ジイはスカイファイアー、サンダークラッカーと共にベクターシグマのところに外向いてくれている。あつちでベクターシグマを起動し、こちらの端末機で工場生産のロボットたちに命を吹き込んでくれる様に願い出る予定なんだ。まあ厳密には、願い出るのはスカイファイアーに任せる事になつてゐる。

お。ベクターシグマの端末機が輝き出した。コンベアが動いて、その上に載つたロボットたちに次々に^{たまし}パークが吹き込まれて行く。コンバッティコンたちが、起き上がった新たな同胞たちを次々に広間に整列させて行く。

そして最後の1体が^{たまし}パークを吹き込まれた。オンスロットがそいつを列に並ばせる。そして俺は、広間の演壇^{えんだん}に登つて、皆に声を掛けた。

「諸君！ 諸君の頭脳には既に基礎的な知識はインストールされていると思う！ 諸君らが今現在立っているセイバートロン星の大地は、長き戦乱によって荒廃し傷付いている！ ……その責任の一端は、間違いなく諸君らの先達^{せんだつ}であるこの俺にもある！」

それを知った上で、俺は諸君に頼みたい！我らが母なるセイバートロン星の復興、そのために、俺に力を貸してくれ！この俺、スタースクリームとその仲間達に力を貸してくれ！俺はセイバートロン星を再生し、その繁栄を取り戻したいのだ！

俺たちは圧政の下での平和を望むデストロンとは違う！そして自由のため、正義のために戦いを選んだサイバートロンとも違う！悪を避け、しかして正義を盲信せず！中庸ちゆうように身を置いてその中で最善を目指す！

ようこそ同志諸君！『A NON-ALIGNED INDIGENOUS LIFE FORM』へ！！そう、俺たちはNAIL、俺たちはネイルだ！！

うおおおおお！！

ウオオオオオオ！！

ウオオオオオオオオオオ！！

1, 500人のトランスフォーマーが、右拳を天の方向へ突きあげて、叫ぶ。もの凄いい迫力だ。うん、さすがにそろそろ組織名が欲しかったんだけど、思いつかなかったからアメモミのトランスフォーマーにおける中立組織、NAILの名前をパクって来た。科学知識はともかく、ネーミングセンスは俺には無いからな。

「きやー！スタースクリーム様——ちよつとボデイ変わってるけど、それもまた良し！きやー！」

……うん？なんか最前列にいるウーマンタイプの軍人トランスフォーマーが、何か様子がおかしい。って、なんで今完成したばかりの奴が、俺の身体ボディが変わってる事を知ってるんだ？あ、なんか投げキッスしてきやがる。

戻って来たスカイファイアーにサンダークラッカー、そしてコンバッティコンたち、そしてスカイファイアーたちが今回手伝ってもらったお礼にと食エネルゴンほきゅう事に誘ったアルファートリン。この面子で今、飯エネルゴンほきゅうしてを食っている。いるんだが……。

「やーん、ついにニューリーダーになっちゃったのねー、スタースクリーム様♪でもデストロンを捨てるとは思いつたのねー。」

「マテ。お前さんはナニを言っているのか。」

「やだもう、ルナクローバーって呼んでよ。」

いや待て。ルナクローバーだと？俺のアニメ知識とかには、そんな名前のトランスフォーマーは居ないぞ。それはともかく、呼んでもいないコイツが会食の会場にずんどこ踊り込んで来やがった。何にせよ、お前の事は知らんぞ。

「あら？わたしの事覚えてないのー？記憶回路メモリーチップの故障かしら？」

「待て。お前は今しがた完成したばかりだろうが。覚えてないも何も、最初から知らんぞ。」

「あれ？そう言えば、あたしの武装とかも全然違つてない？やーん、デストロンのエンブレムも無いー。まあいいけど。」

「……ちよつと待ちたまえ、お嬢さんや。」

「ここで口を挟んだのは、アルファートリンだ。他の奴ら？啞然として、黙々と食つてるが？」

「何よ爺さん。」

「すまんが、ちよつと調べさせてもらつても良いかの？いや、変な事はせん。お主も今の状態は変じやと思つじやろう？」

「うーん、あんまり気が進まないわね……。」

「いいから調べてもらえ。爺アルファートリンさんは、こう言う事態のプロだ。」

「うーん……。」

結局俺の一言が決め手になつて、アルファートリンはこのルナクローバーとか言うのを調べた。調べた結果、とんでもない事が判明した。

「うむ、お主のスパークたましいは、間違いなく先ほど創られたばかりじやな。ただ、それに焼き付いており、そしてスパークたましいから身体ボディの記憶回路メモリチップに焼き付けられた記憶や感情は、並行異世界からやつて来た物じや。」

「え？え？わたし良くわからないんだけど。」

「簡単に言うとはやな。お主は並行異世界で、その世界のスタースクリームと何らかの
関係があった……お主の行動からして友好関係じゃと思うのじゃが、その並行異世界の
トランスフォーマーの……。」

「ふんふん。」

「コピーじゃ。」

「え。」

なんか衝撃的な事を言ったぞ、この^{アルファートリン}ジジイ。

「アルファートリン殿、こいつがコピーって、どういう事だ。」

「読んで字の如し、じゃよ。ベクターシグマの^{ちから}能力は偉大じゃ。オールスパークを元に
^{たましい}スパークを創造し、^{ボディ}身体に宿らせるほどの。そしてオールスパークもまた、偉大じゃ。
それが数多の多元宇宙、並行異世界に及んでおつても、おかしくは無い。」

そして、他の宇宙のルナクローバーとやらのスパークが、何らかの原因でお主のス
パークに転写されたのじゃ。少々荒唐無稽じゃが、それ以外に考えようが無いのう。」

「なんとまあ……。」

「とんでもねえ……。」

「俺にインストールされた科学知識でも、追いつかねえ……。」

スカイファイアー、サンダークラッカー、オンスロートが呆然と言う。そして当のル

ナクローバーは……。

「わ、わたしが、こびい？」

「そうじゃ。」

「コピー？複製？偽者？」

「うむ。」

「そ、そんな……。」

あ、やばい。こいつ今にも泣きそうに顔を歪めた。俺はとりあえず、なんと行って慰めたらいいかわからんが、とにかく慰めの言葉を掛けようとした。だがそれに先んじて、こいつは口を開く。

「ま、いつか。」

「「「「だああああああ!」「」」」」

その場のほとんど全員が、ずっこけてひっくり返る。俺も例外では無い。エネルギーキューブが、宙に舞った。しかしそれをスカイファイアーとブレストオフが、落下前にひよひよいと捕まえる。なんかお前ら、随分と図太いな。スインドルが起き上がりつつ言った。

「あいたたた、スカイファイアーさん、ブレストオフ、ナイスだ。エネルギーキューブが落ちて衝撃で爆発でもしたら、ヤバいところだった。経済的にもね。」

「うん。まあ、わたしはトンデモ無い事態には慣れてるからね。」

「俺もな。宇宙では、何が起きても不思議じゃない。」

俺はテーブルに掴まって起き上がりつつ、ルナクローバーに声を掛ける。

「お、お前ソレでいいのか？」

「うん。コピーだろうがなんだろうが、わたしはわたしだし。それにこのスタースクリーム様がわたしの知るスタースクリーム様じゃないって事だけど、わたし自身が本物のわたしじゃ無いんだから。だったら、ちょうどいいかなーって。」

「そうかね。だったら丁度いいかな。」

スカイファイアーが、頷きつつ言った。おい、お前何を。

「ルナクローバー君だったね。スタースクリームの副官になつてもらえないかい？今まで副官業務は兼務でわたしがやっていたんだが、これでも組織のN.O. 2と言う立場は大変だね。今回一気に大量の仲間達が増えた事で、とてもじゃないが手が回らなくなりそうなんだ。」

「N.O. 2のスカイファイアーと、N.O. 3の俺、そしてブレイン集団のコンバッティコン。それだけの規模でも大変だったんだがよ。今後は大変になるなあと思ってたんだが。お前が副官やってくれんなら、幾分かは楽になるな。」

サンダークラッカーまで……。ちなみに前にも言ったかも知らんが、副官はN.O. 2

じゃなく指揮官のサポート役だ。No. 2は副長とか副隊長とか言う。日本語ではどっちも『副』だから誤解を招いてるんだが。日本語は難しいな。

「りよーかいー♪副官任務、承りました！」

「お前、わかってんだろ？俺たちの目的は、セイバートロン星の再生と復興！」

「大丈夫！まかせてよ！」

物凄く不安なんだが……。

何はともあれ、俺たちの仕事は次の段階に入った。ここまで来れば、デストロン軍団にも目を付けられるのは間違いない。そしてサイバートロン軍団も、赤組連中は信用も信頼もできねえ。

俺たちNAIは、今現在はデストロン支配領域以外の、小さな領域で旗揚げしたばかりだ。これから少しずつ領域を広げ、活動を活発化させていかねばならん。そして何としても、セイバートロン星を復興に導くのだ。

ちなみにこの考えって、人間として生きてた『俺』の物じゃないし、元の『俺』の物でもないよなあ。2つが融合した『今の俺』だからこそこの考え、だよな。なんか、胸が熱くなるな。

「スタースクリーム様〜♪」

……。
だ
け
ど
コ
イ
ツ
、
不
安
だ
よ
な
あ
……。

第11話：対決、メガトロン！

俺たちが住むセイバートロン星の一角は、今現在非常に賑わっている。科学者連中により日々新たな技術が開発され、あるいは昔の技術が復活されて、技術者連中がそれをブラッシュアップして実用化する。生産者連中もまた、その実用化された技術の産物をどんどん生産し、市民たちの生活の質を上げている。他の職種の者たちも一生懸命頑張つて、この区画を盛り上げようと努力を重ねているのだ。

そして今、俺たちの住む一角は『技術屋の天国』エンジン・アース・ヘブンと誰からともなく呼称されている。元俺たちの研究所だったところも今は増築され、政庁及び軍事基地としての機能が持たせられているのだ。全体としてこの一角は、都市国家的な体裁が整えられている。

ここまでなら順風満帆に聞こえるのだが、やはり問題も出ている。まずセイバートロン星各地に隠れ潜んでいた、軍団に入っていないサイバートロンたちとか、メガトロンに賛同できないで隠れていた、はぐれデストロンたちが、難民として続々とやって来るのだ。

これは当初より想定していたし、受け入れる事もやぶさかではない。ただしNAILとして本当に市民になるには、サイバートロンやデストロンの立場を捨ててもらわねばな

らない。そうでなければ、一時滞在者の身分のまま、色々な制限が付く。サイバトロンやデストロンを捨てられない者は、大半が傭兵になって都市防衛軍の下に就いた。傭兵は危険な仕事に就く分、多少制限が緩む。

しかしこの件における本当の問題は、難民の数が予測の上限ぎりぎりに近かった事だ。かろうじて予想の範疇だったとは言え、かじ取りが難しくなるのは間違いない。エネルギー供給の問題は、2基目の反物質炉を離れた場所に建造する事と、宇宙のブラックホール炉研究所のブラックホール炉を本格稼働させる事で対応した。

それに元サイバトロンと元デストロンの間で衝突が起こる可能性もあるし。今の所は市民になった者たちは、セイバートロン星を再生、復興させようと言う理想に共感してくれており、問題行動は多く無いが。多く無いだけで少しはあるんだ、うん。

そしてもう1つの問題、先ほどの問題よりもある意味深刻な問題が存在している。こちらの活動が派手になったため、デストロン軍団がNAILに目を付けたんだ。そして最初は、レーザーウェーブからの親書が届いた。いや、親書とは名ばかりの、降伏勧告だった。

大まかな内容を述べると、次の様になる。

1つ、税金として大量のエネルギーを納める事。

2つ、デストロン軍団に労働力として、莫大な人員を供出する事。

3つ、戦闘力のある者はメガトロンに忠誠を誓い、デストロン兵士となる事。

これらが為されれば、メガトロン大帝の御名において特別に、NAIIL指導者を執政官として最低限の自治を認めていただけそうだ。ありがたい事に。ただしデストロン軍団より執政官補佐が送り込まれて来るとの事。当然執政官は、補佐の意見を100%飲まなくてはならない。

どの条件も、飲める物ではない。1つ目の税金は、まずもって飲めない。税金と言うのは、社会の維持のため、たとえば道路工事とか橋梁工事とか社会福祉とかの財源のために使われるべき物だ。だがデストロン軍団に納めたら、戦いのため、そしてメガトロンの宴会に浪費されるだろ絶対。奴らは絶対に、こちらの市民に対する公的サービスには用いないだろう。

2つ目だって、これは事実上の奴隷だ。カスみたいなエネルギーで、無茶な労働を強いる気満々だ。そんな物に、大事な人材を出せるわけが無い。絶対に、だ。3つ目だが、これも2つ目と意味合いは同じだな。奴らはサイバトロンとの戦いで、捨て駒が欲しいだけなのだ。

第一、NAIILのリーダーは俺で、No. 3はサンダークラッカーなのだ。奴らはただそれを知らないはずだが、俺たちが再びデストロン軍団の下に入る事は、絶対に無い。執政官の座？ 執政官補佐？ いるかよ、
レーザージェットのメモ
 ターコ。

そんなわけで、当然ながらこの親書の体裁を取った降伏勧告を、俺たちは蹴った。そしてら向こうは、嬉々として攻めてきやがったんだ。丁重に腰を低くして親書を出したのに、この無礼赦し難しがた、だそうだ。レーザーウェーブレーザウエーブのアホアホ。タコタコが。あつちにはスペースブリッジがある。地球に最低限の備えを残して、破壊大帝メガトロン御自らの出征、征伐だど。

と言う訳で、デストロン軍団が攻めて来た。こちらの都市防衛軍正規軍は、そこまで強いわけじゃないが、皆指揮能力は高い方だ。それに稀に、元はぐれデストロンや、軍団に入っていないが凄腕の元サイバトロンも居る。その上に、デストロンやサイバトロンエンブレムを捨てられなかったが、それでも『技術屋エンジニアーズ・ヘブンの天国』のために戦ってくれる傭兵部隊の連中もいるんだ。

そんなこんなで、当初俺たちは政庁を兼ねた基地本部で待機しつつ戦闘の全体指揮を執っていたんだ。だが1ヶ所で、防衛戦が破られそうだと報告が舞い込む。なんでも薄緑色の巨大兵士と、黒と言うかダークグレイと言うかの巨大兵士が出て、高笑いするメガトロンの命によりそいつらが押し寄せて来たらしい。

「デバスターとメナゾールか。スカイファイアー、全体の指揮を頼む。俺、サンダークラッカー、ルナクローバー、コンバッティコンで救援に向かう！」

「わかったよ、任せて。」

「お前ら、行くぞ!!」

「「「「応——!!」」」」

俺はコンバツティコンに指示を出す。

「コンバツティコン! 最初から合体していけ! 合体時の隙を突かれるとヤバいからな
!」

「了解ボス! コンバツティコン、ユナイト合体だ! スクランブルパワー緊急用非常動力、全開!!」

「「「「おお——!!」」」」

ゴン、ガゴン、ガギゴン!!

あいかわらず頼もしい、合体闘士ブルーティカスの雄姿。そして俺はルナクローバーに声を掛ける。

「ルナクローバー、お前には俺の背中を任せたぞ。」

「了解! スタースクリーム様! まかせてよね!」

「……それと、向こうにはウーマン・サイバトロン連中も居るが、殺そうとすんなよ?」

「……駄目?」

「可愛く言っても駄目。」

「えー! わたし可愛い!? やった!!」

「……。」

こいつ、傭兵契約に来たウーマン・サイバトロンのエリータ・ワンとクロミアを見て、こっそり撃とうとしやがったんだよな。ウーマン・サイバトロンの連中は、今現在最上位の傭兵として契約を結んでる。腕はまあ確かだからな。

しかしあんときは怖かった。「スタースクリーム様、どいて。その女、殺せない。」だもんな。必死こいて、こいつらはコンボイとアイアンハイドって言う恋人がいるから、俺の事あノー眼中だって説得したんだ。そしたら、「何それ……？スタースクリーム様が眼中にないなんて……？」と冷たい目線で剣構えるし。どうせいつちゆうんだ。

好かれてるつつうのは分かる。分かるんだが……。ちよつと病んでないか？

「ブルーティカス、俺たちがメナゾールの注意を引いてる間に、まずデバスターを片付けてくれ！デバスターごときはお前の敵じゃない！サンダークラッカーは、済まんがメガトロンの相手を頼みたい！」

じゃあ行くぞ！出撃だ！トランスフォーム！

「「おおー！！」トランスフォーム！」

俺が発生させた超空間の門を潜り抜け、俺たちは戦場のただ中に出現する。その場に居たNAIL側トランスフォーマーたちが、口々に歓喜の声を上げた。

「リーダー！！」

「ボス！！」

「親分!!」

そしてメガトロンが威嚇のつもりか、怒声を張り上げた。

「貴様がNネAイIルLとやらのリーダーか!む?貴様どこかで……。」

俺はトランスフォームして、顔を見せてやる。

「き、貴様は!スタースクリーム!?そのボディは!」

「俺がいなくて、寂しかっただろう?」

メガトロンは叫ぶ。

「ほぎけ!メナゾール!デバスター!この愚スか者スタースクリームを叩き潰してしまえ!」

「おおお……。」

「ぐああ……。スタースクリーム、今日が貴様の最期さいじだ……。」

「そうはいかねえんだよ!ボスは殺やらせねえ!」

「ぐわ!」

ブルーティカスが割って入り、作戦通りデバスターと格闘戦に入る。その間俺はセイバートロンジェットに、ルナクローバーはセイバートロンヘリトランスフォームに変形して、メナゾールの周囲を飛び回った。

「う、五月蠅いハエがあああアア!!」

「俺は……だあつ!」

メナゾールが振るった大剣を、ひらりと躲かわして膝裏ひざうらにミサイルを撃ち込む。そして続けざまに顔面の眼を狙ってビームを叩き込む。ルナクローバーはあえてメナゾールは撃たずに、周囲の敵を監視している。俺を狙おうと言う奴が出たら、そっちにミサイルを撃ってるな。流石だ。おかげで俺はメナゾールに集中できている。

「ぐあーめ、眼が……。目がかすむ。」

「ち、頑丈な奴だな！目がかすむ程度か……。」

一方のメガトロンは、銃形態にトランスフォームしてサウンドウェーブに射撃させて、サンダークラッカーを墜とそうとしてやがる。けれどサンダークラッカーもまた、新ボディだ。Su-35型の高機動力で、メガトロンとサウンドウェーブを翻弄ひんりやうしている。

「貴様、サンダークラッカーか！この裏切り者め!!」
スタースクリーム

「正直アンタには、もう付いていけなかつたんですよ！おさらばできて、清々せいせいしてますよ！破壊大帝！」

「「「うわあああああ!!」」」

「で、デバスター!!お、おのれスタースクリーム!!」

デバスターがブルーティカスに投げ飛ばされ、6体のビルドロンにバラける。俺は声を上げた。

「NAI! 都市防衛軍! ビルドロンを二度と合体させるな! 撃て撃て撃てーい!!」

「次は貴様だぞ、メナゾール!」

「貴様、ブルーティカス……!! 先日の借りを……。パワー・モード!」

「行け! ボルター!」

「応!!」

手足を取り換えるスクランブル合体で、パワーを向上させて有利になろうとしたメナゾールだったが、その左腕にブルーティカス本体を離れて唸喊とつかんしたボルターが割り込み合体をかけた! 本来左腕になるデッドエンドがはじき出されて地面に転がる。ボルターが割り込んで合体したメナゾールの左腕は、メナゾール自身の顔を殴りつける。

「ぐああ!?! げっ! ぐがあ!」

「終わりだ、メナゾール!」

一方の俺は、はじき出されたデッドエンドを集中攻撃した。

「うぐあああつ!?! く、お、俺もただの錆サビの餌になる時が来たのか……?」

「ええい、何をしておるかデッドエンド! く、こうなれば! サウンドウェーブ! サンダークラッカーは良い! スタースクリームを狙って撃て! 全力でチャージして撃ってやるわ!!」

「リョウカイ、メガトロンサマ。攻撃目標、変更スル。」

「あぶない！スタースクリーム様ー」

何?! ルナクローバーが変^{トランスフォーム}形して、俺とサウンドウェーブ&メガトロンの間の射線に割り込んだ!! ちよ、俺なら躲^{かわ}せるってば! って、やばい!!

「ルナクローバー!!」

やばい、このままでとコイツが死ぬ! それはいくらなんでも不憫だろう! 普通に生まれてくるハズだったのが、何の因果かどつかの並行異世界、多元宇宙の別トランスフォーマーのスパークをコピーされて! それでよく知りもしない『^{スタースクリームの}俺』への恋愛感情を殖え付けられて!

そんなの、いくらなんでも不憫だろう! 憐れだろう! しかも本来俺なら躲^{かわ}せる攻撃を庇^{かば}って受けて! そんなの無いだろ!?

その時、^{データかいせん}脳裏に何か^{アクセス}が接触してくる感覚があった。俺は闇雲^{やみくも}に、ソレを^{インストールす}引き寄せる。俺は叫んだ。

「トランスフォーム!! フォースチップ……イグニッション!!」

何処^{いずこ}とも知れない空間から何か^{アクセス}が出現して、俺の背中の拡張スロットらしき場所に叩き込まれる。これは、フォースチップ!?! しかもTVアニメのトランスフォーマー・ギャラクシーフォースでGFスタースクリームがイグニッションしていた、セイバートロン

仕様、デストロンマークのフォースチップじゃない。

これは……アレだ。ベクタープライムがイグニッションしてた、セイバートロン仕様でも地球仕様でもスピーディア仕様でもアニマトロス仕様でもギガロニア仕様でもない、宇宙空間か時空か何かをイメージしたフォースチップだ。それはそうだろう、この時空には、チップスクエアもプラネットフォースも存在しない。セイバートロン星だつて、プライマスの身体ボデイじゃ無いんだからな。

そして、機構的には存在していたが、今まで稼働させる事が叶わなかった2つの武器が、俺の中ボデイで目を覚ます。

「ヴァーテックス……キャノン!!……ブラレイドおおおお!!」

左のヴァーテックスキャノンと右のヴァーテックスブレイドが展開し起動。俺は俺を庇かばうルナクローバーの左脇の下からヴァーテックスキャノンの砲身を突き出して、狙いを付け……。

メガトロンは自身の全力を充填チャージしたビームを、銃形態トランスフォームに変形した自身の身体ボデイから発射した。そしてその射線に乗せて、俺もまたヴァーテックスキャノンを発射。

カツ!!ドゴオオオオオオ!!

「きゃあああ!!」

「ウオオオオオオオオ!!」

「うわあああああー!と、トランスフォーム!!な、何が起きたサウンドウェーブ!」

俺とルナクローバー、メガトロンとサウンドウェーブの中間点で、凄まじいまでの大爆発が起きる。サウンドウェーブは、必死に状況を分析した。

「オ、オソラク……。スタースクリームノ砲撃ト、メガトロンサマノ最大攻撃ガ、双方ノ間デブツカリアイ、大爆発ヲ起コシタノダ……。」

「なんだ?!?あのスタースクリームが、わしと同威力の……。わしの全力全開と同等の威力のビームを撃つたと言うのか!」

「……貴様に出来て、俺に出来ない事などあるものか。」

「!?!」

嘘です。少なくとも変トランスフォーム形して他トランスフォーマー人の手の中に収まるほど小さくはなれません。って言うか、ソレはメガトロンとかサウンドウェーブとかリフレクターとかじゃないと出来ないけどな。何にせよとにかく。

俺は爆発に紛れまぎ、メガトロンの斜め後ろに移動していた。そして右手側に装備されている、ヴァーテックスブレイドを一閃させた。

「うがあああつ!?!」

「メ、メガトロンサマ!?!」

ち。ぎりぎりで回避された。首を狙った斬撃は僅わずかに逸それて、メガトロンの右腕を肩

口から斬り落とした。俺は融合カノン砲が着いたままの右腕を、遠くに蹴飛ばす。

「わ、わしの、腕、腕があああ!!お、おのれスタースクリーム!覚えておれよ!デストロン軍団!!撤退!!」

「う、うわああああああ!」

「お、おたすけえええええ!!」

「あわわわわ!!」

デストロン軍団は撤退して行く。追撃も考えたが、NAI都市防衛軍の被害も大きい。死者はいない様だが、負傷者は数多くいる。メガトロン……。トドメは刺せなかったか……。

分離して5人になった、コンバッティコンがやって来る。

「すいませんボス。あそこまで追い詰めておきながら、分離されてバラバラになって逃げられました。」

「いや、それは俺にも言える。メガトロンを逃がしてしまったよ。だが、とりあえずは勝利だな。」

「「「「うおー!!」」」」

「「「「うわああ!!」」」」

周囲から一斉に、勝鬨かちどぎが上がる。俺は叫んだ。

「負傷者の救助を急げ！一人たりと死なせるな！」

「「「「了解!!」」」」

「……無事か？ルナクローバー。」

「はい！スタースクリーム様！」

「……頼むから、あんな無茶はしないでくれ。ああ言った場合は、メガトロンとサウンドウェーブに銃撃でも送り込めばいいんだ。万一お前に死なれでもしたら、寝覚めが悪い。」

「えっ……。」

ルナクローバーは、両手を頬にあてると、いやんいやんと首を振る。

「こ、これはついに!?デレ期!?デレ期が来たの!?やった！勝利！大勝利！」

「おまえな……。とりあえず、お前も負傷者の救護にあたってくれ。」

「はいっ！」

「それとな。ウーマン・サイバトロン傭兵を、この機会に始末とかするんじゃないやねえぞ。俺はコンボイと敵対する気は、さらさら無いんだ。」

「……ちっ。」

うん、ウーマン・サイバトロン傭兵の連中は、数人が負傷してるのが見て取れるんだ。って言うか、舌打ちすんなルナクローバー。

そして本部に戻った俺は、スカイファイアーから全ての戦線において、デストロン軍団が撤退した事を知らされる。幸いなことに、死者はいない。だが重傷者や重態患者は居る模様。予断は許さない。

「ご苦労さま、スタースクリーム。……それは?」

「メガトロンの腕だ。だけどそれよか大事なのは、こつちの方だな。メガトロンのブラックホール融合カノン砲。これを解析して、ブラックホールの人工的な発生方法を調べる。そうすれば……。」

「ブラックホール炉が、天然ブラックホールに頼らずに建造できるね!」

そう言う事だ。1基でも多くのブラックホール炉を、セイバートロン星の衛星軌道に乗せる。そして……。ユニクロンの来襲に備えなければならない。ユニクロンの来襲に対抗する案はそう多くは無いが、それでも幾つかある。しかしどれもこれもこれもエネルギーが必要だ。

なんとしても、デストロン軍団からセイバートロン星を奪取し、対惑星サイズ兵器を建造しなければ……。メガロンもやつかいだし、未だに俺は奴を憎んでいる。だがそれよりも、ユニクロンを倒さない限りセイバートロン星に平穏は来ない。なんとしても

……!!

第12話：カセットロン哀歌、そして……

今、俺たちNAILの政庁兼軍事基地でもある研究所は、大騒ぎになっていた。

「おい、そっちに行つたぞ！」

「逃がすな撃ち落とせ！」

「わ、やめろ！こっち向けて発砲すんじゃねえ！」

うん。来ると思つて、警備を増強しておいたんだが、それでも侵入されたんだ。なんであんな怪しいカセットテープ見逃すかな。俺は腰部ビームキャノンからナル光線^{ビーム}を発射し、飛び回るカセットロン燃料偵察兵ラットバットを麻痺させて墜とす。

「こいつは武装の回路を切つて、閉じ込めておくんだ！それよりも、こいつだけとは限らん！警戒を密に……。」

『こちらスカイファイアー！スタースクリーム、やられた！空中攻撃兵コンドルと、空中破壊兵バズソーだと思われるよ！』

スカイファイアーからの通信内容は、思った通りだった。

「スカイファイアー、何があつた！」

『分解して調べていた、メガトロンの融合カノン砲だ！解析が終わつたので、まとめて置

いていたら、2匹がかりで丸ごと持っていかれた！逃げられてしまったよ……。」

「逃げられたのは仕方がない。データは無事か？」
『それは大丈夫だ。データのオリジナルも、バックアップも問題なしだよ。』
「なら、最悪の事態は防げた……!!? まずい!!こちらスタースクリーム!!中古部品置き場に、警備員を派遣せよ！」

俺は近場の通信機に飛びついて叫んだ。そして方が一に備え、俺自身も中古部品置き場へと走った。

そして今現在。俺、ルナクローバー、スカイファイアー、サンダークラッカー、コンバッティコンたち、つまりNAIL中心トランスフォーマーの人。物らの前には、俺たちNAIL技術陣謹製の超合金ワイヤーでぐるぐる巻きにされたカセットロン特殊破壊兵フレンジーとラブルが居る。結局俺がナル光線ビームで麻痺させてとっ捕まえたんだ。だけどこいつらが身体張って逃がしたので、諜報破壊兵ジャガーには逃げられてしまった。

ジャガーはメガトロンの手首部品パーツ衛むかえて逃げた。手首パーツだけなのは、メガトロンの右腕はバラツバラに分解して中古部品パーツ扱いで置いといたので、他は持つて行けなかつたんだ。

……まあ、メガトロンの融合カノン砲はともかく、腕パーツとかは俺がデストロンN

0. 2 やつてた時代、海底基地の倉庫に在庫あるの知ってるからな。カノン砲だけでも取り戻せれば、メガトロンは戦列復帰は可能なわけだ。上腕、下腕、パーツを奪われたままなのは、奴としては腹立たしい事だろうが。

「しかし、大事な部下3人と引き換えに取り戻したのは、融合カノン砲と右拳パーツだけか。お前らも大変だな。」

「さ、3人!？」

「ああ、お前らの他にラットバットも捕まえてある。今は牢屋だ。心配すんな。お前らを殺すつもりはねえよ。下手に逃げ出そうとしたりしない限りな。」

フレンジーとランブルは、顔を見合わせる。そしてランブルが言った。

「俺たちや、何も喋らねえぞ!？」

「わかってる。お前らのメガトロンへの忠誠はともかく、サウンドウェーブへの忠誠っぷりは良く知ってるあな。」

「スタースクリーム様! わたしにいい考えがあるわ!」

「悪い予感がするから却下。」

「ええー!?!」

ルナクローバーの意見を聞かないうちから却下する。けれどスカイファイアーが視線で抗議してきたので、仕方なしに水を向けてやる。

「わかったわかった。話して見ろ。」

「こいつらの記憶回路引き摺り出して高度分析装置にかけちゃいましょう！」

「ひいいひいいひいひいひいひい!!」

「却下。」

「ええー?!」

うん、スカイファイアーは、視線で謝って来た。

「いいかルナクローバー。それじゃデストロン軍団と変わりねえよ。最初の演説のとき言ったろ?俺たちや悪を避けて、だけど正義も盲信しねえんだ。悪党を通り越した外道にや、なりたかねえんだよ。そして、正義のためならあたりまえだって、自分を正当化して下衆な事をするのも嫌だ。」

なあ、わかってくんねえか?」

「はーい……。」

「よし、いい子だ!」

俺はルナクローバーの頭を撫でてやった。

「きゃー!、これはひよつとすると?ひよつとすると!?そしていよいよ今晚には……。」

「ははは、次はその調子に乗るところ、どうにかしろや。」

さてフレンジーにランブル。お前らが知ってるデストロン軍団の秘密や機密にや、興

味が無いとは言わん。サウンドウェーブは、軍団内の醜聞とか皆の秘密とか、色々収集してるらしいからな。だがな……。」

「だが？」

きよとんとしたフレンジーとランブル。俺は悪そうに笑って言ってやった。

「だからと言って、手前らをどうこうしてまで、情報欲しいとは思わねえ。それよりかは、手前らは万一の際の人質交換用の、捕虜として確保しておこうってな。これからも長く戦いは続く。常に前回みたく勝利できるわけもねえ。いつかはデストロン軍団に捕虜取られる可能性も高いんだ。

だからそれまで、大人しく捕虜になつてな。」

「ふいー……。」

「おい、安心してんなランブル。あの顔見てみやがれ。」

「ああ、言い忘れたな。俺はお前らを捕虜虐待とかなんとかするつもりは全然ねえ。でもよ。そうやって『何故か』『かけらも酷い目に遭わされずに』『無事に帰って来た』部下をよ。メガトロンがどう思うかな？あの猜疑心の強い奴が。」

俺が言ったとたん、ランブルとフレンジーは顔を引き攣らせた。もし人間だったら、顔面蒼白になつてるに違いねえ。

「ち、ちくしょーーー!!」

「絶対、絶対に逃げ出してやるう〜!!」

「はっはっは。まあ安心しろよ。昔馴染みだ、捕虜生活はできるかぎり快適にしてやるからよ。コンバッティコン、武装や特にハンマーアームの回線は注意して切って、閉じ込めとけ。丁重にな。」

「『了解です、ボス!』」

さて、これでとりあえずデストロン軍団の諜報網は半壊したことになるな。ランブル、フレンジー、ラットバットの3人捕まえたからな。残るはコンドル、バズソー、ジャガーか。あと『2010』時代になると、カセットロンに破壊工作兵オーバーキルと情報伝達兵スラッグフェストが加わるんだが……。ま、今は居ねえからいいか。

だが、んな油断していると、結局逃げ出されたりするからな。しっかりと閉じ込めとかないと。けどほんとはラットバットよりも、コンドルとバズソー捕まえたかったな。あの2匹どうにかできれば、サウンドウェーブの諜報能力はガタ落ちになる。ランブルとフレンジーの、使い勝手がいい部下を奪えただけ、よかつたと思つとこうかね……。だけど、俺たちもカセットロンやカセットボットに相当する、諜報・防諜チームがそのうち必要だな。誰か在野に居ねえかな。

今現在、俺、スカイファイアー、コンバッティコンたちは、人工ブラックホール生成

装置と新しいブラックホール炉の設計に入っていた。俺たちが科学技術関係の仕事をしている間、サンダークラッカーが全体指揮を肩代わりしている。まあ、奴は基本的に戦士……と言うよりも兵士であって、そう言う仕事はあまり得意とは言えない。だから、何か問題があったら即座に俺を呼び出す様に言つてある。

ルナクローバー？あいつが俺の傍を離れると思うか？まあ、研究資料とかを出したりしまつたりとか、後は最近開発されたエネルギーゴンドリンクを用意してくれたりとかもしてるな。まあ頑張つてくれてるのは、確かだ。ちなみに他トランスフォーマー人 と俺のドリリンクは、トッピング含めて盛りの量が一目でわかるほど違う。……スカイファイアーとコンバッティコンたちの生暖かい視線が俺の硝子ガラスの心に痛い。

「人工ブラックホール生成装置は、こんなもんかね。必要量の物質……ケイ素系の小惑星かなんかでいいと思うが、人工重力装置でそれを重力崩壊させて暗黒縮退星ブラックホールにする。」
「理屈は簡単だが、実際に試作機造つて人工ブラックホールを生成してみない事には……。」

「メガトロンには、絶対に教えられんなあ。絶対に兵器転用を真つ先に考える。」

「今の所は大丈夫だと思つて。爺さんアルファートリンがコンボイと通信した内容を教えてくれたんだが、向こうでコンドルとバズソーに手を焼いてるらしい。つまりカセットロンは地球あちに居るつて事だからな。研究室の防諜も、十全だし。」

そんなわけで、メガトロンのちよっかい無しで研究を進める事ができた。矢面に立ってくれているコンボイには、足を向けて寝られん。まあ、メガトロンの事だから油断はできねえんだがな。

第一、俺はとんでもなくメガトロンに怨まれてるだろうと、そう思う。いや、怨み憎しみの深さで言えば、俺の方も負けていないんだが。しかし行動の身軽さと言う点では、圧政者であり大帝である奴の方が勝る。奴は思い付きで行動をできるが、こちらはそうはいかないんだ。

悔しいので、前回の勝利でデストロン軍団の兵力が撤退した領域を、あくまで以前から決めていた計画通りに『エンジン・アームズ・ヘブン技術屋の天国』領域へと組み込んで再開発を進めた。うん、あくまで予定通りだよ？俺はちよこつと指示出して、サンダークラッカーにあれこれアドバイスしてやってもらったただけだよ？あくまで予定が完璧にできてたから、事が簡単に進んだだけだよ？

うん、絶対にメガトロンの融合カノン砲と右拳を奪い返されたのが悔しいから、思い付きでやったわけじゃないからな？

前回の戦いで、俺がフォースチップをイグニッションできたので、サンダークラッカーにも可能ではないかと思いついた。思い至ったので、サンダークラッカーと一緒に

訓練してみる事にした。

「フォースチップ……イグニッション!! ヴァーテックス……キャノン!!……ブレイドオ
!!」

「うへ!?! こ、これで先日メガトロンをやっちまったのか!」

「やったと言うか、逃げられたがな。ぬん!!」

訓練標的の木偶^でを、ヴァーテックスキャノンで撃ち、ヴァーテックスブレイドで斬り裂く。相変わらず、凄い威力だ。と言うか、キャノン撃つんじゃないかな。木偶^でを吹き飛ばして訓練場の壁に穴が開いた。あとで管理者に謝って置かないと。

「うお……。凄え威力じゃねえか!」

「いや、これに近い事をお前も出来る可能性がある。」

ちよつと見るに、サンダークラッカーもチップスロットあるしな。

「ほんとか!?!」

「やって見る。とりあえず、そうだな……。メガトロンと、デバスターでも思い浮かべろ。」

「お、おお。」

「そして……。ここは戦場だ。お前の後ろには、^{おおけが}損傷を負って戦えなくなった皆が居る。頼りのブルーティカスは、離れた所でメナゾール相手に手が離せない。お前がメガトロ

ンとデバスターをどうにかしないと、皆が破壊しんじまうされる。」
「……………」

そして俺はサンダークラツカーに語り掛ける。

「生半可な攻撃じゃ、メガトロンとデバスターは倒せないぞ。力を、力を心の底から求めろ。そうすると……………!?!」

俺はその一瞬、サンダークラツカーの背後に、あるトランスフォーマーの姿を幻視した。いや、それは幻じゃない。そいつには実体こそ無いが……………。確かにそこに居た。まるで、『2010』での『スタースクリーム スタースクリーム ゴースト ゴースト』の様に、スパークだけの存在としてその場にいやがったんだ。

そしてサンダークラツカーが叫ぶ。

「フォースチツプ、イグニツション!」

奴の左腕ミサイルポッド後部にあるチツプスロットに、フォースチツプが……………。ベクタープライムが使ってたアレと同じ、宇宙や時空をイメージした様なフォースチツプが叩き込まれる。ミサイルポッドが展開し、その裏から大口徑ビームキャノンが姿を現す。

「サンダーヘル!!」

ビームキャノンから凄まじい威力のビームが放たれた。それは訓練標的の木偶でくを貫

いて……。訓練場の壁に、大穴を穿うがった。

「なんか……。なんかが、俺の頭データかいせんの中に接触かたりかけして来た……。それを引インつ張り込ストールんだら……。使い方が分かった。」

「……。」

「どうしたんだ、スタースクリーム。お前がやれと言ったんだろが。」

「あ、ああ。いや、な。あまりの威力に呆然としてた。」

「お前のキャノンの方が派手じゃねえかよ。」

「そうだな。ははは。」

「ははは。しかし、これで俺ももつと戦えるな。」

俺はとりあえず笑って誤魔化した。そうか、爺アルファートリンさんが俺たちのこのボディを造った

のは……。きつと、あの幽霊ゴーストトランスフォーマーが干渉してたに違いない。このG1世

界で、GF印の機体を造ったのは、そうでもないと考えづらい。

「……さて、とりあえず訓練場の管理人に、詫びて来ないとな。」

「お、おお。ちよこつとやり過ぎたもんな。」

「ちよこつとか？流石に修復予算とか、あと残業になつちまうだろうから個人報酬とかも、色つけてやらんとなあと思つてたんだが。」

あの幽霊ゴーストトランスフォーマーは、既に姿がどこにも無かった。俺とサンダークラッ

カーがイグニッションを会得し終わった以上、今後会う事があるかも分からない。だが、この宇宙とは位相を異にする空間か何処かで、『視て』やがるんだろな、アイツは。何処から何処までが、奴の干渉かは分からんけどな。

まったく、流石『あらゆる時空の監視役』だよ。ほんとにな。どこにでも居て、どこにも居ない。『2010』での『スタースクリーム俺』以上に幽霊ゴーストみたいな奴だよ。

「なあ、ベクタープライム……。」

「なんか言ったかあ？ スタースクリーム。」

「ああ言った。けど、それよりもまず訓練場管理人のそこ行って、詫びて来ないとな。行くぜサンダークラッカー。」

「おう。」

俺たちは連れ立って、訓練場の出口へと歩いて行った。

第13話：更なる新戦力と、古き知人と

「……戦力的に、もう1体ばかり合体闘士が欲しいなあ。」

「ですなあボス。我々がメナゾールを押さえている間に、デバスターに暴れられては困りますし。」

「けど、あとは諜報・防諜のための戦力も欲しいぜ。」

オンスロートと俺は、戦力補充について悩んでいた。正直今の所、いちばん欲しい戦力はやはり合体トランスフォーマーによる巨大戦士と、あとはカセットロンやカセットボットの様な諜報・防諜部隊なのだ。

だが今の所、合体トランスフォーマーはともかくとして、カセットロンやカセットボット系の技術はデストロンでもサイバトロンでも極秘事項であり、かつてデストロン No. 2であった俺ですら知らない。デストロンで知っているのは、メガトロンとサウンドウェーブのみだろうな。下手すると、メガトロンですら知らんかも。

「とりあえず防諜に関しては、普通の軍人タイプトランスフォーマーを増やして、警備を万全にする以外無いか……。だがなあ……。」

「それをやると、費用対効果の面からサウンドルが怒るのが目に見えてますなあ。」

「軍人と一般市民の比率を考えれば、富の再生産に寄与せず消費するだけの軍人は、あまり増やしたく無いのが本音なんだよなあ。少数で縦横無尽に諜報や防諜ができるカセットロンやカセットボット、羨ましいぜまったく。」

「でも、デストロンやサイバトロンからすれば、わたしたちを羨ましがっているといますよー?」

そう言つて、設計資料の山を俺たちの脇に置いたのは、最近では副官業務も随分と板についたルナクローバーだ。その言葉には、俺もオンスロートも領くしかない。

「ま、そらそうだな。」

「こっちは見た目、エネルギーには苦勞してませんからなあ。」

「そのエネルギーの大半が、新たなブラックホール炉とか反物質炉の建設に注ぎ込まれてるんだがな。」

「完成すれば、またその余裕分で領域を広げないと……。」

「実は自転車操業だなんて、思つてねえんだろな。」

そうなんだよなあ。領域を広げてそこに新規に造つた市民トランスフォーマー住まわせて、軍人トランスフォーマーや傭兵トランスフォーマーを配置して護る。その領域に供給するためのエネルギー源たる反物質炉を新設する。そしてまた、領域を拡張する。……自転車操業だ。

地球側のL4点にあるのと、L5点に最近造った奴の2つあるブラックホール炉をセイバートロン星の衛星軌道上に持ってこれれば、格段にエネルギー事情は良くなる。だがそれをするためには、デストロン軍団からセイバートロン星周辺の宇宙権を奪わなきゃならん。

今の段階でブラックホール炉をセイバートロン星の衛星軌道上に持って来れば、デストロンに奪われちまいかねないんだ。だから2つのブラックホール炉からは、ときどき俺自身が輸送隊を率いて、超空間ゲートでエネルギーキューブを持って来てるんだが……。

はつきり言つて、運びきれん。L4点のブラックホール炉には、もったいない事にエネルギーキューブが大量に死蔵されてる。L5点の方にも、徐々に貯まりつつある。あそこには当初はウーマン・サイバートロン連中を警備に置いてたが、今はNAILの軍人トランスフォーマーたちを警備に置いてる。

ちなみにウーマン・サイバートロン連中は、傭兵契約結んで傭兵部隊の指揮官級の扱いで雇ってる。本来あいつらはデストロン軍団へのレジスタンス活動してたんだがな。実入りがいいのと、NAILが本格的にメガトロン配下のデストロンと敵対した事、NAILの目的……セイバートロン星の再生と復興おまけつてのが公に発表された事で、こちらへの全面協力をエリータ・ワンが決めた。

地球のコンボイとも、関係は悪くは無い。ただしサイバトロン軍団全体とは、協力関係は結んでいない。結べていない、と言った方がいいか。理由はやはり『赤組』連中の反対だ。元デストロンの俺が率いている事、NAI Lに多数の元デストロンが居る事、NAI Lがはぐれデストロンを傭兵として雇用している事が、奴らが反発する理由だ。

先程のウーマン・サイバトロン連中も、No. 2的なクロミアや、インフェルノの彼女であるファイヤースターあたりの『赤い』奴らは、理性では理解しているから比較的協力的な姿勢でいるが、感情で納得できずにいるらしい。まあエリート・ワンに反発するほどじゃないが。

「やれやれ、前途多難だ。」

「ですなあ。さて、せめて新しい合体トランスフォーマーですが……。そうなると、こんなのでは如何いかかな。」

「どれ。……これは。」

正直驚いた。これ、プロテクトボット部隊じゃないかよ、サイバトロンの。

「本来は、俺たちコンバッティコンみたいな戦闘のできる科学者や技術者を……。と考えていたんですがね。ですが今いちばん必要なのは、警備任務にも適しているタイプの軍人です。」

あと、他に足りなさげなのはレスキュー要員ですからな。その能力も持たせて……。

所属は軍警察にして、『技術屋の天国』^{エンジンニアーズ・ヘブン}全体の治安の維持を受け持つサンダークラックカーさんの直下に就けたいと思います。」

「なるほど……。うん、俺も賛同しよう。」

そう言や、サイバトロンではプロテクトボットが開発されて無えんだよな。何故かと思つてたが、サイバトロン軍団には今現在オメガガスプリムとスペリオンって言う2体の巨大戦士が居る。デストロンから俺が離反した結果、デストロン軍団にはブルーティカスは居ねえ。デストロン軍団のデバスターとメナゾールを押さえるに足る戦力は、サイバトロン軍団は持つてるんだよな。

しかしなんだな。本来の歴史ではライバルと言うか殺し合い関係だったブルーティカスとガーディアンなんだが、コンバッティコンからプロテクトボット……。いや、プロテクティコンの開発案が出るとはなあ。歴史の皮肉と言うか、なんとと言うか。……。良い仲間になってくれるといいな。

そしてここは、セイバートロン星最深部はベクターシグマの部屋だ。プロテクティコンたちに生命を吹き込んだ後、爺さん^{アルファートリン}はベクターシグマの複製鍵^{コピー・キー}を回収している。俺は爺さん^{アルファートリン}に礼を言おうと、プロテクティコンたちに向かい、声を掛けた。

「ようこそ、新たな同志たち！『A NON—ALIGNED INDIGENOUS

「L I F E F O R M」……我らN A I Lの元へ！俺はN A I Lのリーダーを務めている、スタースクリームだ。

俺たちの組織N A I Lは、俺たちトランスフォーマーがかつて起こした過ち……。デストロン軍団とサイバトロン軍団に分かれて大戦争を引き起こし、母なる星セイバートを荒廃させ瀕死にしまった事から、この惑星を救う事を目的としている。

そう、俺たちN A I Lの目的はセイバートロン星の再生と復興なんだ。過去デストロン軍団のN o . 2として暴虐の限りを尽くし、この星を傷つけた俺が言うのは烏滸がましいかも知れないが……。俺はその罪を背負った上で、なんとしてもこの惑星を再生させたいと願っている。どうか俺たちに、諸君らプロテクティオン部隊の力を貸してくれ。」

俺は真摯に語る。ホットスポットは頷いて、敬礼を送って来た。

「……了解です。我らを造っていただいた恩義と、我らを創ってくださったベクターシグマが護るこの惑星のために。わたしはホットスポット、防衛主任です。同時に消防関係の能力も持っております。」

「頼むぞ、ホットスポット。ああ、それとそんなに固く無くていいぞ？」

「いえ、自分は逆に柔らかい対応の方が、苦手の様です……。申し訳ありません。」

「ああ、そんならいいんだ……。気にすんな。」

俺は更に語り掛ける。

「お前をこの5人のリーダーに任命する。そして組織N.O. 3のサンダークラッカーが、お前たちの直接の上官だ。こっちはその更に上官で、俺のN.O. 2のスカイファイアー。こいつは俺の副官の……。」

「ルナクローバー、よろしく♪スタースクリーム様を、きっちり護つてよね！」

「サンダークラッカーだ、よろしく頼む。」

「スカイファイアーだよ。これからよろしく。」

「はっ！」

やっぱり固い対応だな。けれど、トランスフォーマー人 には向き不向きあるからな。ホットスポット

トの次に敬礼してきたのは、背中にプロペラ背負った赤と白の奴だ。

「自分は航空救急探索員、グレイズです。高空よりの状況把握と、飛行による救急搬送を行います。仲間の応急処置や、戦闘能力もそこそこに。」

「頼もしいぜ。頼んだぞ。」

「がんばってねー♪」

「うん。これは助かるね。」

「よろしくな。頑張ってくれ。」

次に歩み出たのは、白っぽいと言うかライトグレーと言うか微妙な体色の、隙が無さ

そんな奴だった。

「自分はストリートワイズ、軍警捜査員です。犯罪捜査や間諜摘発は、お手の物です。」
「助かる。サイバトロン軍団とはそこまで関係は悪くないが、デストロン軍団とは完全に敵対しているんだ。あちらのスパイは正直怖い。」

「あんたの仕事は、重要よ？」

「君はたぶん、軍警の配備状況が整うまでは妙に忙しくなると思う。すまないね。」
「助かる。頼りにさせてもらおう。」

その次は白いボディだが若干華奢で、代わりに機敏そうな奴だ。だが華奢だからと言つて敵が油断すれば、手痛い一撃を食らわせそうな奴だった。

「自分は軍警偵察調査員、グループです。ストリートワイズと仕事が被りますが、犯罪の捜査や摘発が主任務ですね。軽量高機動なので、追跡任務とかは任せてください。」

「なるほど、心強いぜ。ストリートワイズ共々、頼んだぜ？」
「なかなかやりそうね。」

「うむ、頼もしいよ。警察力は、若干不安を抱いていた要素なんだ。」
「お前さんも、頼みにさせてもらおうぞ。」

最後の一人は、赤と白の体色で、しかしグレイズよりかはがっしりした体躯の持ち主だった。

「じ、自分は軍医のファーストエイドです。戦闘能力は無いとはいいませんが、そこまで強くは無いです。ですが医療技術しゆりに関しては自信があります。」

「ああ、大いに期待させてもらうぜ？ 実際俺やスカイファイアー、お前らの先輩であるコンバッティコンは科学者技術者だからなあ。専門でも無えのに、怪我人連中フチこわれの治療リベアに駆り出されてたんだ。」

「スタースクリーム様が怪我したら、何をおいても診るのよ！ いいわね！」

「ははは。だけど専門の医療技術者しゆりは、本当に助かるね。」

「そうだなあ。ほんとに待ち望んでた人材だな。」

この面々が自陣営に加わってくれて、本当に助かる。ただ、この世界においては別に引き抜いたわけでは無いが、コンボイに少し済まん気もするな。ま、あつちは防諜とかにはブロードキャスト以下のカセットボットが居るし。医者にはラチェットとか、そうでなくても科学者技術者にパーセプターやホイルジャック居るからな。

……怪我したときにホイルジャックに身体を診せる気には、全然ならんが。

プロテクティコンを、コンバッティコンに紹介した。出会った当初は、フランクなコンバッティコンとガツガツなプロテクティコンで、双方戸惑った様だ。しかし時間が経つにつれ、双方ともいい奴らなので仲間意識が芽生えた様だった。有難い話だよな。

けど、コンバッティコンが先輩、プロテクティコンが後輩つてのは、良かったのかも知れん。逆だったら、ガチガチの先輩に対し、ある意味無礼とも言える態度を取る後輩。……流星に上手くはいかんだろ。

「んじや、新たな仲間の歓迎パーティーを開くとするか！」

「いいですなあ、こうやって親睦を囿ると言うのも。そこまで費用がかからず、数値に現れにくい効果が高いと言うのもいい。地球人の習慣も、捨てた物ではありませんな！」

スインドルがご機嫌だ。無論、他のコンバッティコンも楽し気である。一方の、生れたばかりであるプロテクティコンたちは少々戸惑っているが、決して不快そうではない。そして全員に、最新のフレイバー付きエネルギーゴンキープとフレイバー付きエネルギーゴンドリンクが配られた。そして俺の音頭で乾杯する。

「では皆！新たな同志の誕生と加入を祝って、乾杯！」

「『『乾杯!!』』』」

うん、美味い。宴会つてのは、かつて人間だった『スタースクリーム』の半分からすると苦手な方だったんだが、トランスフォーマーだった『俺』の半分からすれば、メガトロントちと良くやってたもんだ。もつとも、こんな風に洒落た宴席じゃなかったがな。岩やコンテナに座って、皆でエネルギー略奪して造ったエネルギーゴンをガブ飲みするだけ。

まあだから、スインドルが言つてた『地球人の習慣』つてのも半分当たつて、半分外れてる。トランスフォーマーにも、宴会の習慣はある事はあるんだ。……どう見ても、野盗の集団の宴会だつてのは言いつこなし。

そう言えば、『2010』では小洒落た飲食店こじやれで、デストロン軍団を出奔したオクトー
ンと、それを保護したサイバトロ軍団のサンドストームが、エネルギーキューブ食
ながらカワイコちゃんの女性トランスフォーマーの立体映像観てたつけな。NAIL
では、既にあのレベルかソレを超えるエネルギー調理技術が発展、開発されているんだ
よなあ……。

ん？ ホットスポットが何か言いたげな様子？

「ホットスポット、どうした？」

「はっ。いえ……。自分たちのために、この様な素晴らしい宴席まで設けていただきま
して、まことに……。」

「ああ、うん。そう言つてもらえると嬉しい。実を言うとな。コンバッティコンの時に
は俺たちも余裕まつたく無くてなあ。宴会を開いてやれなかつたんだ。コンバッティ
コン連中が、だからこその後輩のためには何かしてやりたい、つて言つてな。」

「なんと!!」

ネタばらしをされたオンスロート、ボルター、ブレストオフ、ブラウル、スインドル

は照れ臭そうに明後日の方向を向いている。ホットスポット以下プロテクティコンの面々は、感動のあまり何も言えないでいる様子だった。

ちなみにまったく関係ないのだが、ルナクローバーが自分の皿のエネルギーキューブをスプーンで俺に差し出して来るのは何とかならないだろうか。いや、好かれているのはまあ悪い気はしない。だがまだ恋人になった訳でも無い。さらに言えば、部下やスカイファイアー、サンダークワッカーの前なのだ。そんな事やらされたら、恥ずかしくて憤死と言うか悶死してしまう。

そんなこんなで数日が経過し、プロテクティコンたちは張り切って働いている。昨日なんか、ストリートワイズとグループが潜入しようとしたコンドルを発見、コンドルは這う這うの体で逃げて行った。しかしコンドルの潜入しようとした場所は、やはり研究所だったんだよなあ。刑務所や拘置所みたいな場所は、調べるところか立ち寄ろうともしていない。

やつぱりメガトロンは、捕まった部下には興味が無いのか。フレンジー、ランブル、ラットバットの3人も可哀想にな。マジな話、憐れとしか言いようが無い。あいつらメガトロンの融合カノン砲や右腕取り返しに来て、捕まったんだろ？それをなあ……。

そんな中、傭兵部隊のはぐれデストロン、ラナマックとラナバウトが会見を求めて来

た。こいつら、『2010』で、はぐれじやない正規のデストロン兵士として、ちよこつと出て来るんだつたつ。腕前は充分なんだが、他のデストロンと同様に人格面で問題あるんだよなあ……。ぶっちゃけた話、前線で戦わせる以外の仕事に就けらんねえ。

ちなみにこいつら、3人目の人^{トランスフォーマー}物、ボロ布を身体に巻き付けて正体わからん奴を連れて来ている。センサーで、武器は持つて来てない事はわかつてる。しかしトランスフォーマーは、^{トランスフォーマー}変形して武器その物になる事もできるからな。注意は怠れねえな。

「ラナマック、ラナバウト、今日はどうした？何か陳情か？」

「おう、スタースクリームさん。今日はちよこつと頼まれごとでな。こいつが、あんたに紹介して欲しいってんだよ。」

「つうか、昔には顔見知りだったって話なんだが……。でもあんた、出世しちまったからなあ。紹介なしじゃ会えねえだろって事で。」

「そいつはご苦労だったな。」

「んじや、俺たちやこれで。」

ラナマックとラナバウトは、そのまま部隊に帰ろうとする。俺はそれを呼び止めた。

「あ、ちよつと待てよ。せつかくだ、部隊に土産を持つてけ。ルナクローバー、手配頼む。」

「はい。エネルギーゴンドリンク入りの、ジェリ缶10個でいいですか？」

「それでいい。隣室に、コンバッティコンのスインドル居るから、そこで受け取っていいか、お前らだけで飲むんじやねえぞ？ 傭兵部隊の連中と皆で飲むんだぞ？」

「おお！ わかってらい！」

「こいつぁ有難えや！」

2人は大喜びで帰って行く。そして俺は3人目に声を掛けた。

「さて、お前さん顔を見せてくれるか？ 話によると、俺の知ってる奴なんだろう？」

「はっ。……お久しいですな、スタースクリーム殿。拙者でござるよ。此度のご出世、お慶びよろこび申し上げよこさせよう。その新しい身体ホデーも、お似合いでござるな。」

「お前は！ シックスショット！」

そう、こいつの名はシックスショット……。デストロン軍団の忍者参謀だった。ちなみに登場は、『ザ☆ヘッドマスターズ』のはずなんだが……。まあ、今現在居たっておかしトランスフォーマーく無い人。物だあな。こいつも何百万歳なんだろうし。

と言うか、元デストロン軍団N.O. 2たる『俺』の記憶によれば、コイツはかつて400万年前にデストロン軍団で、メガトロンに仕えていたはずなんだ。シックスチェンジヤーばかりが集まったトランスフォーマーの部族、『シックス一族』から派遣されて来て。メガトロンの近くじゃなく、遠隔地で動き回る、文字通り忍者的働きしてて。

そしてこいつは、俺の前にひざまず跪く。はてさて、一体何を言い出すやら、だな。

第14話：電腦ダイブ、ただし俺じゃない

「ここは『技術屋の天国』^{エンジニアーズ・ヘブン} 中央研究所、つまりNAILの政庁と基地と研究所を兼ねた建物の、俺の執務室だ。そしてこの部屋に今、俺たちNAILの中心人物である俺、スカイファイアー、サンダークラッカー、俺の副官ルナクローバー、全員が来るのはちよつと部屋が狭いのでコンバツテイコンとプロテクテイコンの長であるオンスロートとホットスポットが来ている。そしてもう1人……。

言うまでも無い、シックスショットだ。俺は彼に向けて、言葉を掛ける。

「シックスショット。済まないがもう一回、この面々にお前が言った事を繰り返して語ってくれるか？」

「了解でござる。では……。拙者シックスショットは、デストロン軍団と手を切つてNAILに参加したく、まかり越しました。」

俺とシックスショット、そして先ほど現場に居たルナクローバーを除く一同が、驚きの声を上げる。なおシックスショットの身体には、デストロンのエンブレムは既に無い。

「皆様方が拙者をお疑いであろう事は重々承知の上。その疑いは、今後の働きで晴らし

てごらんに入れる所存でござる。どうか拙者に働き場所をください。」

「それよりも、皆にお前がNAILこっちに来ようと思つたわけを説明しろよ。俺たちはもう聞いたけどな。」

「は。では……。」

そしてシックスショットが語つたのは、次のような事だった。

シックスショットは400万年の長きに渡り、サイバトロン軍団の後方を攪乱かくらんおよび破壊工作の、単独任務に就いていた。しかしメガトロンからの繋ぎはぶつとりと切れ、しばし後にメガトロンが行方不明になってセイバートロン星のデストロン領域はレーザールーエーブが愚直に守っていると言う事情を知つた。

それでもシックスショットは、メガトロンとの約束に有つたエネルギーの補給とかが無くとも、忠実に任務を果たし続けた。そして数年前……もう数年も過ぎたのか。その数年前に、メガトロンとデストロン軍団本隊が復活を遂げたと言う報を聞き付け、地球へとはせ参じたのだ。

そして、見たのだ。あの場面を。俺の絶叫を。

『……ああ、ナイトバードは強いさ。地球の人間が造つたとは思えない高性能だ。けれどな。喋れもしねえ！自由意志もねえ！何よりもただ命令の内容を考えもせず愚直に従うだけの脳足りんに！自らのスパークたましいさえも持つていない、ただの機械に!!』

副官はおろかNo.2の座を奪われ！引退に追い込まれる！こんな屈辱が！許せるか！赦せるか！そんなわきや無え！冗談じゃ、冗談じゃねえんだよオ!!」

あの俺の叫びを、当初はまた『俺』の『いつもの反乱劇』かと思つたらしい。だがそれにしても内容はがちとおかしい上に、言葉に籠つた気迫と悲痛さ。それを感じたコイツは、隠れたまま様子を窺つていた。そして俺が本当にデストロン軍団と決別したのを目にしたのだ。

そしてその後しばらく身を隠し、シックスショットはデストロンの内情を調査していた。そして『俺が心を入れ替え』て、部下を庇つたり、メガトロンを恐れず諫言かんげんをしたり、誠心誠意の忠節を尽くしていた事を知つたのだ。

だがそれでも当初は、他のデストロン兵士同様に、俺の変化を信じきれなかつたと言ふ。だからその後の俺の活動を、デストロン軍団には極秘で調べ続けたらしい。そして俺が本気で、セイバートロン星を再生し復興させようとしている事、更には部下や市民からの厚い支持を受けている事を理解する。

一方でデストロン軍団においてだ。メガトロンは、サンダークラッカーがあくまで軍団のためを思い、俺をデストロン軍団に呼び戻そうと画策した事で、彼への疑いを抱いた。そしてあることかサンダークラッカーを洗脳してしまふと言う暴挙に出た。その上でサンダークラッカーを処刑するとの報せしらせをバラ撒き、俺を始末しようとした。だ

がその計略は、サンダークラッカーの覚醒、俺の仲間たちとコンボイの介入で見事に失敗する。

これでシックスショットの背後にある『シックス一族』は、このままメガトロンに協力していいのか疑念を持った。『シックス一族』は、メガトロンの性格は熟知していたつもりだが、宇宙を支配するのはおそらくデストロンであろうとの予測から、その配下にシックスショットを送り込む事で将来の政権内部に自分たちの立ち位置を確立しようとしていたのだ。メガトロンの懐の深さから、諫言や忠告できる立場の高官に自分の縁者を送り込んでおければ……そう考えていたのだそうだ。

しかしメガトロンはセイバートロン星を戦争で荒廃させただけでなく、サイバトロンの宇宙船『アーク』への攻撃の中途半端な成功……事実上の失敗により、400万年の時を無駄にした。更には部下の諫言や忠告を嫌う性格も、明らかに変わった。そして現状の、NAIILの躍進やくしんによりセイバートロン星の領土を徐々に削られていく様さま……。

ここに至り、『シックス一族』はNAIILにも一族の者を送り込もうと考えた。しかしシックスショットは、ここは賭け時だと一族を強引に説得する。デストロン軍団と手を切るべきである、と。NAIILには己おのれみずか自らみづかが赴く、と。

「……出向くのが遅くなったのは、一族の説得に時が必要だったため。なれど、もし一族を説き伏せること叶わなかった場合は、拙者の一存でNAIILに鞍替えするつもりでこ

ざった。『今の』スタースクリーム殿には、その価値がござれば。」

「くすぐつたいな。NAIL^れは俺の力だけじゃねえよ。スカイファイアー、サンダークラッカー、コンバッティコン、ルナクローバー、プロテクティコン、数多の一般軍人や一般市民たち。皆が皆、セイバートロン星を再生し、復興させようと頑張ってる。

おっと、サイバートロン傭兵やデストロン傭兵、それに協力者たる爺さん^{アルファートリン}以下多数も忘れちゃいかん。俺の力が無い、とは言わん。だけど、それだけじゃあ決して無い。」

シックスショットは感慨深げに言う。

「……やはり、変わられましたな。以前の貴方であれば、絶対に口にしない事でもござった。」

「俺たちや、超ロボット『生命体』だぜ？ただのロボットたあ違う。成長できるんだ。ま、ちよつと変わったただけでそこまで感動されるんだ。前の『俺^{スタースクリーム}』が、どんなに酷かったかって事だな。」

「うーん、前のスタースクリーム様も素敵でしたよ?」

「よせやい。俺は調子に乗りやすいんだ、ルナクローバー。」

そして居住まいを正すと、シックスショットは改めて頭を下げる。

「拙者は疑われても仕方の無い立場。しかも『シックス一族』の紐付きである事も明かしました故、お疑いは猶更濃^{なおよこ}くなったかと。なれど拙者、NAILにて働き場所を得られ

ましたならば誠心誠意、NAILに……スタースクリーム殿にお仕えする所存。なにとぞ、お聞き届けいただきたく。」

「……皆の意見を訊きたい。俺の気持ちは一応決まっているが、それを覆す説得力のある意見があれば、そうするつもりだ。」

俺の言葉に、まずスカイファイアーが口を開く。

「わたしは迎え入れるべきだと思う。彼の覚悟は本物だと見た。まあ、あくまで情の面から見た言葉だけだね。」

サンダークラッカーも賛同する。

「俺も賛成だ。今、諜報や防諜関係が俺たちの最大の弱点になってやがるんだ。ストリートワイズやグループの参入で、多少は楽になったがな。万一裏切られたら、大事おわごとになる前に俺が始末してやるよ。」

オンスロートとホットスポットも言う。

「今現在のNAILの体力ならば、裏切りがあつたところで持ちこたえられるでしょう。痛い痛いですがね。それよか彼を放逐して、せっかくこつちを向いてる『シックス一族』の秋波しゅうはが途切れる方が痛いですなあ。」

「メリット、デメリットで言えば受け入れる方が若干得策かと存じます、リーダー。見張りは正直、最初のうちは付けたい気もいたしますが、忍者参謀などと言う実力者に付け

られる凄腕は残念ながら。であるからには、毒食らわば皿までとの気持ちで。」

最後にルナクローバー。

「裏切りそうだったら、その前に殺^やつちやえばいいのよね♪」

「物騒だな。まあ、そんなわけだ。『全員一致で』お前を受け入れる、シックスショット。これからは諜報主任の地位に就いてもらいてえ。忍者つてえ言葉に思い入れがあるなら、そつちでもいいが。」

「ははっ！必ずや皆様の信任を得られる様、尽力いたしますれば！」

感極まった様子^のシックスショットは、俯^{うつむ}いて肩を震わせる。そして、ふと顔を上げた。

「そう言えば、土産^{みやげ}話にしては少々物騒なのですが、1つデストロン関係の情報があつたのでした。実は……。」

その話を聞いた俺は、少々の間だけ悩んだ。だがその情報を手に入れた以上、死蔵して置くのは百害あつて一利なしだった。

俺は先日なんとか開通できたホットラインを通じ、地球のサイバトロン基地にいるコンボイを呼びだした。ホットラインとは言っても、サイバトロン基地のコンピュータ、テレトロン1に繋がるので、他のサイバトロンたちにも聞こえるんだが。

「こちらNAIリーダー、スタースクリーム。サイバトロン総司令官コンボイ、応答されたし。」

『こちらコンボイ。スタースクリームか。』

『けっ、一体何の用だ！ さっさと伝えて切っちゃまえ。』

『やめないか、アイアンハイド。』

まったく……。いや、奴からすればそうなんだろうな。気にせんで置こう。

「こちらで、デストロンの機密情報入手した。俺たちNAIには直接関係が無いが、隠して置いたらお前らとの信頼関係に傷を付けるんでな。」

『貴様との間に信頼関係だ？』

『やめないか、クリフ！ スタースクリームは、もうデストロンじゃないんだ！』

『は、はい、司令官……。』

「いや、気持ちは理解するさ。俺でも立場が逆なら、信用も信頼もできんだろう。」

あ、クリフの野郎そっぽ向きやがった。

「それより、お前らにとつちや緊急事態だ。ただ、あくまで未確認情報だったのは念頭に置いて置け。緊急事態だからこそ、内容の真贋を気にせずに伝えるんだ。真贋を確かめるのは、そつちでやりやがれ。」

ブロードキャストの部下のカセットボット、フリップサイズつてのが居るか？」

『~~~~~!!~~~~~』

「いいか!間違ってるんなら、間違ってたでいい!俺がデストロンの偽情報を掴まされたっただけの話だからな!だが本当だった時の事がヤバいんだよ!俺たちじゃねえ!お前らがだ!!」

それと勘違いすんなよ!今現在のフリップサイズにや、何の責任もねえんだ!そいつは、真正正銘の歴としたサイバトロンだ!けどな、時限プログラムが発動したら、フリップサイズは死ぬんだ!殺されるんだよ!そしてデストロンのフリップサイズが出現するんだ!」

そこで突然、ブロードキャストの胸板が開き、1体のカセットボットが飛び出す。どうやらそいつが、フリップサイズらしい。

『ふ、フリップサイズ……。』

『ブロードキャスト、わたしを庇^{かば}ってくれるお気持ちは嬉しいです。ですがもし万一、スタースクリームの言葉が本当だったらば。わたしは死んで、この身体^{ボデイ}をデストロンのフリップサイズが使う事になってしまいます。

そんなのは、許せません。絶対に……。』

「……そつちにやパーセプター、ホイルジャック、ラチエットの3頭脳があんだろうが。診てもらっただけ、診てもらえよ。それで間違いだしたら、好きだけ俺の無能ぶりを罵

倒しやがれ。そいつらにかかりや、大した手間でも無えだろ？

だけど、調べるのは本当に注意深くやれよ？時限プログラムが、何をトリガーにして発動するかは分かんねえんだからな。調べた事が切っ掛けで、時限プログラムが発動したり、なんてのは良くあるパターンだ。」

そしてコンボイは言った。

『……パーセプター！ホイルジャック！ラチエット！彼女の頭脳回路ブレインサーキットを調べるんだ！ただし慎重にな。わたしは万が一にも、こんな事で部下を喪いたくは無いんだ。』

『了解です、司令官。』

『お任せを、司令官。』

『了解です。さ、こっちに來てくれフリップサイズ。』

『スタースクリーン、とりあえず今はこれで……。結果が分かったら、こちらから再度通信する。』

そしてコンボイとのホットラインは切れた。

翌日、コンボイからの呼び出しがあった。

『スタースクリーン……。わたしはお前に、礼を言わなければならない。』

「……つてえ事は。」

『ああ。フリップサイズの頭脳回路には、圧縮された人格データと時限解凍プログラムが仕込んであった。』

「結果は？」

コンボイは、頷いて言う。

『フリップサイズは無事だ。時限プログラムと、デストロン人格データの切り離しには成功した。パーセプターとホイルジャックが完成させた、電腦ダイブ装置によって、ブロードキャスト他数名のサイバトロンの戦士が彼女の頭脳内部にダイブした。そして強固なプロテクトや時限プログラム本体、それに危うく活動を開始した邪悪なデストロン人格データと戦って、彼女を護り通したんだ。』

「……良かったじゃねえか。」

なんつーか、G1トランスフォーマー的な展開だな。すつげえサイエンス・ファンタジーS F チック。そしてコンボイの礼の言葉が続いた。

『知らせてくれて、本当にありがとう。感謝する。』

『だ、だがな！これで俺たちがお前を認めると思うなよ！お前が過去、幾多のサイバトロンの戦士を倒したのは間違いないんだ！』

……アイアンハイド。頼むわ、せつかくいい感じに終わりそうだったのに。

「……ま、アイアンハイドの言う通りだ。だから気にすんなコンボイ。俺はサイバトロ

ンを救ったんじゃない、憎いメガトロンの計略を叩き潰した、ただそれだけなんだからな。」

『そう言う事にしておこう。とりあえず、この一件は借りにしておくぞ。』

『だけどお前さんの言葉、ちよつとばかり間違つておつたね。』

ホイルジャック？なんの事だ？

『お前さんはわしらなら大した手間じゃないだろうと言つておつたがね。』

『いや、連絡をもらった直後から始めて、今の今までかかったんだよ。丸一日もね。』

パーセプターが陽気に笑いつつ言った。やれやれ。

「んじやあ切るぞ。」

『さつさと切つちまえ！』

『あ、おい……。』

チャージャーの言葉通りに、俺はホットラインを切った。まあ、マイスターとパワーグライド、そしてブロードキャストが、後ろで目立たない様に手を振っていたのが、少しほつとしたな。

さてと、シックスショットの初手柄だな、コレは。信賞必罰、きちんと褒めて、褒賞として何かやらんとな。勲章なんぞは欲しいとも思わんだろうし、難しいなあ。一定期間エネルギーの供給量の追加でいいかな？

第15話：侵攻！侵攻！

西暦2001年になった。21世紀だ。俺は内心で少々焦っている。それは出来る限り、表には出しちゃいけないがな。

「スタースクリーム……。焦る気持ちは分かるよ。けれど君が言っていたユニクロン襲来の2005年までは、まだ数年ある。」

「さすがにお前にゃ、わかっちゃまうか……。」

スカイファイアーには、俺の秘密を全部話してある。俺のスパークに、並行異世界の地球人の魂が融合している事も、そのため両者の精神が混じり合って今の俺になっている事も。そしてその人間の記憶に、この世界におけるトランスフォーマーたちの活躍、今後の歴史が、アニメの知識として存在する事もだ。

無論、これまで前提条件を他ならぬ俺自身が大きく変えたため、バタフライ効果も含めて周辺環境は完全に崩壊と言って良いほど変わっている。ただおそらく、ユニクロンの襲来はそんなに時間がずれないのではないかとも思っているんだがな。あれは、存在がでかすぎる。生半可な事では影響されんのじゃないかな。

だからそれまでに、セイバートロン星を平定し……いや、せめて制宙権だけでもデス

トロン軍団から奪って、衛星軌道上に最低6基、可能であれば24基のブラックホール炉衛星を建造する。そして対惑星クラスの敵を想定した巨大兵器を……。

比較的容易に準備出来そうなのは、宇宙空間に加速器を並べて浮かべた、超々巨大マストライバー砲か?しかしそれだと、こちらに向かつて来るユニクロンに対し、惑星を喰らう口部分方向から命中させたりしたら、そのまんま砲弾食われちまいそうだな。

ユニクロンが唯一恐れるのは、サイバトロンのマトリクスだって話だが……。サイバトロンの連中にばかり頼るのはいけない。いや、それ以前にだ。なんらかの奇跡によって助かる事までは否定しねえよ?だけど最初から奇跡や幸運に頼ってちやいかなだろうに。

サイバトロンのマトリクスは、ありや不安定だ。たぶんまず間違はなくコンボイならその力を解放できるだろうさ。『2010』の最終回でも使ってたしな。けれど、ウルトラマグナスでは使えなかった。『MOVIE』の最終局面では、ほんと偶然に幸運にもホットロディマス……ロディマスコンボイの手に渡ったが、そんなの期待してどうするよ。

人事を尽くして天命を待った結果、奇跡によって救われるならば文句は無えよ?でも最初からウルトラマンの助けを待って、怪獣が暴れるときに情けなく「ウルトラマン、何をしてるんだウルトラオン!」って泣き叫びたくは無え。イ○隊員だってちゃんと立

ち直って、用意してた新兵器で戦ったじゃ無えかよ。そう、ちゃんと新兵器用意してたんだ。

それはともかく、俺はスカイファイアーに応える。

「そうだな。焦ったって仕方無え。まずは、やれる事やらんとな。」

「今は今現在攻撃している、デストロンの領域エリヤを切り崩さなきゃね。」

「違いな。」

「そうして、その次の段階まで上手く行けば……。セイバートロン星の制空権と制宙権は、かなり取り易くなるよ。」

今、俺たちNAIILはデストロン軍団の領地のうち、重要部分を攻略中だ。ただし、俺、サンダークラッカー、コンバツティコン、プロテクティコン、シックスショットと言った決戦戦力無しで。理由は幾つかある。

まず1つ目だが、いつもいつも俺たちに頼った戦いばかりしてたら、NAIIL防衛軍……防衛軍って割には攻撃もしてるが、それが何時まで経っても成長できねえって事がある。自信も持てねえだろう。今回はNAIIL防衛軍あが、それを乗り越えるべきタリソフポイント 分水嶺ぶんすいれいなんだ。

もちろんの事だが、俺たち決戦戦力は万々に備え、何時でも投入可能な状態で待機してはいる。いざと言う時は、俺の超空間ゲートで一気に運ぶ予定なんだ。だけどそれを

やれば、たとえ戦術的には勝利できても、隠された戦略目標が達成されないために、敗北とまでは言わないが痛み分けに等しい勝利になるだろう。

そして2つ目の理由。俺たち決戦戦力は、可能な限り温存したいのだ。俺たちを温存したまま今回の勝利が成ったならば……。今回勝利できれば、セイバートロン星のデストロン本部基地への攻略が可能となるのだ。この戦いで目的の領域を切り取る事ができたならば、レーザーウェーブの守るデストロン本部基地への橋頭保になるのだ。

それ故、俺たちを温存したまま勝利できたならば時を置かず、俺たち決戦戦力のみでデストロン本部基地を攻略する。単に攻撃するだけならば、橋頭保を得ずとも超空間ゲートによる奇襲が可能なんだが……。それだと、その後の維持ができねえからな。やはりきちんと順序を踏んで、攻め落とさねえとな。

幸いな事に、地球ではメガトロン率いるデストロン軍団本隊と、サイバートロン軍団とが全力衝突している事が確認されている。デバスターもメナゾールも、セイバートロン星へやって来る事は出来ないんだ。勿論メガトロンも、地球へ釘付けだ。まあ、自分で企てたエネルギー収奪の計画が、サイバートロンのカセットボットによりバレてしまった結果なんだがな。

メガトロンを待ち伏せして戦いを挑むと、コンボイがホットラインで教えてくれたんだ。ならば時を同じくしてこちらも一大攻勢に出る、と話を付けたんだ。

「……自分で陣頭指揮を取れねえってのは、きつい物があるな。」

「わかるよ。」

「スタースクリーム様！ついでにスカイファイアーさん。ドリンク持つてきました。」

「ははは、ありがとう。」

「おい。俺の親友でNAIILのNo. 2をついで扱いか、ルナクローバー。」

「てへぺろ。」

相変わらず、エネルギーゴンドリンクの盛りもトッピングも、明らかに量が違う。困った奴だ。

と、その時だ。

『こちらNAIIL防衛軍指揮官ツインサーチ！報告いたします！レーザーウエーブの防衛ドローン部隊を壊滅させました！指揮をしていた防衛参謀レーザーウエーブと、ジェットロン航空兵サンストーム、アシッドストーム、ホットリンク、ビットストリームは逃げて行きます!!こちらの損害は、重軽傷者が10名ちよつと居ますが命に別状はありません!』

「よくやった！だが命に別状ないとは言え、そいつらはすぐに後送して治療リペアさせるんだ！それと追撃はするんじゃないぞ！当初の作戦予定通り、こっちの斬り込み隊がデストロン本部基地に攻撃をかける！」

『了解!』

俺はスカイファイアーとルナクローバーに、号令を掛けた。

「よし、んじやあ待機室へ走るぞ!サンダークラッカー、コンバツテイコン、プロテクテイコン、シックスショットと合流して、一気にデストロン軍団本部基地を陥おとす!!」

「了解、行こうか!」

「任せてよね!スタースクリーム様!」

そして俺たちは、皆が待っている待機室に走った。

「スタースクリーム、裏切り者め!」

単眼を光らせて、レーザークラウエーブが叫ぶ。こいつは武装の回路を切られて、レーザークラウエーブの形も封じられ、特殊合金製のワイヤーロープで縛られて俺の前に引き出されているのだ。こいつを捕らえられたのは、ある意味で最高の成果、ある意味で理の当然なんだよな。

こいつ防衛参謀の名に相応しく、最後まで抵抗したんだ。逃げるなら逃がしてやって良かったんだが、先の戦場からは逃げてでもセイバートロン星デストロン軍団本部基地からは、一歩たりとて逃げなかった。ジェットロン航空兵のサンストーム、アシッドストーム、ホットリンク、ビットストリームは飛んで逃げたのに。まあシックスショット

が6分身の6段変形でサンストーム以外は撃ち落として、重傷負わせて捕らえたけどな。

あ、スカイファイアーが怒った。

「スタースクリームがデストロン軍団を裏切ったんじゃないよ。デストロン軍団がスタースクリームを切り捨てたんだ。そして今の彼はNAIILを背負っている。NAIILを護るため、攻め寄せて来るメガトロン配下のデストロン軍団を叩くのは当然じゃないか。」

「何を言うか！メガトロン様の宇宙支配による、完全なる社会体制の実現！その理想を実現するためならば、貴様らも伏してメガトロン様を崇め奉り、エネルギーや労働力を差し出して当然！増してや貴様らはセイバートロン星の再生、復興を叫んでいるではないか！メガトロン様はセイバートロン星のために、エネルギーを送って下さっているのだぞ！」

「地球の無辜^{むこ}の民人から、エネルギーを奪ってね。我々のやり方なら、そんな必要は無い。メガトロン様の様なコソ泥の真似事はご免だよ。」

「な、メガトロン様をコソ泥だと!?地球の人間など、ゴミムシも同然では無いか!その様な者たちがメガトロン様の御為^{おんため}にエネルギーを差し出すのは、理の当然では無いか!それを言うに事欠いて、コソ泥だとお!」

「……ふう。やめとけスカイファイアー。こいつには何言っても無駄だ。」

俺の言葉に、スカイファイアーも頬を引き攣らせつつ頷く。

「その様だね。コンバッティコン、悪いけれど彼を連行してくれるかい？ 嚴重に、嚴重に閉じ込めておいてね。」

「了解です。行くぞ皆！」

「この、放せ！ 貴様らメガトロン様のお怒りを恐れぬか……。」

オンスロートたちがレーザーウエーブを引つ立てて行く。やれやれ、スカイファイアーを怒らせるため、レーザーウエーブもなあ……。

「あんま怒るなスカイファイアー。レーザーウエーブは、単なるデストロンって言うよりもメガトロン個人の忠臣なんだ。メガトロンが全て。メガトロン以外に神は無し。そんな奴だ。」

「その様だね。……ふう。うん、もう大丈夫。」

「いや、俺のために怒ってくれたのは嬉しいけどな。」

「ははは。」

さて、とりあえずはメガトロンがやって来ない様に、スペースブリッジを一旦封鎖しないとな。でもってシステムを書き換えて、デストロン軍団が使えなくしないと。それとホットライン使ってコンボイに連絡して、地球からメガトロンが奪った分のエネルギー

ギーを、奪われた奴らに等分に返還しないとな。使われちゃった分も多いけどよ。

セイバートロン星のデストロン本部基地を制圧完了し、そこに貯蔵されていたエネルギーゴンキューブはサイバトロンを介して地球のデストロン被害者たちに等分に返還した。スペースブリッジは、とりあえず一旦サイバトロン基地の隣に出口を開いたが、まあ完全に友好関係ってわけでもないの、エネルギーゴンキューブの山を送りつけたらすぐに閉じた。恒常的にスペースブリッジを開けるぐらいに仲良くなれないもんかね。

それはともかく、貯蔵されてたエネルギーゴンキューブは返還しちゃったんで、大至急新たな反物質炉を基地に隣接した場所に建設した。反物質炉が星のあちこちにあるのは怖いって奴もいるかも知れん。だが実の所機構ハードウェア的に絶対に反物質量が一定以上にならない様に造ってあるので、事故ったとしてもそれほど怖くないんだ。その代わり1基あたりのエネルギー出力は弱くて、数が必要だけだな。

そして今、俺とスカイファイアー、サンダークラッカー、ルナクローバー、シックスショットの5人は、デストロン刑務所に来ている。刑務所って言っても、俺たちNAIの刑務所や拘置所と違って、すっげえ効率的と言うか非人道的と言うか……。

ぶっちゃけ、見た目書類倉庫。多数あるキャビネットの中には、ピンクと言うか紫と言うか、燐光を放つ輝く小さなブロック状の物がギッチリと詰め込まれている。うっか

りすると、エネルギーキューブと見間違えう馬鹿も出そうだが、俺たちトランスフォーマーの眼にははつきりと違いが分かる。

……これは、トランスフォーマーのスパークや人格データなどが一纏まりに詰め込まれた、パーソナル・コンポーネントだ。つまりは、人間で言えば脳みそのうち人格とか記憶とかの部分を取り出して、しまつて置いた様なもんだ。俺が非人道的だと言つた理由が、わかつてもらえるだろうか。

まあ、こう言う処置は刑務所だけじゃなく、長期間の宇宙旅行の際などにも使われていたため、トランスフォーマーの間ではそこまで酷い扱ひとも言い切れないのだが。しかしそれでも、解体刑つてのはゾッとしない。

「スカイファイアー、これらパーソナルコンポーネントの中で、本当の危険人物を除いた者たちは、解放したいと思うんだ。おそらくは、無実の罪、つまり冤罪で刑に処された者とか、あとはメガトロンに逆らつただけの者とかも居ると思うんだ。」

だが本気で凶悪犯とか、デストロンの政治犯であつても思想的に相容れない、ウチでも政治犯になりかねない奴らは多いと思われるからな。メガトロンの敵だつたつてだけで、デストロン至上主義は変わらないとか。そう言う奴らは解放できない。」

うん、本来のコンバットロンになるはずだつた連中とかな。

「わかつたよ。わたしが責任者になつて、デストロンの捜査資料他からどんな者たち

だったかの調査チームを作る。」

「だいたいの人数が分かったら、教えてくれ。そしたらロボット工場ボデイで身体を造らせる。そしてそれにパーソナルコンポーネントを殖え込む。」

「それがいいね。」

さて、とりあえずの大仕事が完了した。セイバートロン星のNAI-L領域は随分と広がったな。だけどその分、少しばかり……。ちよつとばかり警備体制とか防衛体制とかの厚い薄いエンジニアーズ・ヘブンの差。あと旧来の領域である『技術屋の天国』と新規に獲得した領域で経済格差が出てるとか。制度上の歪ゆがみが出て来てやがる。しばらく内政をメインにしないといかんか。

まだセイバートロン星の残るデストロン領域には、大量のスタンドアローンタイプ型の戦闘用ドロイドの群れや、それを指揮する下つ端デストロンが居る。頭は固くて悪いが、武器の威力だけは本物だ。更に指揮官が居れば、かなりの危険度になる。

下つ端ジェットロン4人のうち3人をシックスショットが撃ち落として捕まえてくれたんで、制空権は近々こちらの手に落ちるだろう。制宙権も、セイバートロン星を仕切っていたレーザーウェーブがこちらの手に落ちた以上、頭の悪いスタンドアローンの戦闘ドロイドが主なら、なんとかなるか……。

そして制宙権を握ったら、本格的に対ユニクロンを睨んで防衛環境を整えなくてはな

らねえ。いや、それだけじゃねえな。メガトロンの逆襲にも注意を払っておかねえと。メガトロンは事実上セイバートロン星を失った様なもんだが、奴の策源地は地球なんだ。逆にかえて、軍団の維持運営に対して重荷になってたセイバートロン星が無くなつた事で、奴の自由度は上がったかも知れねえな。

さあて、どう出る?メガトロン……。どう出る?ユニクロン……。

第16話：セイバートロン星解放

アルファートリン
爺さんとエリータ・ワン、クロミアが会見を申し入れて来た。理由は分かる、と言うか想像がつく。

「よう、アルファートリン殿。今日はどうしたんだね？」

「うむ、今回はエリータ・ワンの望みでな。お前さん方に話があるそうなのじゃよ。」

「そうか。いや丁度良かった。俺たちの方も、お前さん方サイバートロン連中と話があったんだ。NAILに来てるデストロン連中には、お前さんたちが来る前に話をしてた。あつちは大喜びで了承してくれたよ。」

その言葉に、アルファートリン爺さんは相好を崩す。一方のエリータ・ワン、クロミアは訳が分かって無い様子だ。

「ほう、それは良かったのう。」

「アルファートリン様、スタースクリームが何を言い出すか分かっておいで？」

「うむ。わしは以前にスタースクリームから色々話を聞いておったでな。そこからの推測じゃが。」

俺は居住まいを正すと、話を続ける。傍らのルナクローバーが、壁にあるスクリーン

にセイバートロン星の状況を表示してくれた。

「こつちの話から先にさせてもらいてえ。これが今現在のセイバートロン星の状況だ。赤道地域エリアとその周辺はほぼ、まあ9割以上俺たちNAILの勢力圏になっている。他の領域エリア、残りのここ、北極領域エリアと南極領域エリア、それにそれらを繋ぐ回廊部分。ここが今現在、デストロン軍団の支配下領域だ。

ここには元レーザーウェーブの指揮下にあつた、戦闘ドロイドの群れがスタンダードはいかいローンで徘徊してやがる。逃げたサンストーム他、デストロン兵士が指揮官としてそれらを指揮してるかも知れんしな。だが旧デストロン本部基地のスペースブリッジを使えなくなり、策源地である地球から切り離された以上、放つて置いても立ち枯れるはずだ……。

だが。」

「だが？」

エリータ・ワンとクロミアが、異口同音に言った。俺は頷いて続ける。

「ある事情があつて、俺たちはセイバートロン星とその周辺宙域の平定を急がにやならねえ。それで強引だが、攻める事にした。幸いだが、戦力的にはデストロン刑務所から解放した奴らが、多くNAIL防衛軍に志願してくれたんだ。3軍に分ける余裕ができた。」

この北極と南極を繋ぐ回廊部分は、俺が指揮官になって攻め落とす。敵に残された領域^{エリア}で一番狭い部分だ。そして南極領域^{エリア}だ。ここはデストロン傭兵を主軸にして、プロテクティコンと、指揮官としてサンダークラッカーを付けてやる。残る北極領域^{エリア}だが。指揮官にスカイファイアーと、そしてコンバッティコンを出すから、サイバトロン傭兵を中心にして攻め落としてくれ。

そして攻め落とした後の話が本題だ。南極領域^{エリア}には非メガトロン派のデストロンたちによるデストロン自治区を作る。そして北極領域^{エリア}は、お前らサイバトロンによるサイバトロン自治区を建設して欲しい。」

「!!」そ、それは願っても無い事……。と言うよりも、わたしたちはセイバートロン星へサイバトロン基地を建設する事を願い出に来たのよ。それが自治区とは……。」

驚きを顔に浮かべ、自分たちの望みを語るエリータ・ワンと、同じく驚いたまま硬直しているクロミアの対比が面白い。

「これは最初からの想定だったんでな。どうしてもサイバトロンやデストロンの身分を捨てられねえ者たちにも、居場所を作つてやらねえと、将来的に禍根が残る。理想は全員がNAILに加入してくれる事なのは間違いないが、現実を無視しちまったらそれこそ社会に歪みが残る。その結果は、再度のセイバートロン^{ウエー}戦争が未来のNAIL内から起こるかも知れねえんだ。」

「……。」

「デストロンとサイバートロンは、南極と北極に分かれて住んでもらう。その間にNAILの領域を置く事で、双方の接触は最低限に、ただしNAILが仲立ちに入る事で交流。それそのものは途絶えない様にする。」

セイバートロン星の歴史はお前らにも教えただろうか？クインテツサ星人による支配と、それからの脱却。だがその後、デストロンの蜂起。民間ロボット発祥のサイバートロンと、軍事用ロボットが祖先のデストロンは、トランスフォーマー人種が違うんだ。無論、仲良くやれる奴らが居ないとは言わねえ。そいつらはNAILで頑張ってもらおう。だが、無理な奴らもいるんだよ。

無理矢理に『宇宙を一つに！』って纏まとめちまつたら、一見理想的だがどうしても火種と歪みが内に残る。それよりは、仲良くやれねえ奴らは離しておいてリスク管理した方がいいと俺あ思うね。」

エリータ・ワンとクロミアは顔を見合わせるが、やがてクロミアの奴が何かに気付いたような顔で口を開く。

「スタースクリーム。あなた先ほど、『ある事情でセイバートロン星とその周辺の平定を急がなければならぬ。』と、そう言っていたわね。その『ある事情』は話してもらえないのかしら？」

「その質問は、先に話を通したデストロン傭兵代表からも出て、説明した。お前らにも勿論話すつもりだったがな。これは全セイバートロン星、いや地球や宇宙にいる連中も含め、全トランスフォーマーの全力を結集しないとイケない問題だからな。」

「それは何？」

「ルナクローバー、頼む。」

「はい！スタースクリーム様！」

ルナクローバーの操作で、スクリーンの映像が切り替わった。そこに映されたのは、ある惑星の最後……最期の映像だった。

「これは銀河の反対側……地球や今現在のセイバートロン星がある位置をアナログ時計の6時の位置だとすると、2時の場所に位置する惑星ドーンが滅びた時の映像だ。この惑星には、トランスフォーマーで無いにせよロボット生命体やそれ以外の知的生命体が多数生きていた。だが……。」

「!!」こ、これは！」

「……。」

アルファートリン 爺さんが沈痛そうな表情になる。アルファートリン 爺さんにはこの映像を手に入れた時に、見せて

やったからな。俺は可能な限り感情を込めずに、平板な声で語った。

「これは、惑星ドーンの数少ない脱出に成功した生き残りが、銀河系に生きる者たちのた

めに可能な限りの伝手で流して寄越した映像の、コピーのコピーのコピーだ。……この惑星そのものを噛み砕いて喰らっている巨大な化け物。

超古代から生き続ける恐るべき天才にして天災科学者プリマクロンが創造したものの、その創造主に反乱して宇宙を暴れまわっている惑星サイズのトランスフォーマー、星帝ユニクロンだ。」

映像の中で、宇宙を駆ける巨大な球体が、2本の牙で惑星ドーンに噛り付き、噛み砕きつつその口で咀嚼して行く。脱出を試みる宇宙船もいたが、その内の多くは口から発せられる牽引光線トラクタービームか何かの働きにより、同じく口の中へと引き寄せられ食われてしまった。

「ユニクロンは、宇宙の惑星を喰らいつつ、それをエネルギーに変えて宇宙を気ままに放浪している。その行動は、本来予想がつかないはず……だった。だが近いうちに、奴は地球とセイバートロン星が存在する、この宙域に必ず現れる。」

「何故かしら？何故それが判るのスタースクリーム？」

「サイバトロンのマトリクスだ。」

俺はエリータ・ワンの問い掛けに、はつきりと答えてやる。

「ユニクロンが唯一自分自身の強大なパワーに対抗し得ると考えている……いや天敵とさえ考えているのが、サイバトロンのマトリクスに秘められているパワーだ。数百万

年、いや下手すると一千万年以上に至る間、蓄え続けられて来たサイバトロン・リーダーの叡智の集積体。それを解放すれば、それは強烈なまでの物理的なパワーとして発揮される。

ユニクロンは、だからこそ自身を破滅させうるマトリクスを破壊すべく、この宙域にやってくる。そしてそのついでに食事として、セイバートロン星や地球をムシヤムシヤやっちまうだろうぜ。」

エリータ・ワンとクロミアは言葉もない。俺は更に言いつのつた。

「サイバトロンのマトリクスを上手く使う事ができれば、ユニクロンに勝てるかも知れねえ。だがそれじゃ駄目なんだ。切り札が一枚きり、しかもそれが上手く使えるかどうかも分からねえ不安定な代物だつてのは、はつきり言つて冗談じゃねえ。だから俺たちは大急ぎでセイバートロン星とその周辺宙域を平定し、対惑星クラスの……惑星破壊兵器クラスの武器を多数建造しなけりやならねえ。」

人事を尽くして天命を待つつて言葉がある。みんなで頑張つて頑張つて踏ん張つて踏ん張つて、尽くせる限りの手を尽くした上で、奇跡に救われるつてのなら俺も否定しねえよ？けど、最初から奇跡のマトリクスに頼りつきりだつてのは、何か違うと思わねえか？

NAIILに味方してくれてるデストロン連中は、賛成して協力を約束してくれた。お

前らはどうする？お前はセイバートロン星サイバトロンの、事実上のトップだ。答えろ、エリータ・ワン！」

俺はエリータ・ワンに決断を迫る。爺アルファートリンさんが、静かにそれを見つめる。やがてエリータ・ワンは、静かに頷いた。

俺が率いたNAIL防衛軍の部隊が、最後の戦闘ドロイドを破壊する。フォーシツプを使うまでも無かった。デストロン軍団支配領域エリリアの北極領域エリリアと南極領域エリリアを繋いでいる、回廊領域エリリアは俺たちの手に落ちた。

そして副官であるルナクローバーが、報告を上げて来た。

「サンストームを発見、逃げようとしたところをシツクスショット率いる隠密部隊が捕らえたとの報告です！」

「良くやってくれたと伝えてくれ！こちらの損害は!?」

「損害は軽微！軽傷者が少数で、それも既に後送して治療リベアさせてます。」

後は北極領域エリリアと南極領域エリリアだが……。

『こちら南極領域派遣軍、サンダークラッカー！南極領域エリリアの制圧完了だぜ！損害は軽微！こちらほぼ全て戦闘ドロイドだけで、指揮官役のデストロン兵士は殆ど居ほんなかった！わずかに居た奴も、申し訳程度の抵抗した後は投降してきた！』

「そうか！よくやってくれた！」

南極領域エリアも片付いたか。残る北極領域エリアだが……。戦場の跡片付けとかを指揮しながら、やきもきしつつ待つっていると、しばらく経ってからようやく連絡が入った。

『こちらは北極領域派遣軍のスカイファイアー。なんとか北極領域エリアを完全に手に収めたよ。ちよつと時間かかったからね、わたしたちが最後かな？』

「ははは。まあそうだけだな。よくやってくれたな、損害は？」

『うん、損害はほとんど無いよ。敵には一人も指揮官役のデストロン兵士が居なかったんでね。戦闘ドロイドを駆逐する、単純作業の繰り返しだったよ。だけど数が数でね。最後の方はうんざりだったねえ。』

「そうか、ほつとした。後は物資の準備が整い次第、セイバートロン星周辺宙域の制圧作戦を開始するぞ。」

『了解だよ。ではサイバートロン傭兵と抑えの部隊を置いて、帰還するよ。』

これで残るは、周辺宇宙空間だけだ。そのスタンドアローン形式戦闘ドロイドを掃除終わったら、L4、L5のブラックホール炉をセイバートロン星の衛星軌道に持って来ると同時に、対ユニクロン用兵器を開発開始しなければ。

疲れた。

ああ、いや。身体はそんなに疲れてない。機械だしな。超ロボット生命体だしな。気疲れしたんだ。何で気疲れしたかと言うと、サイバートロン自治区の代表エリータ・ワン、デストロン自治区の代表オクトーン、そして俺たちNAIIL中心人物は、セイバートロン星の解放を祝つての式典に出てたんだ。と言うか、主催者だったんだ。

ちなみにデストロン自治区の代表に、いつの間にかオクトーンが収まつたのは正直驚いた。コイツ、『2010』ではダイナザウラーを抱き込んでニューリーダー病やつてたんだよな。シックスショットに調べてもらったけど、コイツの野心は非メガトロン派閥のトップになった事で、鎮まつてるらしい。正直ほつとした。

うん、セイバートロン星は解放されたんだ。うん。セイバートロン星周辺宙域は、完全に掃除完了した。1人だけ、ジェットロンのランチヘイズって奴が戦闘ドロイドの指揮官として居たけれど、デストロンのセイバートロン星本部基地が陥落して以来、ろくにエネルギー食^{エネルギー}つて無かつたらしく、すっかりボロボロだった。刑務所に収監されたんだが、最低限とは言え食^{エネルギー}事がまともに出るので、感激してたっけなあ。

と言う訳で、オイル風呂に入って疲れを流した後は、俺は再び仕事に没頭する。俺とブロウル、スィンドルは衛星軌道上に建設する新型ブラックホール炉の設計だ。スカイファイアーとオンスロートはブラックホール炉から地上に向けてビーム送電するビーム発信器と、ビーム受信施設の設計を担当している。他にも北極のサイバートロン自治

区、南極のデストロン自治区、両者に対する支援策として各々3基ずつの反物質炉を寄贈するので、その手配はボルターがやってる。

今一番忙しいのは、宇宙空間での作業にもっとも適応している、ブレストオフだ。あいつは今、L4とL5のブラックホール炉を牽引して、セイバートロン星の衛星軌道に持つて来ようとしている。

サンダークラッカーとプロテクテイコン、そしてシックスショットは表と裏から警備に忙しい。セイバートロン星解放に成功した今現在、NAIILにもサイバートロン自治区の連中にもデストロン自治区の連中にも、若干の気の緩みゆるが出ているんだ。こんな時が、一番危ねえ。だが引き締めを図ろうとしても、どうしても気が緩むんだらう。緩んでいないのは、俺たちぐらいな物だ。

そんな時、通信が入った。ブラックホール炉を曳航してる途中のブレストオフだ。

『こちらブレストオフ。ボス、応答願います。緊急事態だ。』
『こちらスタースクリームだ。何があった。』

『セイバートロン星近傍宇宙で、アストロトレインを発見したぜ、ボス。奴はセイバートロン星の地上から上がって来たスカイワープを回収すると、地球へ向けて航路開始した。追いかけたかったが、こっちは万が一にも盗られたくない荷物ブラックホールがあるんでね。追跡は断念したよ。この間小惑星帯から持つて来た、近場の資源小惑星に隠れてやり過ご

した。』

「ご苦労。俺も、お前の判断を支持する。早く戻って来い。」

『了解だ。こいつを静止軌道上に置いたら、すぐ帰還するぜ。』

とうとう動き出しやがったか、メガトロン。おそらく今回は、単なる偵察だ。だが
いつたい、何を考えていやがる？

第17話：スカイワープ

ルナクローバーが、帰って来ねえ。ちよいと近場まで、パルプ雑誌の新刊を買いに出かけたまま、帰って来ねえ。アイツも俺の副官と言う役職で、曲がりなりにもNAILの中枢に居る立場だから、出掛ける時は必ず誰かと最低2マンセルで出ろって言ったんだが。

それなのにアイツ、「近所だし大丈夫ですよ！トランスフォーム！」って、セイバートロンヘリに変^{トランスフォーム}形して飛んで行きやがった。そしてそのまま、6時間経つても帰って来やがらねえ。痺れを切らした俺は急ぎ、プロテクティコンのストリートワイズとグループ、そして諜報主任のシックスショットに頼んで、足取りを追ってもらったんだ。

「……くそつ。」

「スタースクリーム、確かに心配だけれど……。」

「こんな時ほど、落ち着かねえと。」

「わかってる、スカイファイアー、サンダークラッカー。……大丈夫だ。落ち着いてる。」

口では言ったものの、俺は随分と苛立っていた。こいつらも、『どこが落ち着いてるんだよ?』って顔をしてやがる。そうだ、こんな時ほど、本当に落ち着かねえといかん。俺

は必死で精神の平衡を取り戻す。

「…………ふう。本当にもう大丈夫だ。ありがとう2人とも。こう言うのは、プロに任せないといかんか…………。」

『こちらストリートワイズ！報告します！B—22—315の路地裏で、遺留物を発見！ルナクローバー副官が購入した、パルプ雑誌が記録された記録装置メモリユニットです！

ダウンロードIDが、データ書店への聞き込みで判明した、ルナクローバー副官が購入した物と一致しましたので、間違いありません！』

「なんだと!？」

『それと、周辺の壁に弱装のレーザー痕を発見しました！殺傷目的ではなく、無力化が目的の威力が弱いレーザーです！推測するに…………。』

「そこで何者かに襲われ、連れ去られた、って事だな。不幸中の幸い、生きてはいるだろう。わざわざ弱装レーザーを使ったんだ。」

壁の通信画面に映ったストリートワイズも頷く。と、そこで画面が2分割されて、グループの姿が映った。

『こちらグループです！報告します！自分は一般市民への聞き込みをしていたのですが、見慣れない鳥形トランスフォーマーの目撃例が何件か…………。外見の情報から、おそらくは…………。』

「コンドルか！じやなけりやバズソーか！」

『はい！赤と黄色の両方が目撃されてます！』

「わかった！ストリートワイズ、グルーブ！お前らは一度2人で合流後、そのまま捜査を続行してくれ！」

『了解！』

メガトロノめ！姑息な手に出やがって！俺は通信機の制御盤コントロールを殴りつけたい衝動を、必死で堪こらえる。そこへもう一人から連絡が入った。

『シックスショットよりNAIL中央研究所、応答願います。』

「こちらスタースクリームだ！何か情報があつたか！」

『はっ。拙者の情報網に不審な宇宙船が、宇宙港ではなく郊外の僻地へきより離陸したとの情報が入ったでござる。外観からして、アストロトレインでは無いかと推測されますが……。もしソレにルナクローバーが乗せられていたとすると……。』

『こちらブレストオフ！緊急！緊急連絡だボス！』

突然また通信画面が2分されて、ブレストオフの姿が映し出された。……!?

「ブレストオフ！どうした、その損傷ケガは！」

『すませんボス、してやられた……。俺は衛星軌道上で作業中、逃走するアストロトレインを発見したんだが、周辺の電波状況が悪くて連絡できず……。慌てて追跡したん

だ。

そしたら奴め、『追って来たら人質の命は保証できねえぞ!』って……。そしてスラストとダージにレーザー砲を突き付けられてるルナクローバーの映像送って来やがって。俺あ『人質の命は、どつちにせよ保証されてねえじゃねえか!』って言い返したけど、内心怯ひるんじまって。そこを突かれて忍び寄ってたコンドルとバズソーに気付かずに……。』

「わかった! あんま喋るな! 今すぐ軌道う上にファーストエイドを送る! お前はお前の損傷ケガの事考えてろ! シックスショット、聞こえてたな!」

『はっ。これより拙者は、隠密活動に入ります故。しばしの間、全ての連絡を断ち、地球のデストロン軍団を調査するでござる。しからば、ご免!!』

俺は通信を終えた。やってくれたもんだ、メガトロン。コンドルとバズソー、なんとかしても始末しておくべきだった。前回メガトロンの融合カノン砲を取り戻しに来た時に、なんとしても。俺はファーストエイドへ指示を出し終わると、両の拳を、固く、固く、握りしめる。

ルナクローバー、俺はアイツに負い目みたいな物を感じている。本来は、まっさらな普通のNAIルトランスフォーマーとして生まれて来るはずだった。それが何の因果か、多元宇宙の何処の並行異世界か知らんが、『赤ルナクローバーとやらの他人』のスパーク情報を自分のス

パークに上書きされて。俺みたいな、ダメンス……NAIを率いてはいるし、そういう面ではけっこうな物かも知れんが、私生活わたくしじふの面でははつきり言つて駄目駄目だ思う。そんなダメンスへの恋愛感情を殖はえ付けられて。

勿論、俺に責任は無えつて事はわかつている。わかっちゃいるんだ。だが、だけど。そんなのつて、あるか？そんな酷い事つて、あるかよ？

「そんなのつて、無えよなあ……。」

「スタースクリーム？」

「スカイファイアー、なんとしても助けるぞ。ルナクローバーを。」

「……ああ。」

俺はルナクローバーの事を想う。ひたすらに、ただひたすらに、哀しかった。

俺は普通のエネルギーで、無味乾燥なエネルギーしよ補給じふを終わらせると執務に戻る。アイツが居ない事で、これだけ精神にダメージを喰らうとは思わなかった。執務に逃避してないと、居ても立っても居られん。

そこへ中央指令室で番をしていたホットスポットから、緊急連絡が来る。

「り、リーダー！リーダー！スタースクリーム！地球から通信です！相手は……メガトロ
ン！破壊大帝メガトロんです！」

「なんだと!? 今行く!」

俺は中央指令室へ走った。どうやってこちらの通信コードを調べたのか、指令室の通信装置スクリーンにはメガトロンのにやにや笑いが大写しに映っていた。

「メガトロン、貴様!」

『おおう、これはこれはNAILリーダー、スタースクリーム殿? ふははは、共に軍団のリーダー同士。そのよしみで、今日はちよつとした頼みがあつてな。』

「く……。NAILは軍団じゃねえ。一般市民も含めた、中立勢力だ。」

『ま、それはそれで、だ。こちらにご招待したご婦人がおつてな。』

メカトロン
奴が脇よに避けると、そこには予想通り、ルナクローバーがエネルギーで作られた檻おりに入れられ、サウンドウェーブに見張られているのが映った。

「ルナクローバー! く、メガトロン! 何が望みだ! こちらで捕らえているフレンジー、ランプル、ラットバット、セイバートロン星のジェットロンたち、そしてレーザーウェーブの身柄か!」

『あんな役立たずどもの事など、どうでも良いとも。それよりだな、スタースクリーム。お前は是非、招待したいと思つてな。ただし歓待の準備が間に合わんでなあ。お一人様で、御出おいでいただきたくてな。』

「スタースクリーム、これは罠だ!」

「メガトロン、てめえ！」

スカイファイアーとサンダークラッカーが叫ぶ。ああ、わかつてらあな。罨だ。だけどよ……。ルナクローバーの顔にあつた痕……。奴め、あいつを殴りやがった！

「何処だ。何処に出向けばいい。」

「駄目！ スタースクリーム様、来ちゃ……。」

「ウルサイ、キサマハ黙ツテイロ。」

『キャー！』

「サウンドウェーブ、手前！^{てめえ}く、さっさと場所を提示しやがれ！」

『いいともスタースクリーム。』

そして画面にマップが表示される。アフリカのサハラ砂漠だ。データベースによると、砂の砂漠じゃなく、岩石砂漠地帯だな。

『では、待つておるぞ。くれぐれも、NAIILの仲間を連れて来てはいかんぞ？ ふははは。』

通信は切れた。俺は拳を握りしめ、歩き出す。ホットスポットが慌てて言った。

「リーダー！ お待ちを！ 明らかにこれは罨です！」

「いつその事、NAIILの精鋭部隊を揃えて……。」

オンスロートも叫ぶ様に言った。だが俺は頭^{かぶり}を振る。

「駄目だ。それをやったら、奴はルナクローバーを破壊して逃げちまう。……なあに、さつくりと行って、帰って来るさ。お前らは大船にでも乗った気で、待っててくれ。」

「大船って、タイタニックか何かかよ。スタースクリーム……。いや、止められねえのはわかっただけ。お前が止めて止まるんなら、俺は生きて今ここに居ねえもんな。だが……。」

サンダークラッカーが、泣きそうな声で言う。そしてスカイファイアーが語り掛けて来た。

「スタースクリーム……。待っているから、必ず『帰って』来るんだ。必ず、ね。」

「おう。んじゃあ行って来る。トランスフォーム！」

俺は変形し、超空間ゲートを発生させると一気にそれを潜り抜けた。

岩だらけの風景。殺風景な岩石砂漠。だが、俺のセンサーはここに多数の反応を感知している。俺は叫んだ。

「来たぞ、メガトロン！」

「ふははは、よく来たなスタースクリーム。では、歓迎パーティーを始めるとするか。」

その声と共に、地面の下から土砂を巻き上げて、2つの巨体が立ち上がる。デバスターとメナゾールだ。更に上空にはスカイワープを先頭にして、ラムジェット、スラス

ト、ダージのネオジェットロン三人衆と、戦闘機形態のブリッツウイングが飛翔していた。後方からは、アストロトレインとリフレクター3人、インセクトロンのキックバツク、シャープネル、ボンブシエルがインセクトロン・クローンと共に押し寄せて来る。

そしてデバスターとメナゾールの後ろに、メガトロンとサウンドウェーブ、ジャガー、コンドル、バズソー、そして檻おりに閉じ込められたルナクローバーの姿があった。ルナクローバーが叫ぶ。

「スタースクリーム様！なんで来ちゃったんですかー！」

「ルナクローバー、仕方の無い奴だな。迎えに来てやったんだから、少しは喜べよ。さ、帰るぞ。」

「そう急ぐこともあるまい。少し遊んでいけスタースクリーム。ふははは、無駄な抵抗は、してもよいぞ？そうでなくては、つまらんからな。」

……デストロン軍団、やれ!!」

そしてデストロンの奴らが一斉に襲いかかって来る。俺は叫ぶ。

「フォースチップ、イグニッション！ヴァーテックス……キャノン！ブレイドお!!」

フォースチップがチップスロットに叩き込まれ、ヴァーテックスキャノンとヴァーテックスブレイドが展開する。そして俺は、メナゾールの背後へと回り込んだ。ヴァーテックスブレイドが一閃。

「……うわあああああ!!」「……」

「ば、馬鹿者!何故分離するか!モーターマスター!?!」

「も、申し訳ありませんメガトロン様……。合体ジョイント部を斬られました!」

「なんだと!?!」

奴らが慌てている時、既に俺はデバスターの肩口に陣取って両肩の合体ジョイントを、一方はヴァーテックスブレイドで、もう一方はヴァーテックスキャノンで破壊する。そして飛び降りざまに、脚の付け根の合体ジョイントも破壊。デバスターも6体に分解してバラけた。

「ち、ちくしょう!だが数はこっちの方が上なんだ!」

「数で揉みつぶせ!」

敵はレーザーやビーム、ミサイルを連打してくる。だが俺は突っ込んで来たモーターマスターの腕を取り、関節を極めてその大柄な身体ホデイを盾に、逆に奴らのただ中へ突っ込んだ。

「ぐあ!う、撃つな!撃つなあ!」

「くらいやがれ!」

スクラッパーにモーターマスターを叩きつけ、グレンを振り回してデッドエンドとドラッグストライプを叩き伏せる。ヴァーテックスブレイドでブレードダウンとワイル

ドライダーの両腕を飛ばし、ミックスマスターの溶解液をロングハウルとスカベンジャーを盾にして躲す。ボーンクラッシュヤーを一本背負いでミックスマスターに叩きつけ、ヴァーテックスキャノンで無力化する。

そこヘインセクトロンどもや空からの敵が集中砲火を加えて来た。周囲のスタントロンやビルドロン共がまだ生きているのも構わずにだ。俺は致命傷になるものだけを躲し、後は命中するにまかせて敵中へと突入した。

痛てて……。さすがにあれだけ数があるとなあ。俺はかなりボロボロになっていた。あちこち身体ボデイの回線がショートして、放電してやがる。装甲もひび割れ、煤けていた。だが、まだ動ける。まだ動けるって事は、まだ戦えるって事だ。

メガトロンが、啞然としてやがる。デストロン軍団は、生きてるか死んでるかわからんが、ほぼ全員が死屍累々って状態だ。残るはメガトロンと、サウンドウェーブ、カセツトロン3匹だ。

「な、ば、馬鹿な……。わしの軍団が……。」

「ルナクローバー……。そろそろ帰るぞ……。俺たちの『家』へ……。セイバートロン星へ……。」

「スタースクリーム様……。」

ルナクローバーは、泣きそうな顔をしている。そんな顔すんな。お前にや、阿呆の様に笑って、物騒な台詞を吐いているのがお似合いだぜ？

「く、せ、セイバートロン星は貴様らの家などではないわ！セイバートロン星は、わしの物なのだ！これを見ろスタースクリーム！」

「む……。」

メガトロンの野郎は、檻おびの中のルナクローバーに融合カノン砲を突きつけて叫ぶ。

「これ以上手向かいしてみろ！こやつ頭の頭を吹き飛ばすぞ！サウンドウェーブ！カセツトロン！奴を撃て、撃ち殺してしまえ！」

「リョウカイ、メガトロンサマ。ジャガー、コンドル、バズソー、攻撃指令。」

キシャアアア!!

クアアア!!

ガウルルル!!

集中砲火が、俺を襲う。俺は急所だけは守って、ほぼ全弾を受けた。吹き飛んだ俺は、地面に倒れ伏す。

「ふ、ふはは、ははは！ようやつと倒れ……な、何い!？」

「泣きそうな顔してんなよ、ルナクローバー。さ、帰ろうぜ?」

「スタースクリーム様……。」

再び立ち上がった俺に、メガトロンは怒りの形相を浮かべる。

「おのれ、スタースクリーム！ ええい何をしておるかサウンドウェーブ！ 撃て、撃ち殺せ！」

「リョウカ……オワア!？」

「サウンドウェーブ、何をしておる……な、何い!？」

「クレムジーク!!」

俺もその一瞬、あつけにとられた。突然出現したそれは、かつてメガトロンが作り出した超ロボット生命体の天敵、電気生命体クレムジークだった。クレムジークはメガトロンに飛び掛かる。

「クレムジーク！」

「な、ば、ばかものやめんか！ 貴様、創造主たるわしが分からのか!」

「クレムジーク!!」

「うわっ!!……な、なにっ!？」

クレムジークに怯えたメガトロンとサウンドウェーブ、そしてカセットロンどもは泡を食って逃げ惑っていたが、そのクレムジークは突然姿を消す。そして誰も居なくなつたルナクローバーの檻おとりが、そこに突如出現したトランスフォーマー人。影の発したビームで破壊された。

「さあ、お嬢さん。お前さんの騎士^{ナイト}でなくて悪いがね。さっさと騎士^{ナイト}さんのところへ行つてやりなよ。」

「お前は！リジエ!!」

それは透明になれる特殊能力を持つ、サイバトロン戦士のリジエだった。さらに岩陰から、ホログラム映像を出す事のできるサイバトロン戦士、ハウンドも姿を現す。

「ハウンド！そうか、さっきのクレムジークはお前のホログラム……うわっ！」

「スタースクリーム様ああああ!!」

俺は飛び付いて来たルナクローバーを、必死こいて抱き留める。いや、俺は重傷だからね？まだ戦えるけど。でも重態一步手前の重傷者だからね？

メガトロンがリジエとハウンドに向かって怒声を上げる。

「お、おのれ！何故貴様たちが！」

「その2人だけだと思わない方がいいな、メガトロン。」

「何っ！その声はコンボイ！」

砂漠の太陽を受けて、赤く重厚な機体^{ボデー}が煌^{きらめ}く。やっぱりコンボイ、かつこいいよなあ。その後ろには、幾多のサイバトロン戦士たち。

「パーティーにはぎりぎり間に合ったかな？たしか、来てはいけけないのはスタースクリーム以外のNAIILメンバーだったはずだな。」

「な、何故その事を！何故この場所を！」

「NAIIL 諜報主任シックスショットからの連絡を受けてね。NAIIL でなければパーティーに参加しても構わないだろう、と。スタースクリーム。彼が詫びていた。独断で事を運び、申し訳無いと。後で自分からも詫びるそうだが。」

「い、いいか!?勘違いするなよ！俺たちは前の借りを返しに來ただけだからな！好き好んでお前を助けに來たわけじゃ……。」

「アイアンハイド……。その辺でいいだろう。第一スタースクリームだって、そんな事は重々承知だろうさ。それよりか、早く治療しないと。最後まで面倒見てこそ、きちんと借りを返したつてもんだらう。」

「ラチエツト……。」

メガトロンは叫ぶ。

「で、デストロン軍団！撤退……。」

「今日こそは逃がさんぞ、メガトロン！サイバトロン戦士、アターック！撃て撃て撃てーいー！」

猛烈な火線がメガトロンとサウンドウエーブ、そしてカセットロンを叩く。逃げ出そうにもあれじゃ逃げられない。だが生き汚い奴の事……。

「撃ち方やめ！ブロードキャスト、反応は!?」

「残念ながら、奇跡的に生きてますねえ。」

メガトロンは、必死に身を起こす。そしてみじめに哀願した。

「き、貴様の勝ちだコンボイ！た、頼む！情けをかけてくれえっ！」

「……わたしはともかくとして、彼はどう思おうかなメガトロン。」

響く銃声。ビームが奔り、メガトロンがこっそり拾おうとしていたサウンドウエー

ブのブラスターを撃ってはじき飛ばしたんだ。

「ひ、す、スタースクリーム！」

そう、俺だ。俺が腰部のビームキャノンからビームを撃ったんだ。俺はメガトロンに、ヴァーテックスキャノンの照準を合わせる。

「や、やめろスタースクリーム！き、貴様にデストロン軍団のリーダーを、破壊大帝の座を譲ろう！だからやめろ！」

「……要らねえよ、んなもん。」

「やめろおおおおお!!」

俺は撃った。

1人のトランスフォーマーが、胴体のど真ん中にヴァーテックスキャノンの直撃を受けて、それでも立っている。立ち尽くしている。両手を広げ、メガトロンを庇^{かば}って。ぎ

りぎり最後の瞬間に、瞬間移動して。

「……スカイワープ。」

「あ、アストロ……トレイニーー!!メガトロン様を拾って!可能な限りデストロン軍団を拾って!逃げろー!!」

「あ、お、応!!」

絶叫したスカイワープの声に、今まで死んだふりしてやがったアストロトレインがスペースシャトル形態トランスフォームに変形する。つて言うか、死んだふりしてやがったのか。ポロポロのデストロン軍団が、必死にそれに乗り込む。メガトロンも。

そしてアストロトレインは離陸する。サイバトロン戦士どもが必死に射撃し、数発は命中したが、致命的な箇所にはあたらなかったらしい。スカイワープが全身全霊で撃ちまくり、離陸を援護したのも理由の1つなんだろうが。

そしてスカイワープの上半身が、ぐらりと揺れて地面に落ちる。下半身は、立ったまままだ。こいつの腹は、ほとんど原型を留めていない。上半身が、千切れて地面に落ちたんだ。

スカイワープは、だがそれでもレーザーを撃とうとする。しかし両肩のレーザー砲は、ほのかな光を灯しただけで沈黙した。

「スカイワープ……。」

「スター……スクリー……ム、か……。へ、へへ……。どう、よ。メガ、トロン……さま……。見ごと、に……。逃がし……。た、ぜ。」

「ああ、してやられたぜ。」

こいつはもう助からない。

「後悔、は……。無え……。俺、は、デスト……。ロン軍……。団、に……。メガト、ロン様……。に、忠誠……。を……。尽く……。し……。。」

「ああ、そうだな。」

スカイワープは、誇らしげな顔から、だが少しだけ哀し気になる。

「ああ……。いや……。1つ、だけ……。後悔、が……。」

「なんだ?」

「サン、ダー……。クラツ……。カー。奴、が……。お前を……。軍団に呼び戻そ……。う、と、したのを……。メ……。ガトロンさ……。まに……。言つたのは……。お、俺……。あんな……。事にな、るなんて……。サンダ……。クラツカー……。は、本気で……。軍団のためを……。思つて言つたの……。に。」

あれだ……。け、は、後……。悔。奴……。に、謝ら……。ねえ、と……。」

俺はこいつに言つてやった。

「伝えて置くさ。お前が、済まねえって言つてたつてな。」

「…………おう。サン…………キユ…………。それでこそ…………。お、れ、たちの…………。航空…………さ、ん、謀…………。」

死んだ。…………俺が殺した。後悔は無え。けれど、ひたすらに哀しかった。

俺はセイバートロン星の中央研究所に戻り、対ユニクロン用の兵器の設計に没頭していた。助け出されたルナクローバーも、一生懸命手伝っている。…………スカイワープの遺言は、俺がきっちり果たした。サンダークラッカーにスカイワープの謝罪を伝えたと、奴は「そっか…………。」と一言だけ言った。

だが俺は知っている。スカイワープの遺体を安置した、奴の「墓」…………。サンダークラッカーは日ごろ忙しく働いているが、暇ひまを見つけては地下にある墓に向いては、楽しかった事や苦しかった事など、いっぱい話しかけてやがるんだ。願わくは、サンダークラッカーの言葉がオールスパークよに還ったスカイワープのスパークたましいに届かん事を。

いや、お前が言うなって言われそうだけだな。俺もサンダークラッカー 奴 ほどじゃないが、しよつちゆうスカイワープの墓には詣もつでている。スカイワープを自分で殺してしまったのは、かなり何かたましいスパークに來たみてえだ。

ちなみに地球のデストロン本部基地は、俺を殺しに総員出撃した間に、潜入したシツクスショットの手で完全に爆破されている。デストロン軍団は、エネルギーにも修理リペア

部品にも事欠いているはずだ。だが奴らの行方は杳として知れない。未だ地球に居るのか、あるいは宇宙の何処かへ逃げ出したのか……。

コンボイたちサイバトロン軍団は、それ故に地球の基地を引き払う事ができずにいる。当初はコンボイが、エリータ・ワンからサイバトロン自治区リーダーを引き継ぐ話もあつたんだが。

「スタースクリーム様！そろそろ休憩しないと！」

「おう、あとちよつとでコレ終わるから、そしたら休む。」

ルナクローバーは、変わらん。と言うか、変わらん様に振る舞ってる。ただ、今回の事は流石に効いたのか、色々と注意は払う様になつたな。1人じゃ出歩かんとか。ウーマンサイバトロンに銃を抜こうとしなくなつたとか。

何にせよ、俺たちは立ち止まっちゃ居られねえ。ユニクロンに備え、デストロン軍団の逆襲にも備えなきゃならん。……頑張らなきゃ、な。

第18話：新しき旧敵

メガトロンとデストロン軍団の敗走から3年。2005年になった。なっちまった。ユニクロンが来る、2005年だ。奴らメガトロンの消息だが、2年10ヶ月前の時点でアストロトレインの目撃情報が銀河系の端っこ、辺境の星域で手に入った。いや、地球や今現在セイバートロン星のある場所も銀河系の端に近いんだが、もつと銀河系外縁部に近い位置だそうだ。シックスショットが掴んで来た情報だ。

でもって、この情報をコンボイ率いるサイバートロン軍団に開示した。コンボイは当初、自らみずか出向いてデストロン軍団と雌雄を決せんとしたんだが、部下から諫めいさめられたらしい。それで、部下のミニボット数名をアダムスに乗せて、偵察に送り出したとの事だ。コンボイ自身は、地球からデストロンの脅威が去った事を理由に、地球を辞去してセイバートロン星のサイバートロン自治区へとやって来た。サイバートロン軍団も共に。地球のサイバートロン基地はそのままサイバートロン地球大使館となり、ビーチコンバーやラシースプレー、スキッツ、ハウンドなどの親地球サイバートロンたちが常駐している。それだけだと、あまりにだだっ広いので、NAIILや非メガトロン派デストロンの大使館も間借りしてるんだけどな。

エリート・ワンはコンボイに自治区代表の座を譲ろうとしたのだが、それはコンボイが固辞した。メガトロン派……非メガトロン派デストロンがセイバートロン星南極領域に住んでいる以上、十把一絡げにデストロンと呼ぶのはマズいと言う事で、こう呼ぶ事になった。

まあコンボイに言わせるとだな。メガトロン派がまだ存在している以上、自分は軍務に集中したくあり、政治的な事は申し訳無いがエリート・ワンに任せたいと言う話だった。サイバートロン軍団は、徐々にではあるがサイバートロン自治区の自衛部隊的な物に形を変えつつあり、一部の者は復員して一般^{トランスフォーマー}人として再出発したらしい。ホイルジャックとか。……あいつ、軍事技術者以外で、やっていけるのか？

そう言えば、2年9ヶ月前にはNAILが仲立ちして、非メガトロン派デストロンとサイバートロンの間での講和条約締結と終戦を祝う式典が行われた。オクトーンの奴は、多少やつれたが、それでも一回りも二回りも政治指導者として大きくなってやがったよ。単なるニューリーダー病患者じゃなくて、きちんとしたリーダーとしての使命とか、民草に対する責任とか、そう言った物をしっかりと背負う覚悟ができてやがった。あいかわらず、カワイ子ちゃんには弱いらしいが。

奴はサイバートロンだけでなく、地球各国とも交渉し、分割払いではあったがデストロン軍団によるエネルギー強奪被害を賠償すると宣言した。その費用を稼ぐ手段として、

デストロンによる傭兵業の開始、およびスペースブリッジやエネルギーキューブなどデストロンの軍事技術を各陣営に代価と引き換えてパテント供与すると発表。エネルギーキューブ技術は俺も持っているのでNAIでも運用されてはいるんだが、本家はデストロン軍団だしな。文句はつけられなかった。文句言う気も無かったがよ。

デストロン軍団の正の遺産だけでなく、負の遺産までも積極的に背負って清算するその姿勢を、内心はともかく各国もサイバトロンも、勿論NAIもこぞって褒め称える。ただ同時にセイバートロン星デストロンは、メガトロン派と完全に手を切るとも宣言しており、それ以後のメガトロン派の悪行については負担しない事も明言された。

これらの行いにより、オクトーンは大きく内外に存在感を示し、セイバートロン星デストロン自治区の総領としての地位をしっかりと確立したんだ。セイバートロン星以外のデストロン軍団員も、次々に奴をリーダーと認める発言を発表し恭順する動きを見せている。一部は既にセイバートロン星へ帰還し、訓練を受けてデストロン傭兵として働きだした者さえも居るんだ。

一方でメガトロン派は、オクトーンの動きによってテロリストのレットルを貼られ、銀河系の何処にも居場所が無くなりつつある。やるなあ、オクトーン。

それはともかく……。めでたい式典に引き続いて、セイバートロン星3陣営の全住人及び地球からの来賓を前にして、『例の発表』を行ったんだが……。流星にシヨックを受

けてたなあ。最後には反応が好転したが。隠してる事があるのには、スカイファイアーあたりが心を痛めていたんだが。まあ、それは仕方ねえだろう。

うん、そうなんだよな。終戦祝賀式典に引き続いて、俺たちNAIILはユニクロンが地球とセイバートロン星がある星域へ、星々を食い荒らしながら向かっている事を発表したんだ。ただし、^{ユニクロン}奴がサイバトロンのマトリクスを狙って来ている事を除いて。

会場で俺たちは、ユニクロンが惑星ドーンを、惑星ザルツェルを、惑星ブロッサムを食い尽し破壊しつつ進む映像を流した。そしてその予想進路上に太陽系が存在する事を示してやった時には、もう会場はそれまでの祝賀ムードが吹っ飛んで、お通夜状態だったね。

そこで俺たちNAIIL首脳部とエリート・ワン及びコンボイ、オクトーンは、各々演説をぶちかます。セイバートロン星及び地球の住人を疎開させるのは、さほど難しくは無^い。だがそれでいいのか？と。地球ほどエネルギー資源と豊かな生態系に恵まれた惑星は数少なく、またセイバートロン星ほど科学技術が進んだ惑星も数少ない。この銀河の至宝とも言える2惑星を捨てて逃げ出すのか！と。

逃げたいならば逃げてもいい、と俺たちは語った。しかし逃げた先にユニクロンが来ないと、誰が言える？誰が保証してくれる？そして俺たちは、宇宙空間に加速器を並べた超巨大マスドライバー砲、同じく反物質弾頭を空間転移で撃ち出すスペースブリッジ

砲、その他諸々ある、対惑星破壊兵器の数々の建造プランを示してやった。

と言うか、既にそのうち幾つもが建造開始されている事も公開したよ。そしたら沈んでいた観衆、民衆の士気が、徐々に上がって行って最後には最高潮になった。俺たちが、俺たちでセイバートロン星と地球を護るんだ、ってな。

ま、結局のところマトリクスをユニクロンが狙って来てるのは、絶対的な最上級の国家機密として明かさなかつたけどな。明かしたらサイバトン連中が、場合によっては全トランスフォーマーがその他の知的生命体から排撃される可能性がある。いや、理屈としては同じなんだよ？俺としてはソレだけに頼るつもりは毛頭無いが、サイバトロン、のマトリクスをもし廃棄したなら。ユニクロンを止めるための切り札が一枚無くなつて、その後にユニクロンが襲って来ねえと誰が言えるんだよ？

「はあ……。」

「スカイファイアー、溜息吐いてても仕方ねえよ。とりあえず、仕事に戻ろうぜ。」

「……うん！そうだね。ユニクロン襲来に備えて、可能な限りの準備を整えなくちゃ！」
俺は付け加えて言った。

「そしてデストロン軍団の逆襲……いや、メガトロン派の逆襲だ。具体的に言えば、ガルバトロン化したメガトロンあたりが襲って来ないとも分からねえ。」

「ガルバトロン……。君が話してくれた、メガトロンの改造強化された姿だね。」

「ユニクロンの走狗として、な。もつとも当人は裏切る気満々なんだが。裏切れない様に頭脳回路ブレインサーキットに細工されてるんだけどな。」

今、俺たちはセイバートロン星や地球周辺宙域に、大量の対惑星破壊兵器を建造している。まあ、セイバートロン星と地球は今現在、太陽を挟んで反対側の軌道に乗っているため、万が一にも直接は互いを狙えない様な位置取りになっているんだがな。

問題のユニクロンは、リゾンと言う惑星を喰らった事が確認されている。つて言うか、『MOVIE』で冒頭に犠牲になった惑星だ。俺らおれNAIは、きちんと警告を発したぞ？結果、惑星リゾンでは住人の多数が疎開に成功。人的損害は本気にしなかった奴らか、あるいは故郷を捨てられなかった輩やからのみだった。いや、心が痛まねえ事も無えが、ぶつちやけそんなのまで面倒みてられん。

そして今現在、ユニクロンは地球から6・52光年離れた連星系『WISE J104915・57―531906・1』までやって来てる事が確認されてる。ただ、ここでユニクロンを追っかけてた無人偵察機が食われたんで、後の情報はわからん。ユニクロンに取っっちゃ、6・52光年なんてのは、それこそあつと言う間だ。なのに来ねえ。おそらくは、マトリクス破壊のために何かしら策を弄しているんだろう。

たとえば……。ガルバトロンを派遣する、とかな。

俺たちは、万一に備えてメガトロンだけではなく、ガルバトロンの外見情報をも手配書に載せていた。うん、やつといて良かった。執務室でルナクローバーを助手に色々書類仕事してたら、中央指令室のホットスポットから緊急連絡が入ったんだ。

『リーダー・スタースクリーム！太陽系の天の南極方向より、敵対的な侵入者あり！10隻程度の艦隊が、警戒線を強引に突破した模様です！』

「ホットスポット！損害は！」

『幸い、警戒線に配備していたのは、無人艦多数とそれを指揮する少数の宇宙艦艇型トランスフォーマーだったので……。』
トランスフォーマー 人 的損害は軽傷者数名で済みました。ですが

無人艦艇は多数撃沈されてしまい……。』

「死 人 がいなけりやいい。敵の正体は？」
トランスフォーマー

『旗艦らしきものの艦橋に、手配書のガルバトロンを発見しました！推測ですが、艦隊の艦自体もトランスフォーマーでは無いかと。』

やつぱりガルバトロンになつてやがったか。続いてホットスポットが送つて来た写真から、艦の形がわかった。やつぱりサイクロナス型1隻と、残りはスウィープ型だった。ガルバトロンの奴は、サイクロナス型に乗つてやがる。……元になったのは、インセクトロンあたりか？ネオジエットロンあたりもありそうだな。あのとき手酷く叩いたからなあ。

「敵艦隊の位置は！」

『天の南極方向に500光秒です！座標はS—38522—TT—15236！』

「全員に召集をかける！だが、これが陽動の可能性もある！スカイファイアーとコンバッティコン、ルナクローバーはセイバートロン星で待機！俺とサンダークラッカー、シックスショット、プロテクティコンで出撃するぞ！」

『了解です！』

俺は留守番でちよつと不満そうなルナクローバーに、声を掛ける。

「俺が居ねえ間、セイバートロン星頼んだぞ？」

「は、はいっ！まかせてよね♪」

俺はルナクローバーの頭を撫でてやる。そして俺たちは、中央指令室に走った。

超空間ゲートを潜り抜け、俺、サンダークラッカー、シックスショット、そして合体済みのガーディアンは何も無い宇宙空間へと躍り出た。俺とサンダークラッカー、シックスショットはすかさず人型形態へ変形する。ロボットモードトランスフォーム

「太陽が足元方向にあるってえのは、ちよつと何だな。」

「宇宙にや上も下も無いからな。」

サンダークラッカーのぼやきに応えつつ、俺は前方を見遣る。そこには小さな光点が幾つも見えた。そして光点は、徐々に大きくなってくる。……サイクロナス型1隻と、スウィープス型がおそらくスカージ含め8隻の、計9隻だ。そしてサイクロナス型のハッチが開くと、ガルバトロンガトロンの奴が飛び出して来た。サイクロナス型もスウィープス型も、人型形態へ変ロボットモード トランスフォーム形。

そしてガルバトロンが憎しみを込めて俺の名を呼ぶ。

「スタースクリーム！3年ぶりだな……。」

「そうだな、元メガトロン。今はたしか……。ガルバトロンか？」

「き、貴様！何故その名を!?!」

泡を食うガルバトロンの様子に、俺はふつと失笑する。そして続けて言ってやった。

「そちらは航空参謀サイクロナス、そして親衛隊スウィープスとそのリーダー、スカージ。違うか？」

「「「「な!?!」」」」」

「ちよつとばかり、オカルト的な情報源があつてな。ふふん、どうしたんだ？3年も時間が掛かつて。」

ガルバトロンは、俺の言葉に怒声を放つ。

「黙れ、黙れ!!貴様のせいで、キックバックごときに反乱されて……!!」

「重量オーバーのアストロトレインから、放り捨てられでもしたのかい？」

「黙れえええええつ!! トランスフォーム!!」

「フォースチップ、イグニツション!! ヴァーテックス……キャノン! ブレイドお!!」

頭に血を上らせ^{のぼ}せてやったが、ガルバトロンは単純な火力^{パワー}では危険な物がある。注意が必要なのは間違いない。出し惜しみ無しで、いきなりイグニツションだ。

「フォースチップ……イグニツション! サンダーヘル!!」

「トランスフォーム!」

「うおおおつ!!」

サンダークラッカーがスワイープスのリーダー、スカージに狙いを定める。シックスショットは宇宙戦闘機モード^{トランスフォーム}に変形し、同じく変形したサイクロナスと壮絶な宇宙戦闘を繰り広げた。ガーディアンは残りのスワイープス連中を相手取っている。

そんな中、俺はガルバトロンと一騎打ちだ。奴^{ガルバトロントランスフォーム}の変形したSFガンが、壮絶な威

力のビームを放つ。『MOVIE』^{スタースクリーム}での『俺』を消滅させる威力を持つビームだ。以前の身体^{ボディ}より耐久力は上がっているが、それを試す気にはなれねえ。

だもんで、こつちも全力全開のビームをヴァーテックスキャノンで撃ち放った。双方の放ったビームは、互いの中央で激突し凄まじい大爆発を引き起こす。

「ぬわあああああ!?! ば、馬鹿なあつ!!」

「ぐお……。ち、これは流石にキツイな。」

ガルバトロンも俺も、爆発でけっこうなダメージを負った。奴がメガトロン時代にやった様に、爆発に紛れてあいつの後ろに回り込むなんてのはちよつと無理だった。双方のビームの威力が、あの時よりも高いのだ。……なので爆発の衝撃波をヴァーテックスブレイドで斬り裂いて、真正面からガルバトロン奴に斬りかかる。

「ぐおおっ!」

「く、切断しきれねえ!」

俺は飛び退いた。ガルバトロンめ、首を狙ったんだが……。肩部を護ってるブロック状の構造物が、思ったより頑丈過ぎた。いや、ヴァーテックスキヤノンを最大出力で撃った直後だったから、ヴァーテックスブレイドにエネルギーが回って無かったって事もあるんだが。爆発の衝撃波を斬った事もあるしな。

だがブレイドのエネルギーは徐々に回復し、切れ味も増して来る。ガルバトロンは結局、砲撃タイプのトランスフォーマーには違い無えんだ!接近戦なら俺が有利!!と思っただが……。そんなときに、邪魔が入る。

「が、ガルバトロン様!!ぐわあああああ!!」

「た、助けてうああああ!!」

「す、済まねえスタースクリーム!スカージとか言うのに逃げられた!」

「申し訳ござらん。拙者ともあろう者が、戦闘機同士の格闘戦に夢中になり……。」

いや、あえて俺とガルバトロンの間に割って入って、俺に翼を斬られたサイクロナスと違って、スカージは慌てふためいて逃げて来て、牽制で撃った腰部ビームキャノンに偶然あたってただだよね。でもまあ、その隙にガルバトロンは距離を取った。ちなみにガーディアンは、スウィープスどもを殴り飛ばし蹴飛ばして獅子奮迅の戦いを見せている。

「お、おのれスタースクリーム……くくく、だがなあ。わしがガルバトロンとなつて3年、ただ遊んでおつたと思つておるのか！」

「何っ!？」

こいつは……。

「キックバックを消滅させ、散り散りになったデストロン軍団を取り戻すのに、3年かかったわ!だがその甲斐があつたと言う物よ!貴様がおらんセイバートロン星……。今頃はコンボイの首を取り、マトリクスを手に入れておる頃合いだて!

そのマトリクスを以て、あのユニクロンを従えれば!わしに……余に敵は無い!!」

「が、ガルバトロン様……。我々の主はユニクロン様……。それを従えるなど、不敬かと……。」

「黙れスカージ!今日のところは一先ず引き上げてやるわ。そのそつ首、次の機会まで

預けておくぞ！デストロン軍団、撤退！！」^{リトリート}

ガルバトロンは、右腕のビーム砲からビームを噴いて、その反動での高速機動で宇宙の彼方へ逃走する。サイクロナス、スカージ、スウィープも宇宙機へ変^{トランスフォーム}形し、一心不乱に逃げて行つた。俺、サンダークラッカー、シックスショットならビークルモードで何とか追いつけると思うが、ガーディアンは無理だろう。

「……あいつめ。俺がワンマンの組織なんてのを作るとでも思つてんのか。俺がちよこつと居ない程度で、どうにかなるNAILじゃねえよ。」

「けど、スカージとか言う奴……。技量はあるんだが、根性無えな。どうしようも無い奴だったぜ。」

「……。」

サンダークラッカー君。スカージは、^{MOVIE C}本来は君が改造されるはずだったのだよ。

セイバートロン星に帰還して、俺たちは報告を受けた。やはりサイバートロン自治区にメナゾール、デバスター、サウンドウェーブとコンドル、バスソー、ジャガー、オーバーキル、スラッグフェストのカセットロンども、アストロトレインとブリッツウイング、他多数の旧メガترون派、現ガルバトロン派兵士が現れたそうだ。

でもってオメガスプリーム、エアロボット合体戦士スペリオン、NAILから応援に

駆け付けたコンバツティコン合体闘士ブルーティカス、そしてサイバトロン戦士たちの活躍で、コンボイは傷一つ無く無事だったようだ。指揮官リィダーが居ねえガルバトロン派が、コンボイが居るサイバトロン軍団に勝てるって想定がまず甘いんだ。その上、NAIILからの応援部隊がいるんだしよ。

ちなみにスカイファイアーとかルナクローバーは、更に裏をかけた作戦が敵にあった場合のため、NAIIL防衛軍と共に待機してたそうだ。そしてスカイファイアーは語る。

「けれど、これだけ警戒嚴重なのに隙を突いて、一般宇宙船に偽装したアストロトレインで自軍を送り込んで来たんだ。しかも本ガルバトロン人たちは、あくまで囷おとりなんだろう？ いや、たぶん奴の狙いは君だったって事もあるんだろうけれど。

本命のコンボイが持つマトリクス奪取の作戦は、送り込まれて来た兵力の質によっては成功していたよ。甘く見るのは危険だ。」

「……確かにな。奴の次の行動はどうなるだろうな……。」

いや、ガルバトロンよりも懸念は……。ガルバトロンの失敗に、痺れを切らしたユニクロンが強硬策に出て来る可能性もある。その場合の、ガルバトロンの役割はどうなる？ ユニクロン、奴はいつ出て来る？

俺はとりあえず、対宙監視体制の強化を命じると、そのまま中央指令室の司令席に座

り込み、深く考え込んだのだった。

第19話：ガルバトロンのあがきと

セイバートロン星周辺は、俺の号令できつちり対宙監視体制を強化していた。地球周辺もまた、それに準ずる対宙監視体制は敷いていたんだが……。万全はあつても、完璧と言う物は無いと思ひ知らされた。

何があつたかと言うと、地球のサイバートロン大使館、旧サイバートロン基地に勤務していたスパイクと言う男がいる。うん、G1のTVシリーズでサイバートロンに協力し、素晴らしい活躍を見せたスパイク少年の成長した姿だ。その彼と、同じくサイバートロン協力者であつたカーリーと言う女性の間に生まれた子供が、ダニエル少年である。

このダニエル少年、実は拉致されたんだ。うん。コンボイから直々に、搜索の協力依頼がNAILにまで来たんだよな。赤組連中が多少騒いだが、ダニエルの命には代えられないと、デストロン自治区代表、オクトーン総帥にまで依頼が行つたらしい。

ちなみに経緯はこうだ。ダニエルがホットロディマスと共に魚釣りを楽しんでたところに、ジャガーとオーバークルにスラッグフェストと言つたカセットロンどもが現れたんだ。ホットロディマスはそいつらと交戦しつつダニエルを逃がしたんだが、隠れていたコンドルとバズソーがダニエルを拉致。

ホットロディマスは負傷したまま、ダニエルを拉致したコンドルとバズソーを追って行き、そのまんま行方不明。サイバトロン大使館に居たチャー、スプラング、アーシー、ブラーの4人もまた、ホットロディマスとダニエルを探しに出て、その足取りが消えた。「どう思う？ スカイファイアー、サンダークラッカー、ルナクローバー。」

「わたしはおそらく……。コンボイの性格からして、何を置いても人質の命優先だろうね。そこを突いて、ダニエル少年とマトリクスの交換を言い出すんじゃないかね。」

「俺もそう思うぜ。だがそれを許せば……。メガ、いやガルバトロンはマトリクスさえ手に入ったら、人質を素直に返すどころか……。」

「ですよー。人質を返すぞとか言ってコンボイに放り投げて、慌てて受け止めようとしたところを両者諸共にビームで一撃！ とか。」

「ルナクローバー……。」

いや、その意見つつうか考察は正しいとは思うが。言い方考えようぜ。ガルバトロン 奴 だったらそのぐらいの事は、やりかねんだろうな。

「さて、そうなる俺たちNAIILの動きだが……。今シックスショットとその配下たちが、四方八方手を尽くしてガルバトロン派の動きを探っている。更にホットスポットたちプロテクティコンの指揮下で、全天をくまなく走査してユニクロンの影を追い求めている。」

「オンスロートたちコンバツティコンは、大至急で完成間際の対惑星破壊兵器群の仕上げと、既に完成している兵器の調整を行っているよ。」

「了解だ。デストロン自治区の連中は？」

「最初は乗り気じゃ無かったみたいだが、オクトーン総帥が熱弁をふるったらしいぜ。曰く、『サイバトロンの自分たちの力量を見せつける機会だ』^{チャンス}ってな。それで、やる気になつたらしい。」

「カセットロンとかの諜報要員を旧メガトロニ派、現ガルバトロニ派に持つていかれたんで、^{トランスフォーマー}個々人の伝手を使って情報収集してるみたいですよ。なんかリフレクター辺りが軽視されてて、それで不満を持つてるみたいで。」

ハイパードライブとかストームクラウドとかが接触して、情報もらってるみたいですねー。リフレクターはその情報を流す事で、オクトーン総帥側に寝返りたいみたいですよー。」

NAIILにそれが知られてるのは、まあシックスショットの構築した諜報網の成果だ。あいつの参入は、NAIILにとつて凄まじく大きな意味があったと言える。

「ふむ……。今の所、やれる事はやった、って感じか。」

「そうだね。後は……。おっと。」

スカイファイアーが何か言い掛けたとき、通信装置が呼び出し音を立てた。俺は急ぎ

それに取りつくと、スイッチを入れた。壁の画面スクリーンに、1人のトランスフォーマーが大寫しになる。

「スペースパンチ！」

『こちらスペースパンチ、リーダー・スタースクリーム、お久しぶりです。』

こいつはダブルスパイとか役職名がついてたが、実際の所普通のスパイだ。だって、本物のダブルスパイと違ってこつちの情報を敵側に流したりしてねえもんな。ちなみにシックスシヨットの配下としてスカウトした隠密部隊の1人で、その中でも最優の腕利きだ。

ある意味で3つの形態トランスフォームに変形変形変できるトリプルチェンジャーであり、スペースパンチとしての人型形態ロボットモード、自動車形態カーモード、さらに決め手と言えるデストロン兵士としての人型形態モード、『カウンターパンチ』と言う姿を持っている。こいつは何時も、カウンターパンチの姿でガルバトロン派に潜り込み、情報を収集してくれているのだ。その頑張りには、正直頭が下がる。

「急な連絡、何事だ？あまり頻繁にこちらに連絡を取ると、やばいだろう。」

『実は……。』

そうして明かされたスペースパンチの報告は、確かに重要な案件だった。本来ならコンボイとも連携を取りたいところだが、時間が無え。既にコンボイは『現地』に立出し

てるらしいしな。

「そうか、何時もご苦労スペースパンチ。お前のおかげで、助かっている。」

『いえ、それほどで……いけない！トランスフォーム！ではこれで！』

画面の向こうでスペースパンチがカウンターパンチに変形し、通信が切れた。おそらくガルバトロンの派の誰かが来たんだろう。よし、早速行動に……と思った時、再度通信装置の画面が明るくなる。

『こちらデストロン自治区政庁、総帥のオクトーン。NAIリーダー・スタースクリーム殿はおいでか？』

「おっと、オクトーン殿か。済まないが、こちらの調査で緊急の事態が明らかになったんだ。そちらが緊急でなければ、また次の機会に……。」

『いや、こちらも緊急事態だね。先にホットラインを通じてサイバトロンの連絡しようとしたんだが、既にコンボイ司令は出立してしまった後だとエリート・ワン長官代行が。』

もしかして、同じ用件か？俺とオクトーンは、急ぎ話の内容を確認し合う。その結果、オクトーンの話はあちらがリフレクター経由で得た情報に同じだった。その内容は、こちらがスペースパンチから教えられた情報と同じだ。

『そちらでも情報を掴んでいたのか。』

「……オクトーン殿、手伝う気はあるか？」

『そう、だな。上手く行けば、サイバトロン自治区に貸しが作れるな。』

「じゃあ、そつちに俺、いや、わたしの超空間ゲートで迎えに行く。」

『わかった、準備をして待っているよ。』

通信は切れた。さて、コンボイを救いに行くとするかね。

ここは惑星ジャンキオン。宇宙のガラクタ置き場だ。ゴミ捨て場と言ってもいいだろう。そこでガルバトロンが、左手でダニエル少年を捕まえて適当なスクラップに座っている。周囲にはサイクロナスと、スカージ率いるスウィープスが屯たむろしていた。ダニエル少年はガルバトロンに罵声を吐き、それにガルバトロンは左手の握力を強める事で答えた。ダニエル少年の悲鳴が響く。

「ダニエ……!!」

「おっと、今飛び出しちゃ、いかんぜ。」

「むぐ……!!?」

「今は我慢の時だ。」

ガルバトロン

奴に決定的な隙ができるのを待つんだ。……分かったら、頷け。」

俺は今まさに物陰から飛び出そうとしたホットロディマスの口を押さえて、耳元で言つてやった。ホットロディマスは、しばし考え込んだが、頷く。俺はこいつの口を放

してやった。

「……おまえは、スタースクリーム。」

「正解。」

「なんでお前がここに……。」

「お前からからすりや、俺は『敵の敵』だ。だからだ。……もう喋るな。奴ガルバトロンに見つかる。」

そして俺たちは待ち続ける。そこへ小型の宇宙船が着陸し、中からコンボイ、マイスター、アイアンハイド、グリムロック、バンブル、そして大人になったスパイクが出て来た。

「来たぞメガトロン、いやガルバトロンだったな！」

「ふははは、歓迎しようコンボイ。さて早速だが、お前の持つサイバトロンのマトリクスをわしに渡してはくれないかね？」

「何を馬鹿な！ 貴様になど……。」

「俺グリムロック、おまえ叩き潰し……。」

「おおっと、アイアンハイドにグリムロック。わしの手にダニエルが居るのを忘れては困るな。」

そしてガルバトロンの左手の握力が強められる。ダニエルの悲鳴が響いた。
「ダニエル!! やめろガルバトロン! 息子を放せ!」

「く、ひ、卑怯者め！」

「ふははは、さあコンボイ。どうするね？」

「だ、だめだよ司令官！僕のこととはどうだつてうわあああああ!!」

「余計な事を言つてはこまるなあダニエル。」

そしてコンボイは、無言で自分の胸板に手をかけて、それを開くとマトリクスを取り出す。

「いい子だ、コンボイ。それをこちらへ放つてもらおうか。さもないと人質が……。」

「うあああああ!!ぎやあああああ!!」

「だ、ダニエルうっ!!やめろガルバトロン!!」

「く……。」

コンボイが、マトリクスを放り投げた。全員の視線がソレに集まる。俺はホットロディマスの背中を叩いてやると、物陰から飛び出した。

「フォースチップ！イグニッション！ヴァーテックスキャノン……ブレイドお!!」

そして背中のチップスロットにフォースチップが叩き込まれ、ヴァーテックスキャノンとヴァーテックスブレイドが展開。その勢いで、俺はガルバトロンの左手首を斬り落とす。

「ぐわあっ!?わ、わしの手が、手があああ!!」

「そんなに欲しけりや、返してやるよガルバトロン！」

そう叫んだのは、俺と同時に飛び出してダニエルを握っていた左手首を捕まえた、ホットロディマスだ。ホットロディマスはダニエルを救出すると、ガルバトロンの左手を奴の顔目掛けて投げつける。ガルバトロンは自分の左掌で顔に目隠しをされてひっくり返った。

俺は俺で、空中でサイバトロンのマトリクスを掴まえると、それをコンボイに投げ返す。

「コンボイ！お大事のマトリクスだ！しっかりしまつとけ！」

「お前は！スタースクリーム！なんでここに！」

「ご挨拶だなアイアンハイド！ちよつと能力的に、他の面々だとこの役割は荷が重かつたんでな！」

「スタースクリーム、感謝しておこう！ガルバトロン、覚悟しろ！」

ここでサイクロナスが叫んだ。

「馬鹿め！万が一に備え、こちらも準備をしてあるのだ！出る！デストロン軍団！」

「「「うおおおおお!!」」」」

ガラクタの山の下から、デバスター、メナゾール、その他ガルバトロン派のデストロンが姿を現す。だがそうはいかん。俺は発信機のスイッチを入れ、『味方』に合図を送

る。果たしてガラクタの下から、頼もしい『味方』が出現した。

「今だ！テラートロン部隊、トランスフォーメーション!!オボミナスだ!!」

「「「ぐおおおおお!!」」」

「な、貴様オクトーン！裏切り者が！」

「ガルバトロン。悪いがね、あんたとはセイバートロン星のデストロンたちは縁を切ったんだ。あんたはもう、ただのテロリストなんだよ。」

メナゾールの背後から、オボミナスが組み付いて叩きつける。更にデバスターを相手にすべく、これもガラクタの下からプロテクティコン部隊が現れて合体した。

「プロテクティコン、ユナイト！ガーディアンだ！」

「「「おおー!!」」」

「ぐ、ぐあ……。ま、まずい……。」

「い、何時から隠れていたのだ！」

サイクロナスが慌てる。いや、お前らが部下を伏せるその1時間前かな。俺が超空間ゲートの連続使用で超特急で惑星ジャンキオンまで来たんだ。流石に疲れたし、エネルギーがそろそろ心許ない。

そしてガルバトロンが叫んだ。

「え、ええい！デカブツどもの相手は巨大兵士に任せて置け！他のやつらには構うな！」

き攣った声で叫ぶ。いや、叫ぼうとした。

「で、デストロン軍団！撤^{リトリ}た……。」

『……また失敗か。』

その時だ。強圧的な声が響いた。ガルバトロンは、その声に立ちすくむ。

『貴様には、ほとほと呆れ果てたぞ。』

「は、あ、うあ！」

『貴様などを用いたのが誤りであったわ。見せしめに、セイバートロン星を喰らってくれようぞ。』

「はああっ!!そ、それはおゆるしを！やめ、やめてください……ぎやあつ!？」

ガルバトロンの頭部が激しい放電を放つ。奴^{ガルバトロン}は、凄まじい苦痛に見舞われている

様だ。

『貴様がマトリクスを手に入れて、反乱を企てている事など、知らぬとも思ったか。』

「お、おゆるしを！もう、もう逆らいません！ぎやあああ！ぐあああ!!」

「い、いかん！デストロン軍団、撤^{リトリ}退だ!!」

「うわああ!!」

「ひえええ!!」

サイクロナスが代理で発した命令に従い、ガルバトロン派の面々は必死で飛び去って

行った。ただしリフレクターの3人以外。ガルバトロンは、サイクロナスが変^{トランスフォーム}形して乗せていった。

それっきり、あの強圧的な声は聞こえなくなる。俺はコンボイに叫んだ。

「今のあの声は、間違いない！ユニクロンだ！セイバートロン星が危ない！」

「うむ！急いで帰るぞ！」

「おい、エネルゴンはあるか！あつたら寄越せ！超空間ゲートを連続で開くには、残りエネルギーが心許ねえんだ！なんだつたら代金はNAILにつけとけ！」

バンブルが慌ててエネルゴンキューブを持って来る。俺はそれを一気に飲み干した。ちよつと酩酊^{めいてい}しそうだったが、気合いでそれを抑え込む。コンボイたちはスパイクとダ

ニエルの親子を連れて自分たちの宇宙船に乗り込んだ。ついでにリフレクター3人も。

アイアンハイドが叫ぶ。

「なんでこいつらが!？」

「そいつらが、ガルバトロン裏切つて情報をくれたから、俺たちの助けが間に合ったんだ

よー！」

「……。」

ぐうの音も出ない様だ。ま、俺たちとしてはスペースパンチの事は教えるわけに行かないからな。そして俺は号令をかけた。

「いくぞ手前てめえら！つて、お前らも来るのか!？」

「当然アルよ。友の友は、皆、友ネ。」

「義理がてえこつて！」

俺は超空間ゲートを開く。そしてそれに俺、トランスフォーム変形したオクトーン、合体したままのオボミナスとガーディアン、満員どころか定員オーバーのサイバトロン宇宙船、そしてジャンキオンのロケットが、一気に突っ込んだ。くそ、こんなに沢山を連れてけるだけの大規模ゲート開くのは、つれえぜ。エネルギー、間に合えばいいが。

俺たちは、セイバートロン星目指して飛んだ。

第20話：ユニクロン襲来

なんとか間に合った。俺たちがセイバートロン星に到着した時は、太陽系天の南極方向から迫りくるユニクロンに、セイバートロン星と地球の周辺に配置された対惑星破壊兵器群が、その大火力をブツ放しているところだったんだ。

「おお！スタースクリームたちが帰ったぞ！」

「おかえりなさいコンボイ！」

「やった、オクトーン総帥だ！」

「助かった！やっぱ俺たちにや総帥代理はキチいぜ。」

俺たちはNAIILの政庁であり、中央軍事基地でもあるNAIIL中央研究所へと入る。今ここでは、スカイファイアーやエリート・ワン、デストロン自治区のNo.2とNo.3であるラナマック、ラナバウトが協力して指揮を執っていた。俺は指揮を引き継ぐと、声を張り上げる。

「戦況は?！」

「まずいね。これを見てくれ。」

スカイファイアーが録画を壁面のスクリーンに出す。対惑星兵器のうち、巨大マスト

ライバー砲や、超大型反粒子ビーム砲は効果を上げていた。一時的に。

いや、一時的なんだよ。ユニクロン表面に着弾したそれらは、凄まじい破壊力を見せた。だけどユニクロンの奴、傷口が青色の光に包まれたかと思ったら、ウニヨウニヨと傷口が蠢うごめいて凄いい勢いで再生しやがった。

「これは……。む？反物質弾頭を敵の体内に放り込む、スペースブリッジ砲は？」

「駄目なんだ。照準が敵の体内に、どうしても合わない。」

「どうやら敵の体内は、なんらかの空間歪曲場が働いている模様だ、ボス。おそらくは空間転移の類を阻害する目的の物が……。」

オンスロートが残念そうに言った。俺は数瞬考えて応える。

「だったら敵表面に照準を合わせて、スペースブリッジ砲を叩き込んでやれ。こうなったら、奴のエネルギーが尽きるか、こっちの弾が尽きるかの根競べ勝負だ。再生力が働かなくなるまで、全火力を叩き付けろ。」

「「「了解!!」「」」」

「それと地球の月は？」

「角度が悪くて、奴がセイバートロン星に到達するまでの間に1発しか撃てねえそうだ。」

サンダークラッカーが答える。地球の月、とは俺たちトランスフォーマーの技術を

もって地球の月の直径分を掘り進み、大穴を開けて完成させた超々々長砲身の陽電子ライフルだ。砲口は地球の月の裏側にあり、電磁界の操作によってある程度の曲射が可能となっている。ただし威力は絶大ながら、射程距離と射角はそこまで自由が効かない。「そうか。撃てる間合いに入ったら、あつちのタイミングで射撃してもらうように伝えてくれ。」

「了解だ。」

「お疲れでしょう、スタースクリーム様！ エネルゴンお持ちしました！」

「サンキュ、ルナクローバー。」

いや、マジで助かったわ。実を言うと、超空間ゲート連続で作ったから、エネルギー枯渇寸前、腹ペコだったんだよな。だが、もしかしたらまた、似たような事やらにやらんかも知れん。

「……これは最後の手段なんだが。コンボイ、オクトーン、お前らも聞いてくれ。」

「何だ？ スタースクリーム。」

「スタースクリーム殿、どんな考えかね？」

「ユニクロンがセイバートロン星の近くまでたどり着いちゃまった場合の話だ。実は

……。」

いや、『わたしに良い考えがある！』って言ったわけじゃねえが。説明を聞いたお前

ら、なんでそんな驚愕した顔すんだよ。

「……力技ね。」

「そうだな、エリータ・ワン。だが確かに、最後の手段だな。しかしそれでも、サイバトロン軍団としては異存はない。」

「……いいだろう。デストロン自治区の者達は、その作戦に乗ろう。愉快な案では無いですが、スタースクリーム殿。」

俺は頷いた。

「そうだろう？ んじゃあ作戦参加者を選ばにやならんな。志願者を募るのは、やっぱり駄目だよなあ……。」

「何故かね？ スタースクリーム殿。」

「いや、あれだと作戦参加の責任がよ、個々人にあるじゃねえか。大昔の戦史だとよ、志願をしないと卑怯者だーみたいな雰囲気を作り上げといて、志願を強制する上役とか居たらしいぜ。しかも自殺的な作戦によ。」

だから俺は、志願者は募らねえ。あくまで作戦目的に沿って、能力的な面から選んで、命令して参加させる。責任はあくまで、俺にあるんだ。第一、自殺的な作戦であるつもりは全く無いからな。目標は、全員生還の上でユニクロン撃破だ！」

「「「「「おおー！！」」」」」

全員が、俺の叫びに唱和した。

そしてついに、ユニクロンがセイバートロン星の間近までやって来やがった。だけど地球の月から発射された陽電子流による一撃は、さすがのユニクロンでもこたええたらしい。まん丸い胴体に開いた大穴は、それでも青の光に包まれて自己修復しちまったが、明らかにその速度は遅かった。奴はエネルギーを補給しようとも言うのか、まずセイバートロン星の4つある金属の月のうち1つに噛り付きやがったんだ。

そしてスカイファイアーの命令で、ブラックホール炉衛星のうち1つ、人工ブラックホールを使ったうちの1基が惑星モードのユニクロンの背中に突っ込んで暴走を始める。重力バリアが破壊されて、ブラックホールがユニクロンの背後に突っ込んで、そこで炸裂したんだ。ユニクロンは、叫んだ。そらそうだろう。1個のブラックホールが、自分の脾腹で蒸散し、その質量をエネルギーに変えて炸裂したからな。

いや、ブラックホールってのは誤解されてるところもあるけれど、充分にその質量が小さいと、あつと言う間に蒸散してエネルギーを吐き出して消滅するんだわ、これが。ブラックホール炉では、送り込んでブラックホールを維持するための物質の量と、蒸散して吐き出されるエネルギーの量がつり合い取れる様に調整してらるんだけどな。

『お、おのれえええええ!!』

おお、怒った怒った。奴は惑星サイズの人型ロボットに変形しやがった。いや、すげえ迫力だ。けれど背中部分に、でかい穴が開いてやがる。傷口は青い光に包まれて修復しつつあるが……。

「行くぞ！ N A I L 防衛軍突入部隊！」

「続け！ サイバトロン戦士アターーーック！」

「デストロン軍団！ 遅れるな！」

俺が開いた超空間ゲートを通って、俺たちユニクロン内部突入部隊が奇襲をかけたんだ。ちなみにゲートの出口は、奴の背中の傷口近くに開かれている。奴の体内には直接空間転移の類は効かねえって言ってもだ。奴の外側ぎりぎりになら、超空間ゲートを開けるんだよ！

おまけに、無人操縦のジャンキオンロケットとか無人操縦のサイバトロン宇宙船とか無人操縦のデストロン宇宙船とか無人操縦の N A I L 宇宙船とかを真正面から突っ込ませて、陽動を図っている。ユニクロンはその両目から破壊光線を発し、次々に宇宙船を撃破して行った。ちなみにジャンキオンロケットは、後で N A I L で弁償する事になってる。

そして俺たちは、ユニクロン内部へと突入したんだ。そう、俺たちの作戦つてのは、ユニクロンを内部から破壊する事なんだ。俺たちが突入した数十秒後、俺たちの背後で傷

口が再生、出口は無くなった。

俺たちは、二手に分かれた。コンボイとオクトーン率いる、ユニクロン動力攻撃隊と、俺の率いるユニクロン頭脳攻撃隊だ。オクトーンは元々補給兵の役職だった事もあり、エネルゴンの流れには鼻が利く。体内の防衛システムは、オメガスプリーム、エアーパーソナル合体戦士スペリオン、テラートロン合体兵士オボミナスの3体の巨大戦士を想定していなかった模様で、奴らはビーム砲も電撃放射も物ともせず突き進んで行った。

一方の俺たちは、コンバッティコン合体闘士ブルーティカスとプロテクティコン合体闘士ガーディアンを前面に立てて、全力でユニクロン頭部を目指す。急がねえとならねえ。はやいとこ決着をつけねえと、外で戦ってる連中がやべえ。俺が超空間ゲートを作らんといかんので、スカイファイアーに全体指揮を委ねて来たが……。

「スタースクリーム！あれを見てくれ！」

「どうしたサンダークラッカー……!!」

ただっ広い部屋に出た。距離的には、既に頭部に入ってるはずだ。そしてそこに居たのは……。

「……ガルバトロン!!」

「う……あああ……。コロス、スタースクリームもコンボイも……。」

「な、何アレ、キモっ……。」

いやルナクローバー、それは同意だが。やはりここに居やがったかガルバトロン！けど様子が変だ。全身にエネルギーのケーブルが巻き付いている……。？……。！！こいつSFガンにトランスフォーム変形しやがった!?

「ガーディアン！フォースバリアーを！」

「了解！フォース・バリアー!!」

「が、がああああああつ!!」

ビギユウウン!!ガシャーン!!

「うあああつ!?!」

「ガーディアン!!」

「だ、大丈夫です！全力のフォースバリアーのおかげで……。ですが、一撃でわたしのフォースバリアーが……。」

馬鹿な！いくらなんでもガーディアンのフォースバリアーが一撃で……。!?いや、現実を見る、俺！いくら理不尽でも、現実にある事は現実なんだ！……。そうか！

「ブルーティカス！ガーディアン！分離しろ!!合体したままだと、奴の火力の餌食だ！機動力でかわ躲せ！」

「了解！セパレート!!」

「そうか、奴め……。ユニクロンそのものから、エネルギーを供給されて、あれだけの威力の砲撃を……。身体から黒煙を噴き出してやがるが、それでも奴は2射目のエネルギー充填を始めた。」

「へ、どうしたね破壊大帝。そんな様子で、俺に命中させられるとでも?」

「ス、ター……。スクリーム……。こ、ろ、す……。!!」

「ボス!挑発なんてして、ど……。!」

「お前らは『上』を指指していけ!サンダークラッカー、こいつらの指揮を任せる!

ほら、こつちだこつち!お頭くちむがショートしてやがんのか!?は・か・い・た・い・て・い・

さ・ま?」

「ぐあああああ!!」

ビギユウウン!!ドツゴオオオアアオオオアアン!!

俺はからくもガルバトロンのビームを躲かわす。そのビームは、ほぼ真上に向けて放たれたため、天井に大穴を開けた。ユニクロンの叫びが聞こえる。

『ぐあああああ!?!ば、ばかものがあああ!!』

「へっ、ピングゴ。サンダークラッカー!ルナクローバー!俺がこの脳足ガルバトロンのりんを引き付けて置くから、さくつとユニクロンの脳室行って、ぶつちめて来い!」

「りよ、了解だスタースクリーム!トランスフォーム!NAIL防衛軍、アターック!!」

「「「「「おおーっ!!」」」」」

ガルバトロン

脳足りんが天井に開けた大穴から、皆が上の階ユニクロンのあたま目指して飛翔する。しかしルナクローバーは戸惑っていた。

「す、スタースクリーム様!」

「ルナクローバー、お前も行け! なあに、殺やられやしねえよ! つてえか、殺やられても幽霊になつてでも、俺は皆の所へ戻るぜ! だから、『上』で待つてやがれ!」

「!!」

トランスフォーム

セイバートロンへりに変形して、ルナクローバーはサンダークラッカーの後を追った。俺はガルバトロンに相対あいたいして言う。

「さあて、これで1対1だ。」

「オ、ノ、レ……。スタースク……。リイイイイイムウウウウツ!!」

「フォースチップ、イグニッション! ヴァーテックスキヤノン! ブラレイドおおお!!」

激闘が始まった。

さて、俺はボロボロになつていた。だが、ガルバトロンもまたズタボロになつていた。それらさうだろう。全部かわ躲していたとは言え、ユニクロンから直接エネルギー供給を受けて放たれるビームだ。余波だけで、十分な破壊力がある。そしてガルバトロンも、そんな

無茶苦茶な威力のビームをぶつ放すのは、身体に悪そうだった。

お互いにクリーンヒットは1発も無い。それなのに、俺は全身煤^{すす}けて所々が放電して
るし。ガルバトロンは身体の節々から煙^{けむり}噴いて今にも機能停止しそうだし。と言うか、
さつきユニクロンの声が響いた。『そこでこれ以上撃つでないわ！格闘戦で仕留めろ
！』だそうだ。頭の中で、あれだけの威力のビーム撃たれるのはキビシいか、ユニクロ
ンも。

「ぐうう……。があああああああ!!」

「ごんのウスノロめ！」

こいつは動きは鈍い。なんたって、身体中にエネルギー供給用のエネルギーケーブル
が巻き付いてるからな。だけどそれによって供給される莫大なエネルギーで、こいつの
パワーはとんでもない物になってる。捕まっちゃったら、ヤバい。そのまま叩き潰され
るのは見えてる。

それだけじゃない。俺は何度かヴァーテックスキャノン^{スキャノン}を命中させてはいるんだが、
こいつの身体に巻きついたエネルギーケーブルがエネルギー系の攻撃からこいつを
護っている。ほとんど効果が無えんだ。ガルバトロンはボロけちやいるし、煙を噴いて
もいるが、しかし活動は続けている。ちよつとこのままだと、ジリ貧か？

「く、だがなあ！手前^{てまえ}なんぞに、殺^やられてらんねえんだよお!!」

「わしは……。敗れたか……。」

「ああ。」

「だが、一度や二度の敗北で、わしは諦めはせず……。いつか、いつか宇宙をこの手に……。」

バチバチバチツ！と奴の前頭部で、火花が散る。そして奴は哄笑した。

「ふははは、はははははははははは!!がはははははははははは!!わしは、余は全宇宙の帝王!!破壊大帝ガルバトロン!!ふはははははははははは!!はははははははは!!はははは……。」

そして笑声は止まった。奴の眼から光が消える。俺は立ち上がった。……正気に戻ったか、と一瞬思ったが。結局は狂^{ガルバトロン}気から逃れる事はできなかつたか。

そして俺は変^{トランスフォーム}形して飛翔^とんだ。万が一にも蘇る事の無い様に、死体を始末すべきだったと思つたのは、かなり経つてからの事だつた。

俺がユニクロンの脳室にたどり着いたのと、ユニクロンの電子頭脳が俺を除く全員の砲撃で破壊されるのは、同時だつたらしい。ユニクロンの『や、やめろおおおお!!』と言う断末魔っぽい叫びが聞こえて来たから、間違いないだろう。

「おお、ボス！」

「酷い損傷!!スタースクリーム様、大丈夫?!」

「いや、流石にユニクロンのエネルギー借りたガルバトロン相手は、ちよつとだけキツかった。」

軽口を叩き、俺は周囲を見回した。そして俺は叫ぶ。

「全員！撃て撃て撃てー！！ユニクロンの電子頭脳の、再生を許すなあーっ！！」

「な、なん……!!?」

「げげっ！ほ、ほんとに……。う、撃て撃て撃てー！」

ユニクロンの電子頭脳は、少しずつだが、本当にゆっくりと、青い光に包まれて再生を始めていた。だがその速度は遅い。流石に他の部分ほど簡単に再生はできない様だ
が……!!

「……!?!」

その時、俺は見つけた。破壊された電子頭脳の中枢に、輝く光球があるのを見たんだ。
あれは……まさか！

「フォースチップ！イグニッション！ヴァーテックスキャノン！ブレイドおお!!」

「スタースクリーム様!!」

「スタースクリーム!!」

「ボス！」

「リーダー！」

「お前らは、撃ちまくってろ！ あれは、もしや、まさか!!」

俺はその光球に、ヴァーテックスブレイドの切っ先を突き立てた。そして周辺から、ユニクロンの脳内で生成される妨害物質、アンチ・エレクトロンが俺めがけて降り注ぐ。俺の身体は、勝手に中途半端な変^{トランスフォーム}形を繰り返し始めた。く、力が抜ける！ くそ、逃がしてなるか！

「ボス!!」

「近寄るな！ こいつはアンチ・エレクトロンだ！ それよりか、俺がこいつを潰し終わるまで、ユニクロンの電子頭脳を再生させるんじやねえぞ！ こいつは阿呆みたいなパワーは持っていないも、実体の頭脳が無けりやあ『考えて』行動する事あできん！ 本能的な行動しかできねえんだ！」

俺は光球に突き立てたヴァーテックスブレイドに、必死にエネルギーを送り込む。このスパークに。そう、こいつはユニクロンのスパークだ。間違いない。これを潰しちまえば……。潰しちまう事ができれば……!!

そして俺は、不思議な空間にいた。目の前に、『あらゆる時空の監視役』であるベクタープライムが立っている。

『(ハハ)は……。』

『君は、見事に使命を果たしてくれた。ユニクロンを倒すと言う。』

『そうか……。俺は、死んだのか？』

『ああ……。ユニクロンのスパークと、相打ちになつてね。』

俺は肩を竦めた。

『それはそれで、仕方あんめえよ。』

『随分と、あつさりしているんだね？』

『まあな。オールスパークは、どっちだ？そこへ去らにや、いかんのだろうか？』

『ああ、それはあつちの方だよ。』

『サンキュ……。』

そして俺はそちらを向いた。

そして『ソイツ』の口から、断末魔の苦悶が漏れる。

『ど、どうし……。て……。わか……。つた。』

『ベクタープライムは、右利きだ。手前^{てめえ}ベクターソードを左手で構えてたしな。あと

……。』

背後に突き出した、ヴァーテックスブレイドが『偽』ベクタープライムの腹を貫いている。今しも俺に斬りかかろうとしていたそいつの姿は、ゆっくりと俺と同サイズのユ

ニクロンに変化して行った。

『あとは、ベクタープライムならホラ、そこにいるからな。』

『な……!!』

俺が指差した先には、半透明のベクタープライムが、微笑みを浮かべていた。

『お、お、オ、ノ、レエエエえええええつ!!』

その瞬間、俺は現実空間に引き戻され、ユニクロンのスパークが爆発した衝撃で吹き飛ばされていた。

そして俺は今、アルファートリン、ラチエット、ファーストエイドの3人がかりで、徹底的な治療を受けている。ルナクローパーがかいがいがいしく世話を焼いてくれるのが、何と言うかこそばゆい。

「もう退院しても、かまわんのじゃないか?」

「そうは行かぬよ。かなりの間、アンチ・エレクトロン漬づけになっておったのじゃぞ。」

「どんな後遺症があるか、わかったもんじゃない。」

「そうですね、リーダー。きちんと徹底的に調べられてくださいな。」

そんな事言ってもよ。ユニクロン撃破の祝典もあるし。仕事が沢山溜まってるんだけどよ。

うん、ユニクロンは撃破された。表向きは、オクトーンの案内でコンボイたちが主力になってエネルギー炉とエネルギー貯蔵庫を破壊、それと同時に俺たちが頭脳を破壊した事で、ユニクロンの再生が止まって、大爆発を起こした事になってる。

コンボイたちは全員オメガスプリームが変形したロケットで脱出。俺たちは俺たちで、合体したブルーテイカスとガーディアンに抱えられて、崩壊する頭部から逃げおさせた。ちなみにユニクロンのスパークを俺が潰したのは、俺に手柄が集まり過ぎるから、ナイシヨになってる。

うん、ユニクロン退治は、皆の手柄だ。うん。ちなみに祝典は、ヒーローたる俺が退院するまで待つらしい。いや、ヒーローは柄じやないんだが。

そして爺さんアルファートリン、ラチエツト、ファーストエイドが去って、ルナクローバーが買い物に出かけた今、俺はある事を試している。俺は右腕、肘から先に精神を集中させてみた。

……右腕が、肘から先だけデカくなった。俺は急ぎ、元の大きさまで縮める。

「悪神ユニクロンと善神プライマスって、存在のマイナスとプラスの違いと現実世界での機体の違いぐらいで、ほぼ等しいんだっけか……。」

トランスフォーマー・ギャラクシーフォースで、GFスタスク……スーパースタースクリームが得た能力。『プライマスのスパーク』で得られたパワーで、身体を全体的にと

か部分的にとか巨大化させる能力。……『ユニクロンのスパーク』でも、同じ事できてもおかしか無えよなあ。このG1世界線には、プライマス居なさそうだけだよ。

おい、ベクタープライム。これもお前が仕組んだ事か？俺は深く、溜息を吐いた。

第21話：湧き上がるパワー

西暦2006年。今俺の眼前には、平和の星アセニアの風景が広がっている。ここで、サイバトロン発案によるオリンピックピック大会が開かれているのだ。無論、俺たちNAILも協賛し、デストロン自治区の連中も賛同し全面協力している。……2010年になって無えのに『2010』的なストーリーが始まってるけど。この世界は、どうやら日本版ストーリーと海外版ストーリーの折衷せっちゆうみたいだな。

ちなみに警備については、デストロン傭兵が格安で請け負ってくれた。オクトーン総帥の外交手腕は、なかなかの物だ。サイバトロンのシティーコマンドー、ウルトラマグナスが叫ぶ。

「諸君、ここであのユニクロン戦争における3人のヒーローを紹介しよう！最終局面で各々の軍勢を率い、先頭に立って内部よりユニクロンを破壊したサイバトロン総司令官コンボイ！デストロン総帥オクトーン！NAILリーダーのスタースクリーム！」

「慣れねえなあ……。」

「昔のお前、いや君は、こう言うのを望んでいたのではなかったか？」

「400万年前とは、ずいぶん変わったね。」

「昔の事は言いっこなし。今思うと、顔から火が出そうだ。」

そして大会が始まった。コンボイ、俺、オクトーンが軽めの短い演説を行い、競技がスタートする。俺たちは、VIP席から観覧していた。と、俺に通信が入る。

『リーダー・スタースクリーム殿！』

「シックスショットか。どうだ？」

『おっしゃる通りに、テロを企む^{たくら}タチの悪い傭兵宇宙人を発見！取り押さえ、デストロン傭兵の警備に引き渡してござれば。』

「いつも済まねえな。ただ、そいつだけとは限らねえ。大変かも知れんが、引き続き陰からの警戒を頼んだ。」

『はっ！おまかせあれ！』

オクトーンが申し訳なさそうに言う。

「すまないね、スタースクリーム殿。今の我々は、^{デストロン}リフレクターたちが頑張ってくれてはいるんだが、やはりからめ手に弱くてね。」

「なあに、いいって事よ。それよりは、真正面からの警備をしつかりしてくれりや充分や。」

「だがスタースクリーム。シックスショットが『おっしゃる通りに』と言っていたと言う事は、やはり……。」

コンボイの問いに、俺は頷く。

「まず十中八九、クインテツサ星人の仕業だろう。全ての悪業を、あいつらのせいにするのは何だが、今回は間違いねえと思う。」

「クインテツサ星人か……。我々すら知らない、アルファートリン様時代の超ロボット生命体たちの仇敵……。」

「そんな過去の遺物に、現在とそして未来を台無しにされるわけにはいかないね。」

俺たち3人は、頷き合う。各陣営のトップ3人……。あ、いやコンボイは今の所は軍事司令官であって、政治トップはエリータ・ワンなんだが。だけど最近は事実上、徐々にエリータ・ワンから権限を委譲されているらしいんだな、これが。

本人としては、まだガルバトン派生き残りが蠢動している事と、クインテツサ星人の魔の手が迫っていると俺が警告した事で、軍務に専念したがっていたんだが。なまじユニクロン戦争でヒーローになっちまったせいで、政治面でもトップに立たざるを得なくなっただけらしい。

ま、何にせよ各陣営のトップ3人の意思統一は、非公式ながら成なされた。デストロンとサイバトロンの下に居る面々の統率とか説得とかは、こコンボイとエエクトクンンで、ここいつらに丸投げだ。俺だつて、NAIIL内の事で色々忙しいんでえ！あ。ホットロホデイトマススが3,000m障害で1位を取った。さすがイカレ暴走族。

オリンピック大会終了後、セイバートロン星に戻った後の事だ。急にコンボイから連絡があった。惑星ジャールを監視していた、カセットボット部隊からの緊急通信で、ガルバトロン派連中の生き残りが惑星ジャールから姿を消したとの事だ。

いや、実を言えばその後俺も、スペースパンチからの非常暗号通信で、もう少し詳しい事知ったんだけどな。クインテツサ星人が大量のエネルギーキューブと引き換えに、兵力としてガルバトロン派残党を雇ったって。

本当にスペースパンチには、頭が下がる。あんなに無私の忠誠心を向けてくれるなんてな。奴は困窮するガルバトロン派に潜り込んだまま、今しも飢え死にしような状況下で、ガルバトロン派から疑われないためにNAIおれたちLからのエネルギー供給すら拒んで諜報活動を続けてくれてるんだ。どうしたら、奴に報いる事ができるのか。

スカイファイアーに相談したら、「NAILを、道を誤らせずにきちんと統率していく事だろうね。」だそうさ。そうだな、スペースパンチも、その上官シックスショットも、俺たちNAILに賭けてくれたんだ。その賭け、大当たりにしてみせなくちゃな。

さて、まずはコンボイとオクトーンに、この情報を教えておかなくちやいかん。スペースパンチの事は教えられなくても、そのもたらした情報は教えて共有しておくべきだ。意味もなく隠しておいて、信頼を損なっちゃあいカン。

俺、コンボイ&エリート・ワン、オクトーンはホットラインを通じて3陣営のリーダー会議を開いた。そして皆が、近いうちに予想される、クインテッサ星人とガルバトロン派残党の襲撃に備えるべきだと言う事で合意したんだ。

『予想される攻撃手段は何だと思うかね。』

「たとえば事故を起こしたシャトルを装って、緊急着陸許可をもぎ取ってそいつが重要施設に突っ込むテロを起こし、その際に攻撃を仕掛けて来るとかはどうだ？」

『ありそうな手だね、スタースクリーム殿。』

「まあ、あくまで一手段だがな。要はテロを起こし、それによって隙を作って攻めて来るって事だが。そしてクインテッサ星人と組んでるって事あ、もしかしたらセイバートロン星地下に存在するかも知れない、俺たちトランスフォーマーを瞬間凍結しちまう瞬間凍結装置を狙ってるかも知れねえぞ。クインテッサ星人は、その事をデストロンにや言っつてねえだろうが。」

俺は『2010』のアニメで実際に行われた、デストロン軍団によるセイバートロン星襲撃作戦を語ってやる。コンボイ、オクトーンは頷いた。ちなみに、瞬間凍結装置については未だ発見されてない。セイバートロン星を平定した後、探して破棄するために必死になって探してたんだがな。仕方ねえから、探索が完了した領域エリアから地下は立ち入

り禁止にして、NAIIL防衛軍が警備してる。

その時だった。画面向こうから、爆音が響く。

『どうしたウルトラマグナス！』

『も、申し訳ありませんコンボイ司令官！サイバトロン自治区宇宙港に、エンジントラブルで着陸許可を求めて来たシャトルがあつて……！……！そいつが着陸せずにエネルギー貯蔵庫に突っ込んで大爆発を！』

『!!コンバッティコン！対宙監視レーダーだ！』

「了解ボス……なんだこの大艦隊は！と、突然セイバートロン星の至近距離に！なんで今まで発見できなかったんだ!!」

『すぐにテラートロン部隊に、出動命令を出すよ！』

その時、更に悪い知らせが飛び込んで来る。

「ボス！緊急の暗号通信です！」

「解説に回せ！」

暗号通信つて事は、相手は誰だかわかつてらあな。スペースパンチだ。奴がガルバトロン派残党の隙を見て、必死に送って来た通信だろう。そしてスィンドルが口籠くちどもる。

「あ、い、いえボス……。言つていいもんですかね。」

「通信中のサイバトロン自治区とデストロン自治区なら、かまわん！情報共有の方が大

事だ！」

「で、では！読み上げます！『クインテツサ星人は、ガルバトロンを再生、復活。地球とセイバートロン星に同時攻撃。』以上です！」

『『なんだつて!?!』』

画面向こうで、コンボイ、エリータ・ワン、オクトーンが叫んだ。……叫びてえのは、俺の方だ。こんなことなら、ガルバトロンの死体を破壊しておくんだったよ。まったく。

「コンボイ！地球の護りは?!」

『地球人の地球防衛軍との合意の下、セイバートロン星でベクターシグマの下で造り上げた、特製のプロトフォームをもとにスクランブルシティを建造しているのは知つての通りだ。だがスクランブルシティの最重要パーツの1つ、トランスフォーム・コグが、まだあちらに届いてない!』

『コンボイ司令！トランスフォーム・コグは今こセイバートロンせいちらにあるのかね?!』

『ああ、オクトーン総帥。つい先日完成したんで、送り届けようとした矢先だった。』

『スペースブリッジの使用許可を出そう！それで地球まで一気に送り届けるんだ!』

今、セイバートロン星にあるスペースブリッジは、建設中の物を除いてはデストロン自治区に移築されたデストロン本部基地の物だけだ。サイバトロン自治区やNAIL

領域にも、スペースブリッジ本体は建設中なのだが、まだ稼働はしていないのだ。単に、出口となる端末部分だけなら地球に幾つでもあるんだが、本体部分は流石にそう簡単には建設できない。

「コンボイ！ エアーボットもオメガスプリームも、流石に防衛戦力に必要なだから輸送任務に出せねえだろう！ スカイファイアーをこっちから出す！ トランスフォーム・コグをデストロン自治区まで運んでやる！」

『頼む！』

「こっちだつて地球人とは仲良くやっておきてえんだよ！ 気に病むな！ スカイファイアー、聞いてたな!？」

「ああ、今からサイバトロン自治区へ飛ぶよ。」

「任せたぞー！」

スカイファイアーは、トランスフォーム急ぎ変形してサイバトロン自治区へと飛ぶ。一方で俺は、コンバティコンとプロテクティコンを招集し、万が一にガルバトロン派がサイバトロン自治区以外を急襲した場合に備えて待機した。俺は超空間ゲートを開いて、急ぎ兵力を急派できるからな。

そして今、俺はNAIL中央研究所を襲つて来たメナゾール他少数に、ガーディアン

およびサンダークラッカーとNAIL防衛軍を充てて、ブルーティカスとルナクロバーを連れてサイバトロン自治区へと急いでいる。メナゾールは明らかに、NAILを一時的に抑えるための戦力だった。

いや、だって戦闘バカのメナゾールにはあまりに消極的な戦い方だったしな。更にサイバトロン自治区の戦場から、クロミアからの悲鳴のような救援要請が届いたんだよ。あの『赤い』ウーマンサイバトロンのクロミアが、信条を捨てて俺たちNAILに救援を求めたんだ。よっぼどの事だ。明らかに、敵の主力はあちらに集中されていたんだ。

俺たちが超空間ゲートを突っ切って現場に着いたときには、あまりの惨状に目を疑ったよ。

「アイアンハイド！おい、生きてるか!？」

「く、スター……スクリーム、か。何し……に、来たって……言いたいが、ぐはっ!」

「ち、酷えな。いい、もう喋るな!」

「く、ぐあ……。た、頼みたくは無いが……。た、頼むっ！北極点、でっ！コン……ボイ司令、がっ!!」

「わかった！喋るな！北極点だな!」

アイアンハイドだけじゃねえ。サイバトロン戦士が多数、重傷を負って倒れ伏してい

た。サイバトロンの戦力の一角を担う巨大戦士、オメガスプリームまでもが、だ。

「ブルーティカス！ルナクローバー！行くぞ！」

「了解ボス！」

「はい、スタースクリーム様！」

俺たちは再度超空間ゲートを突っ切る。そして見た物は……!!

「ぐおおおおおおあああ!!」

「うわああああああ!!」

「お、オボミナス!!」

「スペリオン、トランスフォーメーション！パワータイプ！」

オボミナスが投げ飛ばされ、叩きつけられて5体にバラけた瞬間だった。そしてその敵も、合体トランスフォーマーだ。ガルバトロン派にクインテツサ星人がついてると知ってたんだから、こいつが居る事は想定しておくべきだったぜ。

「巨重合体兵……プレダキング、か。くそ、ブルーティカス！濟まんが矢面に立ってくれ！コンボイ!!オクトーン!!」

「スタースクリーム!!」

俺はコンボイとオクトーンに叫んだ。

「コンボイ！スペリオンはパワータイプはやめさせろ！こつちの情報によればこいつの

パワーと防御力は桁が違う！パワーよりもアタックタイプで、わずかでも攻撃が通る様にするんだ！こっちのブルーティカスが盾になる！

オクトーン！テラートロンは再合体できるか!?できないなら、その他のガルバトロン派を狙わせるんだ！再合体できるなら、そっちもアタックタイプで攻撃させろ！」

「わかった！エアーボット、アタックタイプだ！」

「こっちもわかった！再合体はなんとかなりそうだ！」

そして俺は、プレダキングの後ろに回って合体ジョイント部を破壊できるか試そうとする。

「ルナクローバー！背中を任せる！フォースチップ、イグニッション！ヴァーテックスキャノン……ブレイドお!!」

「了解です！任せてくだ、あぶないっ！」

ルナクローバーが後方にビームを放つ。そちらから、ビームの雨が降り注いだ。俺とルナクローバーは間一髪、それを躲かわす。

「貴様、サイクロナス！それとスウィープスども！」

「スタースクリーム、今日が貴様の最期だ！」

「スウィープスどもお！撃て撃て撃てー！」

ち、雑魚どもの割に動きが……いざとなったら、切り札を切る、か？巨大化を……。

俺がそう思った瞬間、脳裏でベクタープライムが首を左右に振るイメージが浮かんだ。……なんだ？こんなところで使うべき能力じゃないとでも言うのか？

戦いはなおも続いた。サイクロナスが、ウルトラマグナスと撃ち合っているのが見える。俺はとりあえず自由になった。プレダキングと3体の味方合体トランスフォーマーは、相打ちになった。相打ちと言うか、双方ともエネルギーを消耗して、合体を維持できなくなったんだ。今は分離状態で、ドンパチやつてる。はつきり言って、消耗戦になっている。このままなら、数に勝るセイバートロン星側が有利だろう。

そして俺に、緊急通信が入った。俺は焦って、コンボイとオクトーンを探す。……居た！

「コンボイ！オクトーン！」

「スタースクリーム!!」

「地下で警備していたNAI-L防衛軍が、シャークトロン……クインテツサ星人の手下と交戦中だ！」

「!!」

うん、しばし前にも言ったけど、『2010』の第5話で、クインテツサ星人が古代に遺した、トランスフォーマーたちをサイバートロンもデストロンも区別無く凍り付かせて

生命活動を停止させるシステム、瞬間凍結装置。俺もサイバトロン自治区の連中もデストロン自治区の奴らも、皆が皆、ソレを探してただけだな。見つかって無えんだよ。『2010』が始まる前に、搜索して破棄しちまうつもりだったんだが。

そこへ、陸橋の上からガルバトロン派トリプルエンジンジャーのブリッツウイングが落下して来た。コンボイとオクトーン、そして俺、ルナクローバーは銃を向ける。けど俺は撃つ気はない。おそらくこいつの言う事は、想像がついた。

「ま、待て！撃つな！聞いて欲しい事があるんだ！このままだとデストロンもサイバトロンも滅んでしまうー！」

「ブリッツウイング、お前もソレに気付いたか。」

「な、何!?!知ってるのか!?!」

「地下に全トランスフォーマーを死に導く、瞬間凍結装置が存在する事は知っていた。それを必死で搜索してたんだがな、破棄するため。」

お前らと言うか、ガルバトロンがクインテツサ星人に、まんまと騙されたんだろう?」
ブリッツウイングは一瞬啞然としたが、すぐに頷く。

「そ、そうだ。デストロンのマトリクスなんて、元から存在しない物を手に入れろと煽^{あお}られて……。」

「馬鹿な事を……。」

「コンボイ、俺も馬鹿だと思うが、それよりも今は地下に救援に行くぞ！」
その場の全員が、ブリッツウイングまで含めて頷いた。

俺たちは、地下でシャークトロントもを蹴散らした。危うくスイッチを入れられそうになったんだけどな。瞬間凍結装置の。NAIL防衛軍の警備員たちも、負傷者が多い。まったくたまったもんじゃ無え。

「こんな隠し部屋にありやがったのか。瞬間凍結装置……。」

「うむ、こんな物はさっさと壊してしまおう。」

「そうだね、コンボイ。同意するよ。……どうしたね？スタースクリーム殿。」

「いや、こんな時にガルバトロンが扉から飛び込んできそうな気がしてな。」

「「「……ありそう。」」」」

俺はセンサーを全開にして、扉の方向を注意してたんだ。『2010』のアニメではそうだったからな。だがアニメと現実はやはり違うと思いきらされた。……ガルバトロンの阿呆は、天井を突き破って出現しやがったんだ。よりによって、瞬間凍結装置の傍らに。

「貴様、ブリッツウイング……。裏切ってそ奴らに付きおったな!?!いや、上手くやってデストロンのマトリクスを自分で手に入れるつもりなんだろう!」

「が、ガルバトロン様！違います！デストロンのマトリクスなんて、存在しないのです！あのクインテツサ星人が、我々を上手くこき使うための嘘なのです！しかもあいつらは、最後には……。」

「黙れ黙れ!! 貴様の言う事など信じられるか！ははあん、このスイッチだな!」

「やめろガルバトロン!」

「馬鹿野郎! やめるんだ!」

くそ、この場にはスパイクが居ねえ!! アニメの『2010』では皆が凍結された後に、スパイクが銃を撃って装置を破壊して、皆が甦よみがえったのに! 万事休すじゃねえかよ!

そしてガルバトロンの阿呆が、スイッチを入れた。

凍り付いた俺たちの前を、多面のタコみたいなクインテツサ星人4体がふよふよと浮遊移動して行く。これでセイバートロン星を取り戻せたとか何とか、楽し気な様子だ。だがな。俺は凍り付いた事は凍り付いたが、スパークの奥底になにやら熱を感じる事に気付いたんだ。

うん、考えればわかる事だった。俺のスパークたましいは、並行異世界の地球人の魂たましいと、かつての『俺スタースクリーム』のスパークたましいの融合体なんだ。つまり俺には、まだやれる事が残ってるん

だよ！そして俺は、凍り付いてしまったからこそ気付く事ができた、スパークの奥底から湧き出て来るエネルギーを汲み上げて、瞬間凍結装置に叩きつけた。

「うわあっ!? 瞬間凍結装置が!!」

「何が起きたのだ!？」

「この様な事象が起きうる可能性は、0.11%にも満たない。」

そして俺たちの凍結は解けた。クインテッサ星人は、慌てて逃げ出して行く。ガルバトロンはようやく自分が騙されていた事に気付いたんだろう。憤怒ふんぬの形相でクインテッサ星人を追った。

「おのれ！待て！そのタコのような脚を引き抜いて、食ってやるわ!」

「わたしたちも追うぞ!」

コンボイ、オクトーン、ブリッツウイングがその後を追う。と、それに追従しようとしていたルナクローバーが、俺の様子が変なのに気付く。って言うか、気付いてもらえて良かった。ぶっちゃけ、疲れ果ててたんだ。

「ど、どうしたんですかスタースクリーム様!？」

「いや、凍結されてた間、念力もどきで瞬間凍結装置破壊したら、使い慣れない能力のうりよく使ったんでな。ぶっちゃけ疲れた。」

「か、肩をお貸ししますね!」

「情けねえが、濟まんが頼む。」

俺とルナクローバーは、ふらふらとした足取りで奴らを追った。そして地上に出たとき、コンボイとオクトーンがガルバトロンと銃を突き付け合っている所だった。クイン・テッサ星人には逃げられたのかよ……。ここでブリッツウイングが、『2010』のアニメで屈指とも言える、一連の名言を吐いた。

「やめてください！これ以上の戦いは無意味です。3人とも武器を下ろさないと、撃つ！」

「きさまわしに向かってこんな真似をして、二度とデストロンに戻れると思うな！」

「もううんざりですガルバトロン。貴方にリーダーの資格はない！」

「よくもほざきおったなブリッツウイング。この貸しは高くつくぞ！よく覚えておけい！デストロン軍団、^{リトリート}退却！」

うん、ガルバトロンにやリーダーの資格は無えわな。メガトロン時代ならともかく。俺はエネルギー残量はともかく、疲労が凄まじくトンデモ無かったので、追撃とかできなかった。ちくしょう。追撃できてたら、ガルバトロンを今度こそ消滅するまで叩いたのに。

デストロン軍団が退却して行く。それを寂しそうに見つめていたブリッツウイングだったが、やがてしゅんぼりと立ち去ろうとした。そこへコンボイが声を掛ける。

「待て、ブリッツウイング。」

「撃つなら撃ちやがれコンボイ……。」

「いや、今日君がやってくれた事は、とても大きな事だ。撃つつもりは無いとも。……だが、何処へ行くのかね？」

「さあな。行くところなんて、無えよ。」

「ブリッツウイング!!」

あ、オクトーンが動いた。

「ブリッツウイング、どうかわたしの……俺の頼みを聞いてくれないか？」

「ふ、『俺』……か。さっきまでのとり澄ました口調より、そっちの方が懐かしくていいな。」

「茶化すなよ。今、セイバートロン星デストロン自治区のデストロンたちは、弱いんだ。いや、1対1とかなら強い。下手なサイバトロンや、NAIILの一般軍人には負けないだけだよ。俺の指揮下ならともかく、集団での戦いでは……。」

オクトーンは必死で続ける。

「頼むブリッツウイング、俺を助けてくれ。俺を、テロリスト『ガルバトロン派』なんかじゃなく、デストロン正規軍の『将軍』として支えてくれ！お前の力が、どうしても必要なんだよ！」

「……。」

「……。」

「俺が、『將軍』？」

「ああ！」

ブリッツウイングは、しばし悩んだ風情でいたんだが……。やがて、オクトーンの前に跪いた。

「このブリッツウイング、オクトーン総帥に忠誠を。」

「……ありがとうよ、ブリッツウイング。俺は、お前の期待を絶対に裏切らない事を誓うぞ。」

「期待を裏切りそうだったらよ。ぶん殴っても本道に戻してやるよ。」

「おお、怖えな。」

この調子なら、大丈夫そうだな。うん、サイバトロン自治区とデストロン自治区で、ちよつと格差が出てたのを心配してたんだよな。少しでも埋まりそうで、ほつとしたぜ。

だけど、どうしようかね。あの時にスパークの奥底から湧き出て来た念力じみた力。今はまだ自由には使えない。けど、使える様に努力して練習しておく必要が……あるん

じゃねえかな。この世界線が、日本版のアニメに準じて流れて行くんなら、そのうち必須になる能力だ。海外版の世界観に沿っていたとしても、あつて邪魔になるもんでもないが。

この超魂パワーじゃないかと思われる能力ちからは。

第22話：日常だつてのに、なんでこうも大変なんだ

腰部のビームキャノンから撃ち放ったビームが、訓練標的を粉碎して訓練場の壁に大穴を開ける。恐ろしい威力だ。ヴァーテックスキャノンに匹敵する。つて言うか、怖い。超魂パワーを武器に乗せて攻撃するのは、『超神マスターフォース』で必殺技的に使われてたけどさ。

……これで、ヴァーテックスキャノンやヴァーテックスブレイドに超魂パワー乗せたら、どうなるんだろう。何事も無い内に、試して置く必要があるだろうなあ……。ちなみに3種類の超魂パワー、宇宙の力を使う天超魂、地球つつうか惑星の大地の力を使う地超魂、人の魂の力を使う人超魂、俺は全部使う事ができた。いや、たぶん天地人のそれぞれの方だろうなー、つて思っただけなんだが。

いや、だつてよ……。超魂パワーつてこの時代だとメジャーじゃないじゃん。本当にこれが天超魂で、これが地超魂で、こいつが人超魂だつてカッチリしつかり調べらんねえよ。大体の感じとして、力の源が感覚的に大空から降つて来る奴を交換してるのか、大地から伝わって来るのを交換してるのか、それともスパークたましいの奥底から湧いて来るのか、それで分類してるだけなんだしな。

「ふう……。疲れたぜ」

うん、思いっきり疲れた。先日ほどじゃ無えけどな。先日、瞬間凍結装置で凍結されたときに初めて超魂。パワー……人超魂使ったんだが、そんなときはぶつちやけ人事不省になりそうなほど疲れた。何回か練習してある程度自由に使える様になった今では、『思いつき疲れる』って程度で済んでる。

ただなあ……。慣れるに従って疲労は減っては来ている。けれど、戦闘の邪魔にならないほどには減ってはいねえ。今の熟練度だと、超魂。パワーはトドメの一撃か、一か八かの賭けにしか使えねえな。

「あとは……。あれ、かあ。巨大化……」

うん、『ベクタープライムの警告』に従って良かった。実戦でうかつに使うと、やばい。スカイファイアー、サンダークワッカー、ルナクローバー、シックスショット、コンバツティコン、プロテクティコンと言った、絶対的に信頼できる奴らだけ集めて巨大化できる事を打ち明けて、万が一のときは俺を取り押さえろと命じて試してみたんだ。

頭悪くなった。

いや、合体闘士ぐらいのデカさになってみたらよ。はつきり言っただうにも頭に血エネルゴン

が回って無いみたいな感じだよ。論理的な思考が難しくなった。あと他に、闘争本能ってえか、破壊本能みたいなのが増しててよ。ちよつとばかり凶暴になってたなあ。

どのぐらいかって言うと、ちよつとした不機嫌で周囲の物に当たり散らしたくなる程度。このサイズだとそのぐらいで済んだんだが、やっぱりちよつと我慢が必要だったんだよな。

もしかしてプライマスのスパークじゃなく、ユニクロンのスパークなのが悪かったのかな？ いや、そんな事あ無えとは思うんだが。そういや、GFスタスクも、スーパーになったらちよつと頭悪くなつてたしな。妙に好戦的だったし。って言うか揉め事があつた時とか、頭脳じゃなく力で全部解決しようとしてたよな、アニメだと。

結局、身体の大きさを元に戻せばいいんじゃないやね？ って考え付いたのは、頑張つて我慢して、ちよつと経つた後の事だった。やっぱり頭悪くなつてたな。

「巨大化は、ほんとに最後の最後の手段にしとこう。必要なときは、パンチとかキックを一瞬巨大化させるだけにして」

ほんとに、どの能力も落とし穴があるもんだ。そう思つて溜息を吐く。そのとき、あの事に気付いた。

「……巨大化してヴァーテックスキャノンやブレイド使う時、更に超魂パワー使ったらどうなるっ？」

……おつかねえから、考えない事にした。

さて、先日のガルバトロン派襲撃なんだが。普通の巨大戦士2く3体と互角に戦える巨重合体兵プレダキングのおかげで、えらい損害だった。ことにサイバトロン自治区は一番酷い目に遭っている。まったくガルバトロン派、ろくな事しねえ。

ちなみに地球も同時攻撃を受けて、大損害とまではいかないが結構な被害が出たらしい。おそらくはこれもプレダキングのアニマトロン部隊同様に、クインテツサ星人の力を借りて命を吹き込んだんだろう。ガルバトロン派のダイノベース……。つまり超巨大なトランスフォーマーであるダイナザウラーが暴れまわったんだ。

幸いにもサイバトロン軍団のスクランブルシティ、超巨大トランスフォーマーのメトロフレックスへのトランスフォーム・コグ取り付けが間に合い、撃退に成功したんだが。ほんとに間に合つてよかった。

なお軍事バランスを整えるために、セイバートロン星のデストロンとNAIILにおいてもそれぞれスクランブルシティ計画は立ち上がっている。もつとも進捗度合いはあんまり行つてないけどよ。だけど3陣営の軍事バランスは、できるかぎり保つて置かないやならねえ。

可能ならば3陣営のうちNAIILの軍事力は、他の2陣営が協力態勢を取つても勝ち

得るレベルにしておきたいんだがよ。そうも行かねえ。んな事したら、NAIILが他の2陣営を信じてねえって言うてる様なもんだし。だから3陣営のそれぞれが、他の2陣営が協力すれば抑えられる程度のバランスにして置く。

今のところ突出してるのが、メトロフレックスを完成させたサイバトロンだ。ただしメトロフレックスは地球に居るから、セイバートロン星での軍事バランスには直接の影響は少ねえ。

まあだけど、NAIILとデストロンのスクランブルシティも、完成したら地球防衛部隊に置くのが良いかな。どうせダイナザウラーも地球に潜伏してるみたいだし。各勢力の戦力バランス的に。

スカイファイアーが誘拐された。クインテツサ星人が、トランスフォーマーの精神、性格を調査して自分たちの知識との違いを確認するために、トランスフォーマー各陣営から1人ずつ、そして地球人から地球防衛軍のメリツサ・フェアボーン大尉を誘拐しやがったんだ。

俺は『トランスフォーマー2010』のストーリーを知ってたから、この事件は警戒してたんだがな。ほんの僅かな差で、阻止に失敗した。だが阻止に失敗する可能性も考えて、サイバトロン陣営、オクトーン率いるデストロン主流派陣営、ジャンキオン、地

球防衛軍には根回しをしておいたんだ。

各陣営は急ぎ協力し、捜索隊を編制。そしてサイバトロンのUFO型トランスフォーマーであるアダムスが、不審な宇宙船を発見したんだ。ちょうど内部では、誘拐された者たちが脱出を試みていたらしく、アダムスは彼らの発信したSOSを受信、すかさず報告して来た。俺たちは大至急、不審船を拿捕して仲間達を救うべく、用意していた攻撃部隊を発進させたんだ。

なんとかクインテッサ星人の宇宙船がブラックホールに落ちる前に、拿捕する事ができたんだよな。ガルバトロンの派から攫さらわれたサイクロナスは、直前で逃げて行ったが。犯人のクインテッサ星人は、配下のシャークトロン・ガードを見捨てて脱出ポッドで逃亡した。

こんなわけで、NAIILのスカイファイアー、サイバトロンのウルトラマグナス、デストロン主流派のラナマック、ジャンキオンのレックガー、地球防衛軍のメリッサ大尉は救出された。シャークトロン・ガードは兵装やトランスフォームの回線をカットして、拘置所行きだ。裁判の結果、たぶん刑務所行きになるとは思うんだけどな。

宇宙には、磁気の渦によって航行不能な領域が存在する。その磁気の渦の向こうには、惑星パラドロンと言う、エネルギーに満ち溢れた惑星がある。この惑星にはかつて

グレートウォーの時代、戦いから逃れたサイバトロンたちが疎開していた。

そして現在、このサイバトロンたちは数百万年に渡り、奇跡的に戦いの無い世界を創り上げていたりする。だがしかし、反面このサイバトロンたちは完全に平和ボケしていた。彼等は、全てが話し合いで解決できると言う理想を持っているのはいいのだが、それが現実には合致しない場合もあると言う事を理解しない。

そんなもんで、俺たちNAIIL、サイバトロン、デストロン主流派が特殊仕様の宇宙船で向こうに向いて交流を開始したんだが。向こうはかつての故郷セイバートロン星が復興した事を喜び、交易を行う事にはもろ手を挙げて賛成してくれた。だが反面、ガルバトロン派の襲撃に備えてこちら3陣営の防衛部隊を駐留させる事に関しては、表向きやんわりと、その実頑固なまでに拒否したんだよな。

そして今、独断で単身磁気の渦を超えて来た惑星パラドロンの民、トリプルチェンジャーであるトリプルボットの1人、サンドストームが必死にこちらへ頭を下げてくる。

「惑星パラドロン政府の判断は間違っていました！　今、惑星パラドロンはガルバトロンの手に落ちようとしています！　どうか、どうか援軍の派遣を！」

緊急で集まった俺、コンボイ、オクトーンの3人は、互いに顔を見合わせる。コンボイは重々しく言った。

「わたしたちサイバトロンとしては、同胞たるパラドロンの民が窮地に陥っているのを見捨てるわけにはいかない」

「デストロンとしても、テロリストであるガルバトロン派が、潤沢なエネルギーの供給源を得て強大化するの、なんとしても防ぎたいね」

オクトーンも語る。俺も正直、賛同したいはしたいんだが、まあ言わなきゃならん事は言つて置こうか。

「俺とNAIILも、援軍の派遣には賛成だ。賛成なんだが……。サンドストーム、必死になつてるお前さんにや悪いが、お前さんはパラドロン政府の代表じゃねえだろ？ その辺をなんとかクリアにしねえと、後々問題になる」

「た、たしかにそうかも知れませんが！」

「と言うわけでお前さん。俺たちは出撃準備してるから、お前さんは星間テレビに出演してくれ」

「「……は？」」

サンドストームだけじゃなく、コンボイとオクトーンまで変な顔して啞然としやがった。

そしてNAIIL、サイバトロン、デストロン主流派の3陣営が合同で編制した惑星パ

ラドロン救援軍が、磁気の渦を越えられる特殊仕様宇宙船の艦隊に乗って出撃して行く。『技術屋の天国』の指令室で、俺は離床して行く宇宙船群を、映像スクリーンで眺めていた。

視界の端では、別のスクリーンにニュース番組が映っている。そこではあのサンドストームが、『ガルバトロン派の侵略を受けた惑星パラドロンから、命からがら脱出して来た悲劇の一般人』として、涙ながらの懇願をしていた。このニュースは、既に何回も何回も放映されている。

これにより、少なくとも地球やセイバートロン星の圏内では、今回の惑星パラドロンへの派兵について、後で文句を言う奴はいないだろう。と言うか、言えない様な世論を作り上げている。

「後は、救援軍がなんとか惑星パラドロン救援に成功してくれば、万々歳なんだが」「無いとは思うんですけどー。救援軍指揮官のウルトラマグナスあたりが短気起こして、ガルバトロン派にパラドロン渡さないために惑星を爆破しちゃったり」

「ルナクローバー、頼むから危ねえ事言わねえでくれねえか？ 口に出したりしたら、本当にそれで怖い」

「いや。イカレ暴走族は今回従軍して無えから、たぶん大丈夫だと思っただが。頼むから、ふっ飛ばさないでくれよー？ 惑星パラドロンを。」

結局のところ、アニメの『トランスフォーマー2010』と違って惑星パラドロンは、無事生き残った。惑星の傷は深かったものの、なんとかかんとかガルバトロン派を撤退させたんだ。その上で、惑星パラドロンにはサイバトロン、デストロン、NAILの大使館が置かれる事になった。

……まあ、大使館って言ってもその実は、軍事基地なんだけだな。惑星パラドロン政府も、今回の事で少し方針を変える模様。市民から兵を募り、ガルバトロン派などから自衛するための防衛軍を編制したんだ。数は少なえが。だがこの宇宙には、話を通じない連中もいるとの認識を持つ様になったのは、大きな変化だ。

ちなみにサンドストームは、アニメの『トランスフォーマー2010』通りにサイバトロン軍団入りした。そして今は地球のサイバトロン大使館勤めをしている模様。まあ、丸く収まって良かった。

そして今、俺は深く悩んでいた。このまま世界が推移して行けば、近い将来この宇宙は、対ユニクロン戦かそれ以上の脅威にさらされる事になる。アニメの『トランスフォーマー2010』での知識では、確かに枠こそ普通の30分弱の放映枠ではあったものの、劇場版の映画以上にヤバい事態が待ち受けているのだ。

「全宇宙のエネルギーを吸い尽す化け物、エネルギー生命体トルネドロン……。ユニクロンを創り出した天才にして天災科学者プリマクロンの新作」

「基本的に事情を知ってるのは、わたしと君だけだからねえ。かと言って、未来情報を他
トランスフォーマー
人 に明かしたりしたら、気がふれたと思われるのがオチだろうし」

俺とスカイファイアーは、考え込む。スカイファイアーは俺にアニメ知識があるのも知ってるからなあ。一人で悩まずに済んで、本当に良かったと思う。

「とりあえず、ユニクロンを創ったのもプリマクロンなんだよね？ それを建前にして、プリマクロンを搜索させたらどうかな？ 賞金でもかけて」

「それしか無いか……」

うん、放置しておいてアニメ同様に、グリムロックの思いつきで宇宙が救われるなんて事は、期待しちやいかんだろう。いや、アニメではグリムロックの本当に本気で単なる思い付きの行動で、宇宙が救われたんだ。だけどグリムロックにや悪いが、奴の思いつきに全てを賭ける気にはなれねえ。うん、物凄く恐ろしい。

スカイファイアーの言った通り、NAIILが中心になって、賞金付きでプリマクロンを探させる事にした。見つかってくれるといいんだが……。

第23話：研究がしたいです

今日も今日とて俺は、セイバートロン星は『テクノリアース・ヘブン技術屋の天国』の司令室にて、副官のルナクローバーと共に大量の仕事を捌いていた。いや、本当はスカイファイアーやコンバッティコンと共に、ある新合金の開発研究をしたいんだが。と言うか、その新合金は今後非常に、極めて、思いつきり重要になる代物なんだよな。

だけど俺は、これでもセイバートロン星最大勢力にして、サイバトロンとデストロンの均衡を保っている中立勢力NAIILの、そのトップだ。リーダーだ。先々に重要になる代物だからと言って、それにかまけて目先の事を放置するわけにもいかないんだ。

いや、目先の事よりも将来を見据えろって意見も、無いわけじゃないだろう。だけど卑近の事象を大事にせずに、遠くばかり眺めて歩いて、足元にある石に蹴躓けつまずいてスツ転ぶわけにやいかんのだ。特にNAIILの立ち位置からすりやあな。

俺がこければ、NAIILがこける。NAIILがこければ、サイバトロンとデストロン主流派がこける。セイバートロン星3勢力がこければ、セイバートロン星がこける。セイバートロン星がこければ、地球やら惑星パラドロンやら惑星ジャンキオンやら、連携してる星々がこける。喜ぶのはガルバトロン派だけだ。

そんなわけで、今日も今日とて俺は事務仕事とか、色んな計画プロジェクトの管理とか、NAI L 防衛軍の軍司令官としての仕事とか、雑多な仕事をこなしていた。

「ふう……。スカイファイアーたちの研究は、進んでるのか？ ルナクローバー」

「はい！ 今日、日付が変わった頃によく新合金の精製に成功したそうです！」

「そうか！ やったか！」

「ただ……。今の技術ですと、実験室内での少量の精製がやっとだそう。今後は、大量生産できる様に生産技術を煮詰めなければならぬって話でした。実用化には、まだまだ時間が必要みたいです」

「それは……。残念だな。いや、今後に期待か」

「そうかー。新合金の実用化には、まだまだ時間が必要かー。いや、何の新合金かって言うと、強力な耐熱合金なんだ。『トランスフォーマー2010』の最終回で、人間や超ロボット生命体、その他の知性体がまわすに感染し、発症して狂暴化させる『宇宙ペスト』。その対策として、この耐熱合金を研究させてたんだよな。アニメでは地球人のグレゴリー・スワツフォード博士の研究成果なんだが。」

まあ外装表面をコレでメッキできる、トランスフォーマーとかの超ロボット生命体じゃないと、意味の無い対策なんだが。これで表面をガードすれば、宇宙ペストは少なくともトランスフォーマーに感染はしない。そうすれば、抜本的、根本的な対策を取る

余裕ができるってもんだ。

できる事ならやつぱり、サイバトロンのマトリクスには頼りたく無いんだよな。サイバトロンのマトリクスは、『宇宙ペスト』消滅のために使っちゃまうと全エネルギーと内部に蓄えられた『叡智の力』を失ってしまふ。エネルギーは再度蓄える事ができても、『叡智の力』が失われるのは避けたいからなあ……。

宇宙ペストの根本対策として、ワクチンとか特效薬とかの研究もしたいけれど、病原体を手に入れないとソレは不可能だし。あれは種族とか関係なしで、耐熱合金除けば基本的に防護とか関係なしで感染しやがるし。だから、あえて病原体は搜索させてないだよな。

それと最近、当のグレゴリー・スワッフオード博士とか、それ以外にもマーク・モーガン博士についても、地球に縁が深いサイバトロンの通じて探してもらっている。特にスワッフオード博士はアニメでは、コンボイとメガトロンの戦いに巻き込まれて顔に大怪我させられて、トランスフォーマー全体を恨んでるって事だったからな。

この世界でも、スワッフオード博士がトランスフォーマーを恨んでいた場合、宇宙ペストの病原体を手に入れて復讐に走りかねない。モーガン博士もアニメでは、娘がデストロンとサイバトロンの戦闘に巻き込まれて下半身不随になっちゃまって、トランスフォーマーを恨んでスワッフオード博士と組むんだよなあ。

そんなもんで、俺は万一に備えて有機生命体の再生医療に關しても、かなり大枚の金額を投資させているし、個人としても投資している。いや、有機生命体の再生医療は、俺たちトランスフォーマーは門外漢だからなあ。自前で研究するよりか、金出して研究してもらった方が早いんだ。一応、必要とあらば俺たちの科学技術も、きちんと提供しているんだが。

そんな事を考えていたら、突然壁のディスプレイ画面に通信が入る。サンダークラックカーからの連絡だ。

『スタースクリーム！ 見つけたぜ！ トランスオーガニックの封印場所だ！』

「見つけたか！ 扱いには注意するんだぞ！ 絶対に、目覚めさせるな！」

『わかってらい！ トランスオーガニック、特にその親玉にエネルギーを吸われ尽したら、そいつの操り人形にされちゃうんだろ？ くわばら、くわばら。』

しかし以前の瞬間凍結装置と言い、このトランスオーガニックと言い、クインテツサ星人はいったいどれだけのヤバイ代物を、セイバートロン星に遺していきやがったんだか……』

トランスオーガニックとは、クインテツサ星人が超ロボット生命体の原型であるロボットたちを開発する以前に研究していた、有機生命体と機械を融合させた生命体の事だ。だがその研究は上手く行かず、他のあらゆる生き物、クインテツサ星人をも襲う恐

るべき怪物を生み出しただけに終わったんだよな。

そしてクインテツサ星人は、そのトランスオーガニツクをどうにかこうにか封印する事に成功した。トランスオーガニツクの事は、セイバートロン星の地下深くに恐怖の化け物が住み着いているって言う都市伝説じみた噂話になってたんだよなあ……。

でも、トランスオーガニツクを放置しておくわけにも行かないんだ。アニメだと、クインテツサ星人に唆そそのかされたガルバトロンと不愉快な手下サイクロナスとスカージとんえいたいどもが、トランスオーガニツクを解放しちまってセイバートロン星が大混乱になるんだよ。

だもんで俺は、サンダークラッカーに搜索チームを作らせて、トランスオーガニツクの封印場所を探させていたんだ。瞬間凍結装置のときは見つけるのに失敗して、ガルバトロンフロックの阿呆にスイッチを入れさせちまったが……。今度は間に合ったな。

「計画では、そいつらの封印されてる区画をそのまんま切り離す。そして以前にブラツクホール炉を造るために天然ブラツクホールを探したとき、大きすぎて炉には使えなかったブラツクホールがあるんだが。それに封印状態のまんま、落とし込む」

『壮大な宇宙のゴミ処理場、違うな、危険物処理場ってわけだ』
「そう言う事だ」

俺はその後、サンダークラッカーとその配下たちに事細かに指示し、そのあたりのブラツクをセイバートロン星そのものから切り離す作業を行わせた。更にその辺り一帯

の警戒レベルを上げ、ガルバトロン派の侵入に備えさせる。

いや、あの頭の悪いと言うか、俺たちトランスフォーマーに対す固定観念に頭が固まってやがるクインテッサ星人の事だ。たぶんほぼ確実に、トランスオーガニックを使った作戦立てるんじゃないやねえかな。アニメ通りに。

うん、やっぱりガルバトロンとクインテッサ星人どもはやって来た。ガルバトロン、また騙されてやがる。クインテッサ星人は、ガルバトロンを騙してトランスオーガニックを復活させ、セイバートロン星を壊滅させるつもりなんだ。

ちなみに俺は、その様子を現場近くの監視カメラの映像で、しっかり観ていたりする。『この大昔の廃坑を辿っていけば、NAILの研究所の真下に出られる。そこでは新エネルギーの研究が行われている』

『その研究成果を奪取さえすれば、むしろデストロン軍団はよりいっそう戦力を充実させられる、と言うわけか。だが釘を刺しておくぞ？ 貴様らクインテッサどもが、わしを騙そうとしているのなら……』

『我々クインテッサには、いろいろな人種がある。わしらが、お前を以前騙した様な者と同一の種族に見えるのかね？』

『……よかろう。者ども、いくぞー！』

『『『『ハイル！』ガルバトロン！』』』』』』

まったく、この阿呆ガルバトロンが。ただ今回は、隠密作戦つて事もあつて、ガルバトロン、サイクロナス、スカージとスウィープスどもと言う面々だ。スタントロンとかビルドロンは連れて来ていない。サウンドウエーブとカセットロンぐらいは連れて来るかと思つたんだがな？

『そこまでだ、ガルバトロン！』

『な、何っ！ 貴様はサンダークラッカー！』

『馬鹿な、我々の計算では、発見されるはずが……』

『その廃坑の奥に封印されてたトランスオーガニックは、もう先日いきなり始末済みだ。ガルバトロン、あんたもまたソイツらに騙されて、ご苦労さんなこつたな？』

『な、なんだと!?!』

そしてサンダークラッカーとプロテクテイコン、更に彼らが率いるNAI-L防衛軍一般軍人たちと、ガルバトロンと不愉快な手下サイクロナスとスカージとじんぐえんたどもの戦いが始まった。敵もいくら精鋭とは言え、戦力差があり過ぎる。すぐに不利になって、慌てて敗走していった。

まあ、ただじゃ逃がしやしねえよ？ 流石に現場に貼り付けていられる戦力には、限度があつたけどよ。サイバトロン軍団とデストロン主流派にも急ぎ連絡を取つて、追撃部隊を放つたんだ。ガルバトロンはスウィープスのうち2名ほどを見捨てて、なんとか

逃げのびたけどな。

その2名のスウィープスは、とりあえず拘置所送りだ。この後行われる裁判の結果、おそらくは刑務所送りだろうな。ただこいつらの量刑がどのぐらいになるのかは、ちよつと分からないけどよ。一応ガルバトロンの親衛隊だからなあ。

ちなみにガルバトロンを騙したクインテッサ星人だが、あいつらは、きつちり捕まえる事に成功した。あいつらも拘置所に入れて裁判が待ってるんだが、どんだけ求刑されるやら。死刑判決とか、あいつらの場合は有り得るからなあ。これまでにやって来た事がやって来た事だし。

そして俺は、あいかわらず政務と軍司令官としての仕事で忙しい。ほんとはやりたい研究テーマとかあるんだがな。まあ、だけど超魂パワーとかの鍛錬は、なんとか時間ひねり出して頑張ってるけどよ。

そんなさなか、あるニュースが飛び込んで来る。エタクシス星とラナーク星は、何千年もの間、星間戦争を繰り返していた。だがその戦争がエスカレートし、ちよつと他所にも影響しそうになって来てたんだ。

そんなわけで、巻き込まれそうな近隣星域の住人たちが、俺たちNAIILに頼み込んで来たんだよな。何百万年にも渡ったセイバートロン星のグレートウォーを仲裁、調停

して仲介を取り、サイバトロンとデストロンに講和条約を結ばせた実績のある俺たちに、力を貸してくれって。

ただなあ……。エタクシス星とラナーク星は、ちよつとなあ……。かつてのサイバトロンとデストロンと同じか、それ以上に喧嘩腰なんだ。しかも俺たちNAILは、ある意味サイバトロン軍団とデストロン軍団のどちらにも顔が利いた。だけどエタクシス星とラナーク星には、伝手が無えんだよ。どうしろって。

「こ言う時、証拠があればなあ……」

「何の証拠だい？ スタースクリーム」

「いや、な、スカイファイアー。『例の情報』の中に、あつたんだ。クインテツサ星人が両方の星に、武器をばら撒いて戦いを煽ってた、って証拠のデータを収めたカプセルが宇宙の何処かにあるって」

うん、『トランスフォーマー2010』のアニメ知識なだけだな、情報源は。スカイファイアーもソレは知っている。

「ああ、なるほど。それが見つかれば、クインテツサ星人の陰謀を暴いて糾弾し、双方の惑星の怨恨を諸悪の根源クインテツサせいじんにぶつける事が叶うわけだね」

「それで話を上手く持つて行ければ、両方の星に和平は無理でも停戦ぐらいはさせられないかな、とな」

とりあえずこの仲介要請は、受けざるを得ない。受けなければ、NAILの信用に傷が付く。NAILは正義の味方じゃねえけどよ、だからと言って頼って来た者の手を振り払っちゃ、まずいんだよな。

とりあえず、両方の惑星に使者を出すかあ……。

……。

……。

俺に研究をやらせろーー!! って、この状況下じゃあそうも行かんだよな。ちくしよう。

第24話：休戦とか色々

惑星トーキュロンが壊滅した。何が何だか分からないかも知れないが、これはガルバトロン派の……と言うよりは、ガルバトロン個人の仕業だった。何が起きたかは、ガルバトロン派にカウンターパンチとして潜り込んでいる、スペースパンチの報告でいただいた判明している。

まあ、何と言うかガルバトロン派内部では、キ〇ガイの様に暴れまくるだけのガルバトロンノ異常性に、いい加減我慢の限界に來た者たちが多く居るのだ。中でもその中心人物は、メガトロンには絶対的な忠誠を尽くしていたスタントロン部隊参謀、モーターマスターだと言うのだから、何と言えば良いのか。

そしてそれに危惧を抱いたガルバトロン派No.2のサイクロナスが、ガルバトロンを騙して宇宙の精神病院星、惑星トーキュロンへ連れて行つたのだ。その裏に何やらクインテッサ星人も関与していた模様なのだが、そこら辺は良くわからない。しかし何にせよ、ガルバトロンは惑星トーキュロンで治療を受けた。

まあ、無駄だったんだがな。

そして惑星トーキュロンは、狂気をガルバトロンの精神ごと破壊しようとしたトーキュロン人医師に怒ったガルバトロンの手で、壊滅状態にさせられた。上手く復興したとしても、数百年は必要なありさまらしい。まあ、いくらなんでもソレは治療としては認められんだろう。

「そりゃあなあ……。あの狂気からは、理性ですら逃れられなかったんだからな」

俺はユニクロン戦争の最終局面、ユニクロンの中で一瞬だけメガトロンの精神を取り戻した、あのときのガルバトロンの思い出す。思わずため息が出た。

「返す返すも……。あのとき、ガルバトロンのボディを再生不能になるまで、破壊し尽してりや良かったよ……。奴のためにも、な」

涙腺も無いのに、涙が出そうだった。憎くて、恨んで、存在自体が許せなくて……。ただ、それでも俺スタースクリームの中では大きな存在であった破壊大帝メガترون。自分であそこまで追い詰めたとは言っても、そのなれの果ての有様が、哀しくて仕方がねえ。

「けど、センチになつてても仕方がねえな。オクトーンたちと話をしねえと。奴らも動いてはいるんだろうが……」

これはガルバトロンの派を解体縮小する、大きなチャンスだ。少なくともモーターマスタールとスタントロンをガルバトロンの派から引っこ抜けるならば……。オクトーンと、そ

の件についてホットラインで話さないといけないな。

それでもスタントロンどもが、俺たちNAIILやサイバトロンと上手くやれるかって問題はあるんだが。まあ、サイバトロンとは上手くやれなくても、離して置いときやどうにかなるんなら、それでいいんだがな。

嬉しい出来事があった。新規に多数の元サイバトロン、一部元デストロンのNAIIL市民が、文官としてこちらのスカウトにに応じてくれたんだ。さつそくこれまでの行政担当部署などに増員として配属する。いや、これで俺の負担も多少は減るだろう。

と言うか、NAIILは建前上軍事政権じゃないんだよな。何故か俺に権限と責任が集中する仕組みになってるけど、この辺は徐々に変えていかないとイカン。今の段階だと、政治リーダーと軍事司令官双方を俺が兼ねざるを得ないんだがなあ。

悲しい出来事があった。例のエネルギー生命体トルネドロンの製作者……になるはずの天災科学者プリマクロンを発見したと言う情報が飛び込んで来たんだが、間一髪で逃げられてしまった。流星天災にして天才科学者だけあって、奴の宇宙船はステルス能力も凄まじいらしい。一向に再発見はできなかった。

まずい、本気でまずい。プリマクロンの奴がエネルギー生命体トルネドロンを完成さ

せやがったら、立ち向かうどころか太刀打ちすらできやしねえ。とりあえずユニクロン製作の咎とがで指名手配すると同時に、奴が何か新しい計画を企んでいるらしいと噂を流したんだが。

それはそうと、エタクシス星とラナーク星の戦争なんだが。双方に使者を送って、このままだと双方共倒れになるぞと誠心誠意の説得を行った。結果、NAILの顔を潰して敵側に支援でもされたら大変だと、双方の惑星における国家主席同士が話し合いのテーブルに着いてくれる事になったんだ。

だけどウチの諜報主任シツクスシヨットの調査結果によれば、エタクシス星もラナーク星も、どちらもチャンスがあれば相手の星を滅ぼしてしまおうと画策しているらしい。うん、たぶんどちらの惑星にも、クインテツサ星人が最終兵器であるオメガ爆弾、つまり所謂『ちきゆういわゆるはかいばくだん』的な兵器を売りつけようとしているんだろう。だが今のところ、証拠物件が無いんだよ。

会谈の日まで、あまり時間が無い。なんとか証拠を手に入れられないか。もし証拠が手に入れば、双方の怨みをクインテツサ星人に向ける事ができる。そうすれば、講和条約や和平は無理でも、なんとか停戦ぐらいは……。

その事で悩んでいた時だ。デストロン主流派総帥オクトーンが、ホットラインで呼び

出しを掛けて来たのは。俺は急ぎ司令室から、指令室へと足を運ぶ。指令室の主コンピューターのディスプレイには、既にオクトーンが映っていた。

『やあ、NAIリーダー、スタースクリーム殿。実はどうにも困ってしまつてね……』
 「何があつたんだ？ オクトーン殿」

『実はガルバトロン派切り崩しのために、ウチからこつそりスタントロン部隊にコナを掛けてたのは知っているだろう？』

「ああ。何か進展があつたのか？」

『実は……』

オクトーンからの頼み事は、物凄く頭が痛い事だった。

今、俺はNAI本部である『エンジニアーズ・ヘブン技術屋の天国』内の、軍事演習場に来ている。今現在ここは、特に認められた者たち以外の立ち入りを厳重に徹底的に禁止し、たとえカセットロンやカセットボットでも侵入は不可能だ。

そして今ここに居る面々と言うと、まずはNAIから俺、スカイファイアー、サンダークラッカー、ルナクローバーと言う中枢メンバー。そしてコンバッティコンとプロテクティコンと言う合体闘士メンバーが来ている。

次にデストロン主流派から、オクトーン総帥にジェネラル將軍ブリッツウイング、そしてテラー

トロンの合体兵士メンバー。更にサイバトロンから、コンボイとエリーター・ワン、その上エアロボットの合体戦士メンバーが来ている。

なんと言うか、錚々たるメンバーだが、今回迎える客人が客人だから仕方がない。その客人なんだが……。

轟音と共に、黒っほいスペースシャトルが演習場の真ん中に着陸する。そしてその胴体の扉が開き、ガルバトロン派スタントロン部隊のデッドエンド、ドラッグストライプ、ブレークダウン、ワイルドライダーが次々に降りて来た。そして最後に降りて来たのは、当然ながらスタントロン参謀のモーターマスターだった。

ちなみに全員がスペースシャトルから降りると、シャトルもまた人型の超ロボット生命体、輸送参謀アストロトリントランスフォームに変形した。彼等は一様にしばしの間、黙ったままだったが、やがてモーターマスターが口を開く。

「……此度の事、申し出を受け入れてもらい、感謝する」

「やれやれ。やるんなら、さっさとやろうぜ？ たしか勝負の結果に関わらず、お前さんはセイバートロン星デストロン主流派へと帰順するって話だったな」

俺の言葉に、モーターマスターは頷く。

「ああ。だがその前に、ぜひとも……。いや、何としても、一度だけでいい、はつきりとした決着をつけておきたかった……」

ユニクロン戦争の数年前……。俺たちはメガトロン大帝の命により、そのルナクローバーとか言うお嬢さんを人質に、あんたを……。スタースクリームを誘き出し、殺そうとした」

「……」

「あの時、正直メガトロン様の命令だとは言え、あまりやる気は出なかったのは確かだ。勝負は見えていた……。と思っていたからな。だが結果は、あんた一人にデストロン全軍が惨敗した。」

俺は、俺たちスタントロンは、あんたと戦いたい。今度こそ、最初から本気で！ できてきつちりと決着をつけておきたいんだ！ 勝敗の決着は既についているかもしれない！ だが、俺たちの気持ちの決着をつけておかなければ、どうしようも無いんだ！」

俺はふと、モーターマスターがコンボイをライバル視していたと言う話を思い出す。だがあの、俺がメガトロンからルナクローバーを救い出した時の事件は、その感情を抑え込んでしまうほどの影響をこいつに与えていたのか……。俺はモーターマスターに向かい、言葉を紡ぐ。

「いいぜ。ただし、殺し殺されるまではやらん。勝負がついた、そう思ったらその時点で終わりだ。いいな？」

「それで構わん」

「よし。それとな？俺はあの時よりも強いぜ？」

「分かってるさ。審判は、もしよければだが……。コンボイ、頼めるか？」

モーターマスターの言葉に黙って頷き、コンボイが前に歩み出る。

「それでは両者、準備を」

「応。……フオースチップ！イグニッション！ヴァーテックス……キャノン！

ブウレイドオオオオオオ！！」

「スタントロン部隊！スクランブルパワー緊急用非常動力全開！ユナイト合体おおおお！！」

「！！おおー！！！！」

ガン！！　ゴン！！　ガゴゴン！！

轟音と共に、合体兵士メナゾールが誕生する。そしてコンボイが叫んだ。

「始めええええええつ！！」

「おおおおお！！」

メナゾールが俺に殴りかかる。だが俺はそれをスピードでかわ躲す。定石通りならば、ここは背後に回り込んで合体ジョイント部をヴァーテックスブレイドで斬り裂くところだが……。

（それは無粋だな）

俺は口の中だけで呟く。スタントロン連中の望む、心の決着をつけるためには、そう

言った小細工ではなく真正面からの力技で打倒せねばなるまい。となると、アレしか無えだろう。俺は、今まで仲間内だけの秘密にしていた物を、この場の連中、コンボイたちやオクトーンたちに明かす事を覚悟する。俺は叫んだ。

「いいか、お前ら！俺が暴走したら、全力で取り押さえろ！ぐおおあああああ！！」

そして俺の身体は、メナゾールと同等のサイズにまで巨大化した。

「「「「「なぐ！」「」「」」」」」

「リーダー……。やっちゃいますか……」

「熱いよなあ、ボスは」

「まったくだよ」

「きゃー！スタースクリーム様、すてきー！」

俺はせっかく起動したヴァーテックスキャノンとヴァーテックスブレイドだったが、使わずに殴りかかる。ま、頭悪いしな、今の俺は。メナゾールもまた、驚きはしたものの素直に殴りかかって来る。双方の拳が、双方の顔面に叩き込まれた。

そして俺は、身体を通常サイズにまで縮めてファーストエイドの手^リ当^ペて^アを受けていた。

「いてて。ファーストエイド、俺が終わったらスタンترون連中の手当ても頼むな」
「了解です、リーダー」

いや、試合はちゃんと勝ったよ？最後の決まり手は、『帰〇て来たウルト〇マン』のウルト〇ハリケーンと言うか、『仮面ラ〇ダー』のライ〇ーきりもみシュ〇トと言うか。あんな感じの投げ技だった。大回転して演習場の端に落着したメナゾールは、5人に分離して叩きつけられて、目を回してノックアウト。

それで俺は、しばし大空に向かって吠えてたんだけだな。スカイファイアーの、『そろそろ大きき戻したらどうだい？』って言葉で我に返ってな。うーん、巨大化した時は、誰かの指示を受けて戦った方がいいかも知れねえなあ。

そこへ、アストロトレインがモーターマスターに肩を貸しつつやって来る。奴は溜息交じりに言った。

「やれやれ。なんなんだよさっきのは」

「必殺技の巨大化能力だが？ スタントロン連中の漢気むじぎに答えて、披露ひろうする気になった」
「まあいいか。NAIリーダー、スタースクリーム殿。サイバトロン、コンボイ司令官殿。そしてデストロン主流派のオクトーン総帥閣下。俺たちはデストロン主流派のお誘いに乗らせていただき、デストロン主流派に帰順させていただく。」

ちなみに、これは手土産だ。なんかアニマトロンのプレダキングの野郎が、クイン

テッサ星人と取り合いをしてもぎ取って来た物なんだがな。正体がさっぱりわからねえ。あれだけクインテッサが欲しがってた物だしよ。そっちなら何か分かるんじゃないかねか？」

俺はアストロトレインが差し出したその物体、何やらカプセルらしい物に目を奪われる。それはクインテッサ星人のデータ記録カプセルだった。そう、アニメで登場した、クインテッサがあちこちの惑星に武器を流したり、陰謀を企んで支配下に置いたりした証拠のデータが入ったカプセルだったんだ。

そして、エタクシス星とラナーク星の惑星政府首班同士の会談の日、当然ながら俺たちは例のカプセルのデータを開示した。両惑星の代表たちは、自分たちの戦争がクインテッサに煽あおられて何千年も続いていた事に愕然とする。そしてクインテッサ星人に兵器の代価として、大枚を搾り取られていた事に憤慨ふんがいした。

「……ラナーク星代表。俺たちは貴様らが大嫌いだ。だが、クインテッサ星人に陥れられて戦争を続け、そちらはともかく、こちらまで滅ぶのは馬鹿馬鹿しいにも程がある」「その通りだな。完全に同意する。我々が貴様らを大嫌いだと言うところまで含めてな、エタクシス星代表」

「これからは、互いの星域の間に緩衝領域を設け、関係を断つてそれぞれ独自に暮らしを

営む事でどうか？」

「了承しよう。ただし何か罣があったなら、今度こそ容赦はせんぞ」

「それはこちらと同じだ。では……」

「双方の文官に、この内容を休戦条約としてまとめさせ、調印を行おうではないか」

俺は思った。こいつら、実は仲がいいんじゃないかねえの？ と。何はともあれ、これでN

AILの顔も潰れずに済んだ。何千年もの戦いを繰り広げて来たこいつらの惑星は、ようやくの事で一応の平和？ いや、平和か？ まあ、そんな感じの物を取り戻したのだった。

だけど、天災科学者プリマクロンだの、クインテツサ星人の更なる陰謀だの、他にも色々……。特に大急ぎなのは、プリマクロンが創つてるだろうエネルギー生命体トルネードロンの対策だ。どうにかする方法は、無えかなあ本当に。

第25話：アニメに無い事件

その日、俺はいつも通り多くの書類を捌きながら、プリマクロンとエネルギー生命体トルネドロンについて深く考え込んでいた。なんとかしてプリマクロンを発見し、可能であれば完成前にトルネドロンを破棄、滅却してしまわねばならない。起動してしまつたトルネドロンは無敵だ。真正面からでは、手の出しようが無い。

「だがなあ……。今の段階で、やれる事はやってあるんだよなあ……」

「宇宙での物資の流れも、可能な限りで調査してますが……」

「この間、変な資材の流れを追って行つたら、クインテッサ星人の兵器製造工場星だったもんなあ」

うん、ルナクローバーの言う通り、可能な限り情報を集めて、宇宙で不審な物資とかの流れも監視してもいるんだ。いくらプリマクロンだからって、ゼロから色々な物資を生み出すのはけっこうな難事のはず。だから何処かから物資類を手に入れてるはずだつて考えたんだがな。

そしたらプリマクロンじゃなく、クインテッサ星人があちこちの星に売りつけてる兵器を製造してる工場星にぶつかったんだ。その工場星は、NAIL、サイバトロン、デ

ストロン主流派が動かせるだけの部隊を繰り出して制圧。

そして様々な技術情報のコピーを取った後は、まかり間違つてクインテツサ星人に奪還されたり、ガルバトロン派に奪われたりしない様に『こんな物は壊してしまおう』と3軍司令官の全員一致で、工場星は爆破された。いや、生産力と言う面では既にセイバートロン星や地球だけで、充分な工業力があるからな。

それに、そのまま保持しておいたとして、そこに駐留させる軍事力も問題だ。はつきり言うのだな、兵力足りないんだ。ただでさえ、セイバートロン星、地球、惑星パラドロン、惑星ジャンキオンに防衛戦力置いといて、その上で惑星アセニアとかにも駐留部隊を派遣してるんだ。

今の俺トランスフォーマーたちは、セイバートロン星3陣営のNAIL、サイバトロン、デストロン主流派のバランスを崩さない様に俺、コンボイ、オクトーンの3人が必死で軍事力のバランスを保っているんだ。先日デストロン主流派に、スタントロン部隊とアストロトレインが帰順して、その代わりにデストロン主流派の新型合体兵士計画をストップさせたとか、俺たち3人、本当に苦労してるんだよ。

だもんで、そう簡単に兵力増やすわけにもいかない。兵力減らすわけにもいかない。あとサイバトロンがスクランブルシティを完成させてメトロフレックスが居るからな。
NAIL
ウチとデストロン主流派も、スクランブルシティ級の1,000mサイズトランス

フオーマーが必要なんだ。今そっちに注力してるから、他の兵力増やす余裕もないし。話を戻そう。そんなわけで、クインテツサ星人から奪取した工場星は爆破したんだ。クインテツサ星人涙目。ざまあみやがれ、だ。これで奴らの経済規模は、随分と縮小したはずだな。

「ふう……。ウチも地球防衛用のシーコン合体闘士キングポセイドンとか、コンバツティコンに続く科学者技術者集団のテックティコン合体闘士コンピューティコンとか、色々計画を凍結中なんだよなあ」

「兵力欲しいけど、勝手に増やすわけにはいかないって言うのはジレンマですよねー」
「ま、今の段階ではセイバートロン星3陣営が協調して事にあたれば、なんとか兵力も足りるしな。無い物ねだりは、よしとこう。さ、仕事の続きだ」

そんな感じで、司令室で仕事をしていた時だ。突然指令室のスカイファイアーから壁のディスプレイスクリーンに通信が入った。

『スタースクリーム！ 大変だよ！』

「どうしたスカイファイアー！」

『スペースパンチからの暗号通信だ！ ガルバトロンが、セイバートロン星のブラックホール炉衛星を狙ってる！ 唐突に思い付きで行動を始めたらしく、直前までわからなかったそうなんだ！』

「!!」

俺とルナクローバーは、表情を硬くする。

「36基の衛星のうち、どれだ!?!」

『わからない! ガルバトロンは、完全に思い付きだけで行動してるらしくて! No. 2のサイクロナスやスカージにも何も言わずに、ただ唐突に『NAILのブラックホール炉衛星だ! あれを南極の、オクトーンの頭上に落としてやるわ!』と叫んで単身飛び出したそうなんだ! サイクロナス、スカージとスウィープス、サウンドウェーブたちは後を追ったらしい!

サイクロナスは残りの面々に留守番を命じたって話で、スペースパンチはこれ以上動けないそうだ!』

「ちいっ! キチ○イめ! 対宙監視網を最大に! それとサイバトロン、デストロン主流派とのホットラインを開いてくれ! 俺も今すぐ指令室へ向かう!」

『了解だよ!』

俺とルナクローバーは、急ぎ指令室へと走った。

そして今、俺たちは出撃待機室に集合している。とりあえず使い捨てが前提の量産型ドロイド部隊を各ブラックホール炉衛星に多数貼り付けて、時間稼ぎをさせる作戦だ。

そしてガルバトロンが現れたならば、俺の超空間ゲートでこの場の面々を一気にそこへ送り込む。

ちなみにここに居るのは、NAIからは俺とコンバッティコン部隊。サイバトロンからはコンボイとエアロボット部隊。デストロン主流派からはオクトーンとアストロトレインとスタントロン部隊だ。

そしてついにガルバトロン出現の報が入る。場所は、今現在で最後に建造された第37番ブラックホール炉衛星だ。ちなみに36基なのに37番が最後だって言うのは、1基の衛星をユニクロンの背中に叩きつけて壊したので、数が合わないだけなのだ。

それはともかく、俺は叫ぶ。

「いくぞ、お前ら！ トランスフォーム！」

「「「「おおー！！」」」」

そして俺は、超空間ゲートを開いた。

超空間ゲートを越えた時、そこは量産型ドロイドの残骸でいっぱい空間だった。そしてサイクロナスとスカージ含むスウィープスどもを従えたガルバトロンが、その真つただ中で馬鹿笑いをしていやがる。ちくしよう、量産型ドロイドだって、只じゃねえんだぞ。

「トランスフォーム！ ガルバトロン、このキ○ガイめ！」

「おお、誰かと思えばスタースクリームではないか。出迎えご苦労、はあっはっはっは。だがの、今日用事があるのは貴様では無いのだ。オクトーン！ ブラックホール炉衛星を狙えば、貴様が出て来ると思っておったぞ！」

「ガルバトロン……。だからと言って、これだけの戦力差で勝てるでも思っているのかね？ わたしを誘き出すために、自分が死んではどうしようもあるまい？」

オクトーンの呆れかえった台詞に、ガルバトロンは嗤わらう。

「ククク。だがなオクトーンよ。その余裕もこれまでだ。スタントロン部隊！ アストロトレイン！ 裏切りは許してやろう！ オクトーンを叩き潰せ！」

「「「「嫌だね」」」」

「な、何っ!？」

俺もコンボイも、コンバッティコンたちもエアロボットたちも、呆れ果てた視線でガルバトロンを見遣る。ガルバトロンは叫んだ。

「馬鹿な！ 裏切り者のスタントロンとアストロトレインが再び寝返らんまではわかる！ だが、何故貴様らまでもが、その裏切り者どもを信じきっておるのだ！」

「や、奴らが動揺した隙について、オクトーンだけでも首を取るって話じゃなかったんですかい？」

「スカージ！ 余計な口を……」

スカージとサイクロナスが言い争っている。俺はガルバトロンに言ってやった。

「スタントロンたちの漢気はきつちりしつかり、見せてもらったんでな。ここに居る、全員がだ。それにアストロトレインは、そんなスタントロンたちを届けるために、下手したら逃げ出せないセイバートロン星の奥まで、わざわざ飛んで来たんだぜ？」

「その通りだ、ガルバトロン。その信義は、貴様には無い物だよ」

「お、おのれスタースクリーム、おのれコンボイっ!! こうなればオクトーンだけでも！
トランスフォーム！」

ガルバトロンがSFガンにトランスフォームした。だが、させんよ。俺は叫ぶ。

「コンバツティコン！ 撃て撃て撃てー!!」

「エアーボツト諸君！ 負けずに撃つんだ！」

「スタントロン部隊！ アストロトレイン！ 撃ち方始め！」

コンボイやオクトーンも叫ぶ。全員の全開射撃が、ガルバトロンに集中した。だが必死にサイクロナスがガルバトロンに体当たりして、砲撃を躲かわさせる。ぎりぎりはこちらの射撃は外れ、ガルバトロンの射撃は明後日の方向に飛んだ。

「が、ガルバトロン様！ ご無事で！ ぐわっ!？」

「馬鹿者！ わしの射撃が外れてしまったではないか！」

(((((いや、必死で命を助けた部下に、そりやないだろ))))

俺たち全員の思いは一つになった。サイクロナスを殴ったガルバトロンは、舌打ちして叫ぶ。

「ちっ……。ふははは、今日のところはこの辺にしておいてやろう！　だが、ここにサウンドウェーブがおらんのを、不思議に思わなんだか!?　奴は別のブラックホール衛星へ向かわせたわ！」

「何っ!?!」

「今頃は密かに警戒網を潜り抜けたサウンドウェーブの手で、その別の衛星が南極の裏切り者どもの本部へ落下し始めている頃だろうよ！　こう言う小細工をさせれば、奴の右に出る者はおらぬわ！」

ふはははは！　ではさらばだ！　デストロン軍団、撤退!!」

「あわわわ！」

「お、お待ちくださいガルバトロン様！　おいてかないでー！」

ガルバトロンは、右手のビーム砲からビームを噴いて、その反動推進で一気にこの現場を離脱して行く。だが俺たちは、それを追う余裕も無く、『エンジニアース・ヘブン技術屋の天国』の指令室に問い合わせをかけた。

「スカイファイアー！　応答しろ！」

『こちらNAI本部指令室、どうしたんだねスタースクリーム』

「全ブラックホール炉衛星をチェックしてくれ！ 軌道を外れている奴は無いか!」

『!! 何かあったんだね！ すぐチェックさせる』

しばし沈黙の時が流れる。俺は返答があり次第、超空間ゲートを展開できる様に準備をした。そしてスカイファイアーの声が俺たちに届く。

『チェックは完了したよ。軌道を外れている衛星は、1つも無い』

「!!!!!!?!!!!!!!」

俺たちは、啞然とする。そしてコンボイとオクトーンが口々に言った。

「さすがのサウンドウェーブでも、単騎で多数の戦闘ドロイドを突破するのは難しかったのか?」

「いや、直接戦闘では困難だろうけどね。奴がその気になれば、戦闘ドロイド相手ならセンサーを誤魔化して狂わせ、見つからずに通り抜けるのは不可能では無いよ?」

「だが、それでブラックホール炉衛星を落としても、今度は離脱が困難だろう。衛星が落ちるなら、セイバートロン星3勢力の軍が一齐に集まって来るのは目に見えている」

コンボイ、オクトーン、その他の面々は首を傾^かげて悩んでいる。俺も考え込んだ。だがその時、俺の頭に稲妻が走る。

「スカイファイアー! 刑務所に、プロテクティコンを走らせろ! 他の手すきの連中

も、全員だ！」

『りよ、了解だよスタースクリーム！ だけど何で？』

「サウンドウェーブの狙いは、刑務所に服役してるランブル、フレんジー、ラットバットだ！ 奴め、自分の大将を^{ガルバトロン}に^{オトリ}に使いやがった！」

「『『『『『！！』』』』』』」

全員が驚愕した。そしてスカイファイアーの声が答える。

『わかった！ すぐに手が空いてる全員を送る！』

「ち、間に合えばいいんだが……」

俺は小さく舌打ちをする。サウンドウェーブの奴め……。

結論から言えば、なんとか間に合った。サウンドウェーブ、コンドル、バズソー、ジャガー、オーバーキル、スラッグフェストの攻撃で、刑務所の看守たちや警護の兵士たちやドロイドが、かなりの被害を受けたんだが、それでも彼らは増援が行くまで刑務所を護り抜いてくれたんだ。

ちなみに襲撃に同調して、レーザーウェーブのド阿呆が暴動を起こそうとしやがった。だけどサンストーム、アシッドストーム、ホットリンク、ビットストリーム、ブランチヘイズ等々多数の旧デストロン軍団軍団員は、出所が間近であり再教育後はN A I

しやデストロン主流派が引き受け手になってくれる事が確定しているため、動かなかつたんだよな。

うん、あいつらには今のガルバトロンの醜態とかを撮影したニュース映像とか見せてやってるし。ガルバトロンの派に対する忠誠とかその類は、すり減ってやがるんだよな。レーザーウェーブは流石にソレが、俺たちの謀略だと決めつけているんだが。まあ謀略なのは否定しない。けれど謀略ではあるが、嘘は何一つ言っていないんだよな、コレが。

そして肝心のランブル、フレンジー、ラットバットだが。奴らは刑務所でも奥の方に収監されてるんで、今回の騒ぎは知らずにいる。知ってたら、たぶん騒ぎを起こしたんだろうなあ。奴らはメガトロンやガルバトロンはともかく、サウンドウェーブに対する忠誠は鋼のごとくだ。

「にしても……。サウンドウェーブが、とうとうガルバトロンの命令を無視したか。あげくに、ガルバトロンの^{オトリ}を^{オトリ}使った……」

「当然じゃないんですかー？ アレが頭だったら、わたしだって裏切りとか画策しますよー？」

「そう言う事じゃないんだよな。サウンドウェーブの奴の真意は、どこにあるのか。それ次第では……」

サウンドウェーブの理想は、何処にある？ 奴のメガトロンとデストロン軍団への忠

誠つぷりは、見事なもんだ。だが今は、デストロン軍団は大きく2つに割れ、数の上からも主流派はオクトーン派だ。

サウンドウェーブが未だにガルバトロン派に属しているのは、オクトーンのデストロン主流派が自分たちでの宇宙統一を掲げていないからではないか、と俺は考えていた。それが正しいのであれば、今回のサウンドウェーブの行動は、その真意はどこにある？ 「まったく、考え無きやならねえ事ばかり多くなるな。プリマクロンの搜索に、全力を注ぎてえのによ。」

プリマクロンの奴め、何処に居る？　そしてサウンドウェーブも……。ガルバトロンは思い付きで行動しやがるから、行いが読めねえし」

ああ、安寧が欲しい。たまには休みを取って、ルナクローバーをデートにでも連れ出してやりてえんだがな。そのぐらひは、せめてもしてやりてえよ。頑張つて働いてくれるんだし。ほんと、何時になつたら、のんびりできるんだかな。